

Yearbook 2021 Vol.46

Haus der Begegnung
(公財) 京都国際学生の家
Kyoto International Student House

特集 第3回公開講演会



公益財団法人京都国際学生の家 の 成立の趣旨

Kyoto International Student House ・ Haus der Begegnung Kyoto

PRINCIPLE AND PURPOSE

by Dr. Werner Kohler

“Haus der Begegnung” is a house where men from different continents and cultures, of different races and colors, different social strata, religions and outlooks live together. The house members face realistically the difference of national, cultural and religious backgrounds. It is a “House of Encounter” as its name “Haus der Begegnung” indicates. It is an experimental training place for peace, which is not merely absence of war, a training place for the construction of a new form of society necessitated by the demands of the world of tomorrow.

The house life is guided by the following considerations.

1. The living together in the International Student House Kyoto is not an end in itself. Nor is it a world of its own. It is concerned with the daily human society to which we all belong. Our human society, as history shows, is in need of constant renewal. Forms of society change, old traditions decline, new ones arise; but Life Together is the destination of man.

2. Life Together is life in relation with others, with those we like and those we dislike, with those who have different convictions and opinions. Life Together means love and respect for those who are different. We have the freedom to agree to disagree with one another.

3. Life Together is life in daily renewal. We all have a natural inclination to favor our own beliefs and concepts. The house members let themselves be mutually questioned and challenged in their opinions, attitudes and habits. By nature we are inclined to have relations with, and fulfill responsibilities to, our own family group and those of our own social milieu or those that are useful to us. We aim to outgrow these self-centered inclinations. Life Together allows for diversity and runs counter to conformity and unconformity. The traditional societies classify people according to their educational, political, moral and financial standards. Life Together transcends these traditional classes.

4. Life Together is an adventure and an experiment. “Haus der Begegnung” in Kyoto practices in small dimension a new form of society. This new society is both conservative and revolutionary in that it respects the past with its traditions and looks to the future with its possibilities. It is a form of society which is renewing itself in free self-criticism of its members. The basis of this Life Together is Life itself.

Thus it is hoped that students living in this house are willing on their own initiative to participate in various activities such as seminar-like meeting, common meals and house chores of different kinds.

*Dr. Kohler was the most central among the forwarder of HdB in 1965. He and Dr. Inagaki served as the first House Farther.

表紙デザイン作成者 吉田希海

表紙写真 表は清水寺の三重塔、裏は平安神宮の蒼龍楼：各寺社の使用許可取得

撮影日 2021.9.17.

【巻頭言】

ハウスは楽しいか

村田翼夫

(HdB 理事、Year Book 編集委員長、筑波大学名誉教授)

従来、レジデント達にハウスの印象を聞くと、「素晴らしい居場所」、「楽しい生活」といった感想が多かった。ハウスは基本的に楽しいところかどうか、について考えてみたい。

“Year Book” に発表されたレジデントたちのハウス生活に関する印象を読むと楽しいところという表現が多い。

「笑い、幸福、楽しさ、安定感に満ちている HdB 生活」(Vol. 42、イーギョンミン、韓国)。「集まってご飯を食べたり、ゲームをしたりと何事も楽しみながら生活しています」(Vol. 42、松浦、日本)。「喜び、悲しみ、怒り、生き生きとした感情が交わる。それに触れると私の心が豊かになっていく」(Vol. 42、河瀬、日本)。“All I can say is that I am so happy to be here. I am so glad HdB chose me.” (Vol. 45, Stellan, Uganda). ” We help each other out and we enjoy activities together. I sincerely hope that the joy, the warmth and the positivity in the house will continue.” (Vol. 42, I-ting Huai-chin Liu, Canada)、などである。

近年におけるコロナ禍の影響を受けた後では、レジデントのハウス観はどうであつたろうか。「家族に会えない、部活動の仲間にも会えない、学校の友人とも会えない、そんな寂しい時間を励ましてくれた唯一の存在が HdB であると思う。・・・こんな時期にお互いに支え合える仲間と出会えたことに本当に感謝している。」(Vol. 45、Kim Nayong、韓国)。「去年の行動を辿ると明らかに外に出る回数が減り、人と話す回数が激減しました。その中でも HdB に住んでいる人々と会うと、いつも通りに挨拶を交わして日常的な会話をすると非常に和んだ気持ちになり落ち着いた気持ちを保つことができました。」(Vol. 45、淵之上、日本)。このようにその時期には、ハウスの存在意義は一層高まっている。

OECD が行っている国際的な学力調査である PISA (Program for International Student Assessment) では、児童生徒に対する「生活満足度調査」も行っている。「学校は楽しいか」の直接的な質問ではないが、児童生徒にとって学校生活は大きな部分を占めるのでその結果も見ておきたい。

2018 年度の 72 ヶ国に対する同調査結果によれば、上位には東欧のカザフスタン (1 位)、アルバニア (2 位)、コソボ (3 位)、続いてドミニカ共和国 (4 位)、メキシコ (7 位)、パナマ (8 位) などの南米諸国があった。東南アジアのタイ (25 位)、インドネシア (26 位) も比較的高かった。それに対し、東アジアの韓国 (63 位)、中国 (65 位)、台湾 (66 位)、日本 (69 位) などは、下位に位置していた。それら東アジア諸国にお

ける児童生徒の学力調査結果（読会力、数学的リテラシー・理科的リテラシー等）は高く、トップグループに属している。一方、東欧、南米や東南アジア諸国の児童生徒の場合は、学力調査結果は低くなっている。

日本では、近年、文科省が「全国学力・学習状況調査」を行い、同時に「学校は楽しいか」の調査も行ってきた。小学6年生と中学3年生対象である。6年生の場合、「学校は楽しい」と答えた児童は、2013年以来52～56%で5割を超えていたが、昨年はじめて5割を切り47%となった。コロナ禍により楽しい活動が制限されたことが影響していると思われる。例えば、給食の時に「友達と話をするな」と注意されるので、「給食は楽しくない」という感想をもつ児童が多くなったと報告されている。

今春、英語による Dr. Gerald Fry 編集の “Happiness Education— Insights to Inform Effective Holistic Education for Sustainability—” (Routledge) という本が出版される予定である。「学校は楽しいか」ということに関する国際的な比較考察を行った画期的な書籍である。日本、韓国、ベトナム、タイ、マレーシア、スペイン、オランダ、メキシコ、ブラジルなど10か国が対象となっている。私は、日本のケースについて原稿執筆を依頼された。そのため、昨年（2021年6月～7月）、日本の児童に「学校は楽しいか」というアンケート調査を試みた。主に、京都市立第三錦林小学校、京都市紫竹児童館、福山市立山手小学校、甲府市の国際教室などの児童生徒、約360人を対象とした。

その結果をみると、「学校は楽しい」(60.1%)、「学校は楽しい時も、楽しくない時もある」(39.7%)、「学校は楽しくない」(0.2%)であった。楽しい理由として、最も多いのは、「友達との交流」(75.6%)、次が「体育・スポーツ」(61.9%)、「美術・音楽」(56.3%)であった。さらに、「給食」(43.7%)、「運動会」(42.3%)、「遠足」(41.1%)が続いた。「教員とのコミュニケーション」(40.0%)も比較的高かった。それに「クラブ活動」(35.8%)、「係活動（当番制）」(32.5%)も挙がっていた。主要教科の勉強より、「体育・スポーツ」や「美術・音楽」などの実技教科が好まれるし、友達や教員との交流・コミュニケーションが楽しい主な内容であることが注目される。

いずれにしても、これらの結果は、大学生とレベルは違うがハウスの生活と共通面も見られよう。先にみたレジデントたちの表現の根拠として、レジデント同士が会って話し合ったり、一緒にゲームやスポーツ（ピンポン、バトミントン、スポーツ大会など）、音楽（ピアノ、楽器演奏など）、それに旅行をしたりすることが楽しかったと述べられている。中には、大学から帰るといつも「お帰り」と言ってくれる方がいるのが嬉しいという意見もあった。レジデントのエッセイを読むと、コモン・ミールの意義を高く評価している感想が多かった。（それを通して1つの家族のように話し合い母国の食文化を理解する、キッチンでの料理作りも楽しい、など）。また、役割分担（当番制）によりいろんな仕事を共同で行うことで、レジデントとの交流が促進されまたマネジメントの重要性を学んだという声も聞かれた。その他、いろんなパーティ（クリスマス、感謝祭など）の楽しさも挙がっていた。

これらのことは、児童が「学校は楽しい」と感じた主な理由である、「友達との交

流」、「体育・スポーツ」、「音楽」、それに「給食」、「運動会」、「遠足」、「係活動」など、児童生徒たちが一緒にコミュニケーションを取ったり活動したりすることが楽しいと感じていることと軌を一つにするものではないだろうか。また、「教員とのコミュニケーション」を挙げる児童が予想以上に多かった。ハウスでもペアレントとのコミュニケーションは、普通の寮ではみられない特色であり、楽しさの大きな要因であると思われる。ただし、レジデントが生活満足度の高い国々の小学校児童と異なるのは、楽しいことに夢中で勉強をおろそかにしているわけではないことである。心豊かな共同生活を営みつつそれぞれの専門分野の学習、研究に大きな成果をあげている。ともかく、上述のような素晴らしい要因を維持しつつ、楽しいハウス、幸せいっぱいのハウスという感想を抱かせる国際学生の家、HdB であり続けたいものである。



～ 目次—CONTENTS ～

【設立理念】

PRINCIPLE AND PURPOSE	見返し
-----------------------------	-----

【巻頭言】

・ 村田翼夫	ハウスは楽しいか	1
--------	----------------	---

【目次】

.....	4
-------	---

【クラウドファンディングと HdB 運営への提言】

・ 吉川晃史／寺尾百絵	2021 年度クラウドファンディング活動記録	6
・ 吉川晃史	国際交流拠点としての「出会いの家」への提言	9

【特集：第 3 回公開講演会】

・ 内海博司	第 3 回公開講演会について	12
・ 吉村一良	ハウスと私	14
・ 楊 明	HdB での生活とウィズコロナ社会に貢献するものづくり	26
・ 前川佳世子	京都「国際学生の家」の経験から得たもの	32
・ Hardik Tankaria	HdB : An Expanding Rainbow in Kyoto from 1965	35
・ Kuroda Shun	Wonderful Life	38
・ 宗岡泰斗	伝えること、言葉にすること	40
・ Vien T.T. Dinh	After the rain, there is a rainbow	42

【OM 便り】

・ 千種直樹	Think Globally, Act Locally 世界のカーボンニュートラル議論に思うこと	45
・ 孫 暁萌	山茶花(さざんか)	50
・ 村上 響	HdB 退寮後の現在	52
・ 朝倉 寛之	“ハウス”が変えた私の生き方.....	53
・ 内海 博司	ダンバー数と京都国際学生の家理念	54

【ハウスペアレンツとレジデント】

・ Naresh Bedi (HF)	Another Awesome Year As A House Parent	57
・ A. K.	昆布干しバイト in 利尻島	61
・ Ando, Kenta	安藤健太 Thank you, bro! Family!!	62
・ A. Y.	日本語教育のすすめ	64

• Chang-Yu WU		Current life at HdB	65
• Dennis Obster		No goodbyes forever	66
• Hardik Tankaria		Cocktail of Life	67
• Hattori, Michiru	服部みちる	楽しかったこと	69
• Iwaisako, Miu	祝迫美羽	素敵な出会いに恵まれた 2021 年！	70
• Jason Lin		From Rookie to Old Bird (Four years life in this house)	71
• Kuroda, shun	黒田 旬	第三の道	72
• Lim Natalie		留学を通して学んだこと	74
• Muneoka, Taito	宗岡泰斗	変わりゆくモノと変わらない理念	75
• Noah Yoshida		New Home	77
• Otani, Kazuki	大谷和輝	俺の挑戦	78
• Qiu Hongxuan		One year of youth left	79
• Soumya Sethi		My life as a Graduate Student in Kyoto	80
• Stellah Namulindwa		This is Stellah.	81
• Vien T.T. Dinh		Look inside yourself	83
• Watanabe, Junya	渡邊淳也	HdB で半年過ごしてみて	84
• Yamamoto, Minemaru		山本峰丸 あと 1 分及ばず	85
• ZHANG Boyiwen		Every semester with something new	86

【資料】

• 公益財団法人京都国際学生の家役員等	87
• 2021 年度補助金・寄付金・その他ご支援	89
• 公益財団法人京都国際学生の家略史	91
• 公益財団法人京都国際学生の家利用者の集計	96
• 公益財団法人京都国際学生の家の後援会会則	99
• 公益財団法人京都国際学生の家同窓会会則	100
• 施設概要	103

【編集後記】

• 平野克己/山本峰丸/内海博司	104
------------------	-----

【広告】	107
------	-----

【寄付金振込用紙】

【クラウドファンディングと HdB 運営への提言】

2021 年度クラウドファンディング活動記録

吉川 晃史

(HdB 常務理事、関西学院大学教授)

寺尾 百絵

(関西学院大学商学部)

新型コロナウイルス感染症のもとでの活動資金の確保と修繕のために、クラウドファンディングを 2020 年、2021 年と実施した。その活動記録を以下に記す。

<2020 年度の活動>

2020 年度では、コロナ禍で資金不足に苦しむ HdB の苦境を乗り越えるため、寮生、関西学院大学の学生とともにクラウドファンディングを立ち上げることとなった。大きな問題となったのは、資金不足によるイベント存続の危機である。コロナ禍により、留学生の渡航が困難となり、定員の半数以上が空室となる事態に陥った。学生寮室 34 に対して 14 名のみの在寮で、毎月赤字が続いていた。公益財団法人として最低限の寮費で活動してきたため、蓄えもなく、寮費を値上げすることもできない状況であった。また、京都市からの助成金によって、国際交流のイベントを開催していたが、支援金の金額も減り、別途の財源が必要となっていた。

クラウドファンディングの実施にあたって、HdB がめざしたい姿、HdB で過ごす価値は何かについての議論に時間を割いた。

2020 年度では、外国人留学生と日本人学生の交流の場となっていることである。政府の留学生対策が十分でなかった 1965 年に、京都市左京区聖護院に京都で最初の留学生寮を建設し、以降、これを軸に国際交流の事業を推進している。世界各国から京都に来て学ぶ外国人学生と日本人学生に、単なる留学生の生活上の支援でなく、学寮という生活の場を提供し、月間・年間を通じた行事を通じて、「共同の生」を体験することによって、この国際理解と親善の増進を計ることを目的としている。

寄付型でも対応している Ready for というプラットフォームで寄付を募った。Ready for の取り扱いの件数は、わが国ではトップクラスであり、ファンドのテーマも、社会貢献、地域応援、災害支援、貧困対策、ベンチャー資金、大学支援、アート・芸術支援、子育て支援、等様々である。寄附型ではあるが、お礼状の発送に加えて、国際交流イベントの招待券を送付することとした。

国際交流のイベントとして、「コモンミール」と呼ばれる毎月 2 回開催している食事を伴う交流会や、多様な民族料理の紹介によって食文化での市民との交流を行う「国際食べもの祭り」、SDGs 関連イベント等がある。これらの国際交流イベントを開催・運営するための資金として 30 万円を目標調達金額に設定した。

クラウドファンディングのウェブサイトを改良しながら活動を進めていった。そして改良後に、新聞やテレビニュース（読売新聞、テレビ朝日「キャスト」）に取り上げられる機会があり、多くの人々に HdB のこと、そして現状を知ってもらうことができた。テレビ朝日「キャスト」では、10 分を超える特集が放送された。HdB で生活する学生の姿や HdB の厳しい現状、寮の存在意義等を多くの人々に知ってもらえる機会となった。これらを行なった結果、目標金額の 30 万円の調達に成功した

30 万円の調達に成功したのち、第二目標としてさらに 30 万円の資金調達を試みた。理由として、寮のインターネット環境が整備されていないことが挙げられる。HdB では、Wi-Fi が完備されておらず、寮生が個人で契約をし、インターネットを利用していた。コロナ禍によってオンラインによる授業が増加する中で、インターネット環境が整備されていなければ、寮生は学業に集中できないのではないかと考えた。そこで、寮生がより快適な学生生活を送れるようにすべく、さらに 30 万円を調達し、Wi-Fi を整備することとした。寮生からの感謝の声を掲載し、第二目標金額と使用用途を示した表を掲載した。結果、第二目標である 60 万円の調達に成功した。

募集終了日である 2020 年 12 月 29 日までに、総額 763,000 円の寄附額に達した。

<2021 年度の活動>

2020 年に行ったクラウドファンディングを通して、HdB はグローバル人材を育てる拠点としての存在意義があると考えた。クラウドファンディングにおいて、予想以上の資金を集めることができたことから、HdB の活動の意義を再認識することができたのである。

他方で建物の老朽化問題は継続するなか、コロナ禍で以前の収益源であった研究者が海外から来ることができず、空室が続く。そこで、入居者のない空室をスタッフの手で、室内のペンキ塗りやカーテンの取替などを行って、新しい学生や研究者を受け入れる準備をしてきた。特に苦労しているのは、積み残された改修工事の内、緊急度の高い工事、例えば、半世紀も使われた各部屋の鍵やドアの不具合、錆びて落下しそうな鉄枠で出来たガラス戸の修理など、寄附金を使って、修理を行っているものの、古い台所やシャワー室の改修等や、台所の電気製品などの更新等は高額で手がつかずいる。

そこで、2021 年のクラウドファンディングでは、コロナ禍による入寮者数の伸び悩みによる資金不足の解消に加えて、ハード面の改修（住みやすい建物への改修）とソフト面（運営人材）の若返りと、事業継続のための収益基盤の確保を目指した構想が練られることとなった。

そこで、寮生が関西学院大学の学生達と連携して HdB のビジネスモデルの基本要素を明確にしていき、HdB の生活で得られることの価値として次の 3 点にまとめた。

- ・常識や固定観念にとらわれない価値観

▽当たり前が通じない環境だからこそ差別や偏見が少なく、お互いの価値観を共有しています。

- ・相手のことを理解しようと受け入れる柔軟性

▽ダイバーシティな環境で互いの考えによって影響し合い、素直に受け入れる姿勢が身に付きます。

- ・フラットな視点からグローバル人材を育てる

▽自由でフラットな視点から、世界で活躍する人材の素養を養います。

2021年12月1日に開始されたクラウドファンディング活動は当初目標額の30万円を10日ほどで達成し、募集終了日である2022年1月27日までに、508,000円を集めるに至った。

目標額を調達できたことで、HdBの運営者や学生は寮の存在意義や活動の意義を改めて実感することができるとともに、HdBの意義を認知する活動がより必要になっていることを感じている。

クラウドファンディングの場合、インターネットを通して自分の活動や夢を発信することで、その想いに共感した人や活動を応援したいと思ってくれるクラウド(群衆)がファンディング(資金調達をする)するという意味で、一種の共同経営者になるような形で多くの人が財源の提供や協力をしてくれるものである。これは、単純な募金を超えるものであり、単純な資金調達以上にHdBの活動に共感を呼び、応援していただける方々に関与いただける活動であると期待できるものである。



国際交流拠点としての「出会いの家」への提言

吉川 晃史

(HdB 常務理事、関西学院大学教授)

1. 次世代国際交流拠点構想の検討の必要性

「2021 年度クラウドファンディング活動記録」でも述べたように、クラウドファンディングの実施にあたり、関西学院大学商学部の学生の協力を得て、寮生とともに、サイトの構築、動画の作成、HdB の PR を行ってきた。

当方が HdB に関与し始めたのが 2010 年で、約 10 年間、会計関係や公益法人の維持、運営を行う理事の立場にあったものの、寮生やスカラーとしての共同生活の経験はない。HdB のプログラムから得られる意義や価値を実体験として理解できていないため、これまでは、そのことについて十分に考えることがなかった。また、HdB の運営はハウスペアレントによって行われ、何か相談事があれば、ハウスコミッティに意見を求めることから、運営にあえて携わらないようにしてきたという側面がある。

しかし、コロナ禍によって運営の危機に直面した厳しい現実が、HdB の存在意義を改めて問い、新たな国際交流拠点構想を考える必要性を迫る。HdB で目指されているフラットな視点からグローバル人材を育てたいというビジョンは理想的であるが、コロナ禍で国際交流が十分にできず、また、建物はじめインフラの老朽化が進み、運営を支える人々の後継問題も抱え、事業継続の危機にあるからである。

寮生や学生と連携して、クラウドファンディングに挑戦しながら、HdB のビジネスモデルの基本要素を明らかにし、基本要素を活かしつつ、現代の情勢にあわせた見直し、事業継続という観点から新たな要素を加えた国際交流拠点モデルを考えなければ、HdB の持続可能性は低い。

本稿では、HdB の活動実践とそれがもたらす価値を整理し、現状を進展する形で、新しい国際交流拠点案の要素の一部を示す。本案は、斬新なアイデアを新たに示すというわけではなく、公益法人という枠組みのもと、現状で変更可能な部分を提示するものであり、これが新たな HdB を模索する第一歩となれば幸いである。

2. HdB の活動実践とそれがもたらす価値

HdB では、原則として、一 가족が、ハウスペアレント（学寮管理者）として、学寮内に居住して、寮生の生活のアドバイス、勉強援助やカウンセリングなどに当たっている。そのハウスペアレントを補助する機関として、学生の入寮時の面接、カウンセリングなどを行う学寮運営委員会（ハウスコミッティー）が組織され、活動している。

HdB の国際交流拠点としての主要な役割は、異文化理解を通じたフラットな視点の形成とグローバルで活躍する人材育成にある。

HdB での生活、外国人留学生と日本人学生の交流の場となっていることで、国籍が異なる中でお互いの文化を学び相互理解を促進することができる。これは、「共同の生」という理念で体现される。世界各国から来り学ぶ外国人学生と日本人学生に、学寮という生活の場を提供することによって、異なる国家あるいは民族の間に厳然として存在する人種、宗教、習慣、文化さらにはイデオロギーといったものの相違を、入寮学生相互に対決させ(confront)、これらの相違を互いに認め合った上で、一個の人格として出会う「共同の生」を体験させる。この様な相互の相違を認識し、相互に承認し合うという、きわめて厳しい努力と体験を通じて得られる「寛容(tolerance)」が、人類普遍の願望である人類共存の道を達成する有力な手段であり、このことが同じ屋根の下で営まれる「共同の生」の中で実現されうるという理念である。

これを成立させるのが、マジョリティのない交流拠点である HdB であり、SDG s 10「人や国の不平等をなくそう」ターゲット 10.2「2030 年までに、年齢、性別、障害、人種、民族、出自、宗教、あるいは経済的地位その他の状況に関わりなく、全ての人々の能力強化及び社会的、経済的及び政治的な包含を促進する。」という不平等問題を解決するものである。

結果として、HdB の OB・OG は HdB で培った経験を生かして現在世界中で活躍している。典型的には、OM 会で講演された方々で、戸口田淳也教授（京都大学 iPS 細胞研究所の副所長）や「生分解性バイオマスプラスチック」を創出する技術を研究している岩田忠久教授（東京大学大学院農学生命科学研究科）はじめ、グローバルに活躍される OB・OG がおられる。

3. ダイバーシティを体现するコミュニティ「出会いの家」再構築に向けて

HdB の上述のとおり、重要な社会的意義を果たしているが、ハード面、ソフト面双方に課題を抱え、存亡の危機に直面している。

課題は、ハード面の改修（住みやすい建物への改修）とソフト面（運営人材）の若返りと、事業継続のための収益基盤の確保である。

一つの方向として、共同生活実践の対象者の拡充を模索することがあげられる。具体的には、共同生活実践を学生と研究者以外に拡張し、再構築し、複数拠点で実践できるようにする。居住者は学生（日本人学生、留学生）と研究者（日本人、外国人）だけであったが、研究者室には、社会人（日本人、外国人）、第2の人生を歩みたい退職者（日本人、外国人）も入居可能とする。

社会人としてはベンチャー企業創業者や、グローバル企業の社員を想定する。建物の一部をワークスペースとして開放し、ベンチャー企業に活動してもらい、様々な交流を通じてのオープンイノベーションを期待する。

学生からの家賃を高めることは難しいかもしれないが、社会人や研究者からの収入を収益源としてプログラムの運営を行う。

グローバル企業と連携して若手社員を送ってもらい、グローバル企業からのサポートを受ける。ベンチャー企業が上場した場合には、創業者からの寄附をしてもらって、次の拠点づくりを行う。

退職者にも入居してもらって、管理運営を手伝ってもらいながら、生活をともにする。

上記の提案の背景には、海外から研究者が日本に入国することが難しく、スカラールームが空室になっていることがある。また、ハウスペアレントが共働きであったり、ハウスペアレントの成り手を見つけるのが難しくなっていること、理事含めて運営体制が高齢化していることも課題となっている。

さらに、HdB の活動の価値については、大学関係者の一部で知る人ぞ知るという状況で、広く知られていないということが、活動の広がりにつながっていると考えた。そこで、新たな人材交流の可能性を見いだして、HdB 活動の輪を広げていくことが重要であると考え、共同生活実践の対象者の拡充を模索してはどうかと考える。

ハード面については、耐震工事を終え、低コストでも必要な修繕を積み重ねているが、空間の活用については新たな発想に基づくアイデアが求められるとことである。

以上、抜本的な改革案を提示するわけではないが、本稿が国際交流拠点としての次世代の HdB 構想の議論につながることを期待し、引き続き様々な可能性を模索していきたい。



【特集：第3回公開講演会】

(公財) 京都国際学生の家 第3回公開講演会について

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965OM, 元 HF)

耐震・老朽化対策の工事資金を得る募金活動を通じて、京都で最初の留学生寮であり、日本で最初の混住型の留学生寮にも係わらず、当学寮の知名度はほとんど無かった。また開寮以来千名を超える卒寮生がいるにも係わらず連絡が取れる卒寮生数は400名程でした。そこで本学寮が世界の若者達との共同生活を通じて、平和な世界の構築を目指した設立趣旨や、その実際の活動について広報を行い、支援団体・支援者を確保していくことや、卒寮後のOM達の協力体制を構築することにした。

3年前に、卒寮生の会（OM会：Old Member）を発足させ、多くの京都市民に(公財) 京都国際学生の家が存在を知って頂こうと、卒寮生及び在寮生達による公開講演会を2019年6月8日（土）に第1回の、コロナの流行の合間をぬって2020年12月12日に第2回を、昨年2021年7月17日には、第3回の公開講演会を楽友会館にて開催した。昨年の公開講演会はコロナ渦であったので、オンラインも利用し、その動画は現在もホームページにて公開中である。その内容を活字として皆様に届けるのが本特集である。

本年もコロナがまだ収束しない中、第4回OM会主催の市民公開講演会を、京大楽友会館にて、6月に開催予定である。





京都国際学生の家 Haus der Begegnung (HdB)

第3回公開講演会 入場無料・マスク着用

日 時：2021年7月17日（土）12:50～16:10

場 所：京都大学楽友会館 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

HdBは昭和40年より56年間、外国人学生と日本人学生の出会いの家として活動してきました。

その歴史と現在の活動状況、未来への展望を卒業生の講演と共に紹介させていただきます。

開会の辞 内海 博司（理事長、京都大学名誉教授）

第Ⅰ部 HdBから育った科学者

13:00～13:50 超電導とハウスと私

吉村 一良（京都大学大学院理学研究科教授・統合複雑系科学国際研究
ユニット長）

13:50～14:30 ウィズコロナ社会に貢献するものづくり技術

楊 明（東京都立大学システムデザイン学部教授・学長補佐）

第Ⅱ部 HdBの過去、現在、未来

14:50～15:30 外国人学生及び日本人学生から

四人の在寮生有志

15:30～16:00 京都国際学生をの家の経験から得たもの

前川 佳世子（（公財）京都日本語教育センター京都日本語学校講師）

閉会の辞 村田 翼夫（理事、筑波大学名誉教授）

参 加： 来聴歓迎。どなたでも参加できます。

- ご来場にあたっては、マスク着用、手指消毒、検温、記名入場、ソーシャルディスタンスを確保のうえ、感染防止対策にご協力下さい。
- 万一発症された方がおられた場合は、保健所等の求めに応じ記名入場者リストを提出します。

主 催：公益財団法人 京都国際学生の家

連絡先：京都市左京区聖護院東町 10

電話/FAX：075-771-3648

ホームページ：<http://hdbkyoto.jp/en/home/>

< HdB から育った科学者 >

ハウスと私

吉村 一良

(京都大学理学研究科教授、HdB 理事、1980OM、元 HF)

この度、京都「国際学生の家」(HdB、ハウス)の学術講演会でお話する機会を頂きまして、私がこれまで行って参りました「超伝導」と「遍歴電子磁性」に関して講演をさせて頂きました。思い返してみますと、私の研究者としての人生とハウスは非常に密接にからみ合っております。良い機会ですので、私のこれまでの人生(大げさですが)を振り返りながら、ハウスと私、そしてその頃の私の研究について思い出などを振り返りながら書かせて頂きたいと思います。

レジデント時代

私がレジデントとしてハウスに入寮したのは、1980 年、私が京大の 3 回生の終わり、正式には 4 回生になる頃でした。ハウスのことを紹介してくれたのは友人のスイス人、アントン・カウフマンさんでした。アントンは(以下、当時の呼び方で記します)、京大の経済で計量経済学の博士課程の大学院生で、私が入寮当時には既にレジデントでした。現在はフィリピン在住で、ハウスの 40 周年の記念事業の折にハウスに来られ、20 年ぶりに再会できました。アントンからハウスの事は伺っていましたが、その時は何とはなしに、日本人も入れる留学生寮なのだ、ぐらいにしか考えておりませんでした。入寮してみると様々な国の個性豊かな人たちが共同生活をしており感激したのを鮮明に記憶しています。先輩達も非常に個性豊かで、日本人では水谷さん、小山さん、池本さん、松井さん、千種さん、後から米国留学から帰ってくる田開君、香港のルイパパ、ユーゴ(当時)のイゴール、イラクのカリーム、オランダのヤコブ、キプロスからのニコス、パキスタンのイサーク、エジプトのサイードさん、親友になったタイからの留学生シリキヤット、韓国と北朝鮮からの二人のチョンさん、などなど、多くの本当に印象深く個性的な人たちがレジデントとしておられました。そして私と同じ頃に入寮したポルトガルのエドワルド、川口さん、松井大ちゃん(お兄さんも OM。大ちゃんは肝臓を患ってあまりにも早く亡くなってしまいました。)、鈴木さん、四宮君、タイのスピナイさんなど多くの個性豊かな面々が居ました(全員、当時呼ばれていたように記しました)。今回、ハウスの学術講演会で私と共に講演をされた中国の楊明君は私より半年遅れで入寮された同期のレジデントでした。そして、ゲスト(当時はそう呼んでいました)ですが、当時ハウスは男子寮でしたので、ゲストは女性の学生や研究者が中心であったように思います。すぐに思い出すだけでも、タイのシララットさんやヌンちゃん、アイリーンさん、フィリピンのミニちゃん、チリからの日系の研究者のカズコさんなど、多くの方が思い出されます。それから勿論忘れてならないのは、スイス側のハウスペアレンツのパトナムさんご夫婦(ゲイリーさんとリタさん)と子供さん達、グレゴリーとデイビッド。そして日本側のハウスペアレンツの琴浦先生ご夫妻と小さい娘さん、理絵ちゃん。私に本

当に大きな影響を与えて下さった方々です。そしてやはり個性豊かなオフィスの人々、諏訪さん、檜山さん、馬場さん。この方達の強い印象は昔のレジデントに聞いて頂いたら必ずや聞くことができるはずです。私もレジデントの頃、そして後にハウスファーザーになってからもオフィスの方々には大変可愛がって頂きました。何か悪いこと(シーツを出し忘れたとか、ですけれど)をしても、「はびちゃん(当時の私のニックネームです)か・・・しゃあないなあ・・・」と何度も笑って許してもらったことを覚えています。他にもここにあげませんが、印象深い多くの方々がいらっしゃいました。皆、今でも心に強く残っている人々です。ハウスでの生活は、コモンミールやスプリング・トリップ(下見の役でチョンさんと二人で賢島まで行ったことも懐かしい思い出です)、オータム・トリップ、スポーツ・デイ、クリーニング・デイ、クリスマス・パーティーなどなど、多くのイベントに彩られ、私にとっては、また、これをお読みのハウス関係の方々にも同様かと思いますが、初めての体験であり、かけがえのない思い出です。今日の自分があるのもそれらの経験のお陰だと痛感している次第です。

レジデント当時の私は、京大・工学部・金属系教室の4回生で、金属物理学研究室に配属になり、物性物理学、特に磁性物理学の基礎の扉をたたいたところでした。そんな中でハウスの国際的な雰囲気に入り、その後の人生にも大きな影響を受けることになります。ハウスで院入試も乗り切るという体験をし、大学院に進みました。その後、ハウスをめでたく(?)出まして、ハウスで親友になったシリキアット君と紫野の賃貸マンションをシェアし、充実した大学院生活を送りまして、博士後期課程まで進み、物性物理学・金属物理学の基礎研究を行うことができたのです。そして、ハウスのレジデント時代に知り合った女性と学生結婚をし(後のハウスマザーです)、博士課程修了後は、福井大学の工学部・応用物理学科の助手に採用されました。福井大学では2年半の間、研究・教育生活をおくり、1988年に現在私が所属している京大・大学院理学研究科・化学専攻の金相学研究室の助手になりました。京大に戻ってきた頃は、宇治の京大宿舎に家族で住んでおりました。

ハウスでの京大・工学研究科・修士課程時代の頃からハウスを出てからの博士後期課程時代、福井大学時代を経て京大・理に至るこの間、研究としましては一貫して磁性物理学、特に遍歴電子磁性体を中心に研究を行っておりました。磁性物理学の歴史は量子力学の歴史ともよく符合していて、その意味で量子物理学の研究のまっただ中にいたと言っても良いかもしれません。その頃、磁性物理学の分野で大きな問題となっていたのは、局在電子磁性で通用していた、ワイス(ピエール・ワイス(Pierre Weiss))が1907年に提唱した静的な平均場近似理論が、金属磁性、即ち金属結晶の中を電子が動き回り(金属伝導の状態)、その電気伝導を担う電子が磁性をも担う、所謂、遍歴電子磁性(簡単にバンド磁性ということもあります)においては、全く役に立たないという問題でした。平均場近似というのは、現在でも物性物理の基本的な考え方・理論であって、最近では素粒子などの分野でも用いられています。通常、相互作用する物体の問題は2体問題(「太陽と地球」のような)までは厳密解が得られますが、3体以上の問題は厳密には解けない、所謂、多体問題はよく知られているわけですが、私たちが研究している物性物理学では、アボガドロ・ナンバー程度($\sim 10^{23}$ 個)の非常に多数の粒子(つまり電子)の集まりの振る舞いは決して厳密には解けませんので、何らかの近似や熱統計力学的な手法を使わないとならないわけです。それを解決する非常に良い方法

がワイスの平均場近似であり、様々な相互作用を平均的な場に置き換えて、1 体近似を行うという非常にスマートな理論・概念です。そこで、その考え方を遍歴電子磁性にも持ち込んで、静的な平均場近似に立脚したバンド磁性を理解しようというのが英国のストーナー・ウォールファース(Stoner-Wohlfarth)モデル・理論でして、1930 年代～1960 年代、欧米で一世を風靡した理論だったのです。まさに遍歴磁性強磁性体の振る舞いを理解するために作られたストーナー理論でしたが、遍歴磁性体の有限温度での挙動を全く説明できなかったのです。その後、これを解決するために、世界的に動的な平均場近似の試みなど数々の理論的な試みが行われました。しかしながら、結局最低温度近傍の磁気的な振る舞いを記述するにとどまり、強磁性転移温度(T_C : フランスの物理学者ピエール・キュリー (Pierre Curie) に因んでキュリー温度と呼ばれます) そのものの値や T_C 以上の磁化率(一般的な相転移現象では感受率と呼ばれる、相転移を表す物理量のレスポンスの大きさを表します)の振る舞いなど、全く実験結果を再現出来ませんでした。例えば、皆さんがよくご存じの純鉄(α -Fe)という強磁性体の T_C は実験的には 1033K ですが、Stoner 理論では 1 万 K 以上になってしまいどうしても説明が付かないのです。弱い遍歴電子強磁性体は数十 K 程度の T_C なのですが、それに対してもストーナーモデルの答えは 1 万 K となってしまう、益々困ってしまうと言った具合です。また、局在スピン系の磁性体のみならず、あらゆる遍歴電子強磁性体で例外なく、磁化率は温度に逆比例する形(Curie-Weiss 則)になりますが、それもストーナー理論では T_C 以上ではパウリ(Pauli)常磁性的(磁化率が温度にほとんど依存しない)となってしまう説明が付かないのです。この問題を解決するために登場したのが、1970 年代から始まる東大・物性研の守谷亨教授のグループが中心となって展開された「スピンの揺らぎの理論」と言われる自己無撞着な繰り込み理論でした、まさしく我々の望むべき動的な遍歴電子磁性理論となっていました。私はこの理論を守谷先生の最後の弟子(助手)であった高橋慶紀先生や同じく東大・物性研の安岡研究室の助手であった瀧川仁先生と共に実証し、確立していくという研究を推進しておりました。お二人は今でも私の良い友人です。そして、このスピンのゆらぎ理論が定量的にしかも静的・動的な振る舞いに至るまで、私が 1985 年に発見した弱い遍歴電子強磁性体の振る舞いを悉く説明できることが明らかになりました。特に、今回の講演会では超伝導体の動的な振る舞いのお話のところで、核磁気共鳴(NMR)の緩和率のお話をしましたが、まさにこの NMR の緩和率(核磁気緩和率)が磁性体の動的特性を上手く調べる物理量となっているのです。現在でも、私の実験的研究の中心的研究手段はこの NMR 測定です。(医学の分野でも、MRI で正にこの技術が使われております。)この場をお借りして、私の NMR の先生である、東大・物性研の安岡弘志先生、瀧川仁先生、米国イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の C. P. スリクター先生に心から感謝の意を表したいと思います。この辺りの遍歴電子磁性研究のお話は時間の都合上、講演会ではほとんど割愛してしまいました。興味のある方は、私の著書や解説などを[参考文献]としてこの末尾に載せましたので参考にして頂けたら幸いです[1-7]。また、そのなかの引用文献{references}も是非参考にして頂きたいと思います。

ハウス・ファーザー時代

遍歴磁性研究にも一段落といった感じになっていたそんな頃でした。1988 年に京大に戻

ったわけですが、その少し前のことです。エポックメイキングで重大な出来事が私の分野で起きます。それが 1986 年から 1987 年の頃に起こった銅酸化物高温超伝導体の発見です。その立て役者は、ベドノルツとミュラー (Bednorz & Müller) という二人の IBM チューリッヒの研究者 (固体化学者) です。私もこの高温超伝導研究に巻き込まれました。まさに世界中の物性物理学者、固体物性化学者が銅酸化物超伝導体の合成と物性を調べる研究を行うという異常事態になっていったのです。サイエンスの世界では「超伝導フィーバー」と呼ばれていますが、世界的に物理学会・化学会、それどころか産業界までもが超伝導熱に浮かされた異常事態でした。

そんなことが起こっていた頃に、私はハウスの運営委員会からハウスファーザーとなるよう依頼を受けました。ハウスでのレジデントとしての素晴らしい生活や友人達とのいろいろな思い出がありましたので、すぐにお引き受けすることを決めました。勿論、家内の承諾を得たことは言うまでもありません。ハウスマザーの役割は非常に大きく大変である事は言うまでもありませんので。そんなわけで、1993 年の 3 月～4 月に、内海先生ご夫妻→山本先生ご夫妻の後を受けまして、日本側のハウスファミリー (私、家内のかをる、長女麻菜、二女里菜の 4 人です) として再びハウスに入ることになりました。私がハウスファーザー時代のハウスのレジデントは、日本人では山田君、所君、伊藤君、後藤君、市川君、渡辺君、大島義信君 (お兄さんもハウス OB で国連勤務だったと思います)、そして後に私の助手となり現在は同志社大学の教授になっている加藤将樹君、それから 1 年後に入寮し、京大病院・助教→現・大阪府立大医学部教授となる橋本求君 (当時は京大医学部 1 回生。今回の講演会にも来てくれました。)、シンガポールのネオ君、オン君、ウィンストン君、トルコのアーメット・オナット君、中東からのブラヒムさん、中国の王君や陳君などなど、やはり本当に個性豊かな学生がたくさん居ました。坂東君 (あまりにも早く逝ってしまいました)、大槻君、水戸君、井ノ花君などの芸術家肌のレジデントも結構いてバラエティー豊かなレジデント達でした。またゲストにもトルコのキャミルさん (元レジデントで、京大・法の香坂研出身)、大村さん、外村さん、イギリスからの京大・医学部に来ていたハル君、大英博物館から派遣され京都国立博物館の研修員だったシドニーさんなど奇才がたくさんいらっしゃいました。後に 1994 年、加藤将樹君と私が二人でヨーロッパで行われた超伝導の国際会議に参加した際には、ロンドンに立ち寄って、ハル君、シドニーさんと再会しました。ハル君には我々が日本から来たからとライジング・サン (Rising Sun) というビアホールに連れて行ってくれました。美味しいギネスビールを味わいながら話が弾んだと記憶しています。シドニーさんは大英博物館の職員だったので、大英博物館の裏側を案内してくれました。ぱっとドアを開けるとミラの展示室だったり、職員専用の食堂でのランチに招待してくれたり、本当にエキサイティングなサプライズがたくさんの魅力的な想い出深いツアーでした。また、当時でもまだハウスは男子寮でしたが、お試しで初の女性レジデントになった加茂わかかなさんも最初はゲストでした。ご存じの様に、その後、私の後任の戸口田先生がハウスファーザーの時代に、ハウスは男女混合寮へと変革していくわけです。

さて、ハウスに私たちファミリーで入居して 3 ヶ月が経った頃、文部省の在外研究員としてオーストリアのウィーンにあるウィーン工科大学 (Technische Universität Wien, TUW) に行く話が来まして、ハウスの皆さんの許可を得て (オフィスには荒川さん、諏訪さん、檜山さん、馬場

さんがいますし、チームのチェアマン(レジデントの代表)は大変しっかりした山田君だったので、大丈夫だろうということで許可を頂きました)、1993年の7月～8月とウィーンに家族4人で海外出張致しました。ウィーン工科大学では、ヒルシャー(Gerfried Hilscher)教授の研究室に滞在し、銅酸化物高温超伝導体の比熱測定の研究をしていました。ヒルシャー教授は当時大学院修士課程の院生だったヘビック・ミヒオ(Herwig Michor)君をアシスタントとして私に付けてくれました。彼は私と研究した2ヶ月間の印象が余程強かったらしく(ヒルシャー教授談)、博士課程進学を決心したとのことです。ヘビックとはそれ以来、現在に至るまで良い友人で有り共同研究者です。彼は現在、ヒルシャー教授の後を継いで、ウィーン工科大学の教授になっています。研究も一段落した頃、ヒルシャー教授から休暇を頂き、家族でヨーロッパ漫遊の旅に出かけました(当時は古き良き時代でした)。ウィーン→ベニス→フィレンツェ→ローマ→ニース→バルセロナ→パリと周り、その後、オーストリアに戻る前にチューリッヒに立ち寄り、スイスミッションの本部に行ってきました。そこで、スイスミッションの方々に現在の京都「国際学生の家」についてハウスファザーとして報告を行いました。スイスミッションの皆さんには大変良くして頂きました。殊に当時代表だったブルコルターさんご夫妻(かつてハウスのスイス側のハウスペアレンツでした)には、お家に泊めて頂き、奥様には夕食後に近くの小さな湖まで泳ぎに連れて行って頂きました。その後、奥様は残念ながらご病気で亡くなってしまわれましたが、その頃はお元気で、子供達と一緒に泳いだり、チューリッヒの町を案内して下さいました。余談ですが、チューリッヒの町では、当時総理大臣だった海部俊樹氏の奥様にお会いしてご挨拶したことを覚えています。ブルコルターご夫妻に別れを告げ、チューリッヒを出て、ザルツブルグに寄ってウィーンに戻りましたが、旅行に出る前は、子供達が毎日プールで泳いでいたほど暑かったのですが、帰ってきた時はまだ8月中旬とは言え、少し寒いくらいで子供達もプールに行きたがらない程でした。日本の夏と違うヨーロッパの夏を体感したものです。ウィーン工科大学でそれからまた2週間ほど研究を行い、比熱測定実験を纏めて日本に帰ってきました。高温超伝導体の比熱はやはり通常の超伝導体のものとは異なった振る舞いで興味深いものでした。ヒルシャー教授は本当に優しい方でいろいろと良くして頂きました。その後、2006年に磁性の国際会議(ICM2006)が京都で行われたときには、私も実行委員としてローカル委員長を仰せつかりましたが、ヒルシャー先生ご夫妻がその国際会議に出席するために京都に来られました。その際には、いろいろと京都をご案内出来、川床でのパーティーにご招待することも出来て、ご夫妻に喜んで頂いたのを昨日のことに嬉しく覚えています。10年ほど前に、ヒルシャー教授はご病気で亡くなられましたが、その時には先生は八十前でまだまだお会いできると思っておりませんでしたので大変残念でなりません。

ウィーンから日本に帰国しハウスに帰ってくると、またハウスの活気ある生活に戻ったのですが、長らく空席となっていたスイスハウスペアレンツがスイスミッションから派遣されて来ることになりました。デヴィッド&ローズマリー・ヴィダー(Wider)ご夫妻です。彼らとはすぐに仲良しになり、その後のハウスの運営は非常にスムーズだったと思います。私たちは子供も二人居ましたので、少し広い3階に居ましたが、ヴィダーご夫妻は、1階の事務室とキッチンとの奥の部分に住まわれました。良くお互いの階に行ったり来たりして食事をしたりお酒を飲んだりし、いろいろと語り合ったのが良い思い出です。レジデントのチームもしっかりとしていて、自

分がレジデントの頃のことを思うとみんな凄いなと感心しきりと言った思い出がたくさんです。また、ハウスコミティーの委員長は最近でもお付き合いがありますが、平松幸三先生で、いろいろハウスのことを心配して下さりご尽力下さいました。私もヴィダーさんも出来るだけ全ての行事に参加しました。「山辺の道」や「信楽」に行ったトリップも良い思い出です。その頃のハウスの日常生活は、我々ハウスペアレンツ、ハウスコミティーの平松先生、レジデントの代表(チームのチェアマン)、そしてオフィスの荒川さんと、大変コミュニケーションが取れていて連携が非常にうまく行っていた印象です。そうこうしているうちに理事長の稲垣先生から、「そろそろハウスの創立 30 周年記念事業をやらないといけない」というお話が出てきました。これには私もヴィダーさんもどうすれば良いか大変困りましたが、稲垣先生から、テーマとして「アイデンティティー」ということを打ち出してやろうという、お題のようなものを頂き、それではどうしようかと皆で何度も話し合いをしたのを覚えています。また稲垣先生が、式典のゲストとしてお医者さんで小説や多くの著作でも高名なる、なだいなだ先生をお呼びになり、なだ先生が来て下さることになりました。またハウスのみんなで話し合い記念式典は京大会館(現在は既にありませんが)で行い、祝賀パーティーはハウスマザーとレジデント&ゲストたちが共同で準備をしてハウスのロビーで行おうと言う事になりました。みんな各自の持ち場・役割で本当に一生懸命良くやってくれました。私も、なだいなだ先生の送り迎えや、ご挨拶、司会と忙しくも充実した思い出です。稲垣先生が打ち出した「アイデンティティー」というのも本当にハウスらしくて良かったと思います。1995 年のことです。

その頃、私が中心に行っていた研究は、世界的フィーバーとなった銅酸化物高温超伝導体の合成とその動的振る舞いの物性研究でした。遍歴磁性でも共同研究を行っていた東大・物性研の安岡研究室とも共同研究を行いこの研究を展開しました。新物質開発も含め、良質な結晶を合成するのを化学専攻である私たちが主として担当し、物性研の安岡研がミクロな物性測定手段としての NMR を用いた研究をといった具合で分業することにしました。当時は世界中が競争状態だったので分業して行う必要があったのです。今では私の研究室でも十分に同様の NMR 測定が出来ます。しかし、合成から測定まで一手にやっていると競争に負けてしまうのです。それが良くも悪しくも当時の潮流で、その後の世界の研究形態にも大きく影響している気がします。そして、安岡研の私の後輩の今井卓君と私は気が合ったこともあり、核磁気緩和の共同研究を進めました。その後、今井君と私との共同研究の結果がパインズ(David Pines)先生に認められ、パインズ先生が推薦をしてくれて今井君は、パインズ先生のイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校での同僚であり、NMR では世界的な権威であったスリクター(Charles P. Slichter)先生の元にポスドクで行くことになります。その後は私もスリクター研とも共同研究することになり、多くの論文を世に送り出すことができました。スリクター先生は、「磁気共鳴の原理(Principle of Magnetic Resonance)」という先生の著名な著書の訳本が岩波から出ていて日本でも非常に有名です。その後、拡張版がスプリングーから出版されました。後にスリクター先生が磁気共鳴の国際会議の基調講演に招かれ京都に来られた際に、私がホストになって京大の理学部大講義室で講演会を主催したのですが、その際、先生の公演の後、聴衆や先生方さえもスリクター先生の著書を持って来て列を作り、サイン会になってしまったことを昨日のことに覚えております。

この超伝導という現象は、2つの電子が対(クーパー対)を形成し、その電子対がボーズ・アインシュタイン凝縮を起こして、全て同じ位相で運動する現象です。電子自体はフェルミ粒子なので、ボーズ凝縮は起こせません。スピンの $\pm 1/2$ の電子(フェルミオン)が対になってスピンゼロのボーズ粒子的に振る舞い、それがボーズ・アインシュタイン凝縮を起こした状態になるというのが超伝導の本質です。それを初めて解明したミクロな理論がBCS理論(この理論を作ったイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の3名の研究者 J. Bardeen, L. N. Cooper, J. R. Schrieffer の頭文字をとって BCS 理論。3人はこの理論で1972年ノーベル物理学賞を受賞します。)であります。フェルミオンとしての電子の性質がそのまま表れた遍歴電子磁性と、電子対を形成してボーズ粒子的に振る舞うことによって起こる超伝導現象は、物性物理学の最高峰とも言えるべき研究課題であります。フィリップ・アンダーソン(P. W. Anderson, 1977年ノーベル物理学賞受賞)の有名な言葉(彼のサイエンスの論文のタイトル) “More is different” は、遍歴電子磁性や超伝導をよく表した言葉であり、物性物理学そのものの面白さを表しています。即ち、電子が一つや二つでは決して生じ得ない、多数の電子が集まって相互作用する(collective modes of electrons)ことによって初めて発生する現象なのです。平均場近似の話の前節でしたが、多体効果こそが、磁性や超伝導の本質であり、物性物理学の最重要課題なのです。

銅酸化物高温超伝導体や f 電子系の重い電子超伝導体、有機超伝導体などの、所謂エキゾチック超伝導で当時問題になっていたのは、通常のBCS型超伝導では、クーパー対形成機構が電子-格子相互作用(Electron-Phonon Interaction)であったのが、エキゾチック超伝導では異なる機構でなければならないということでした。それは我々の核磁気緩和の実験から明らかで、それを様々な超伝導体での系統的な実験によって明らかにしようというのが我々の研究目的でした。その結果、全ての銅酸化物超伝導体を含むエキゾチック超伝導体では、磁気的な相互作用(スピン揺らぎ)を媒介にしたクーパー対形成が実現していることが明らかになりました。そして、それを記述する新たな超伝導の理論体系を、アンダーソン(P. W. Anderson)やパインズ(David Pines)、守谷亨先生(東大・物性研・名誉教授)や山田耕作先生(京大・理・名誉教授)たちが独立に作っていくというムーブメントとも合致したものとなったのです。そして、講演でもお話しましたが、それがある程度成功してきているように思います。我々の実験で求めた磁気的相互作用もスピン揺らぎの理論体系を用いると、ユニバーサルに超伝導転移温度 T_c (こちらは critical temperature の頭文字なので、添え字の c は小文字です) 直線関係になることが明らかになり、これらのエキゾチック超伝導体は D 派のスピン・シングレット超伝導体であることが明らかになりました。すなわち、クーパー対形成のメカニズムは反強磁性的磁気的相互作用(スピン揺らぎ)であることが確立されたのです。電子-格子相互作用、つまり所謂フォノンのエネルギーは 100K オーダーですが、それを使って BCS 型超伝導では最高 30K の超伝導が発生しますが、磁気的なエキゾチック超伝導では、1000K オーダーの磁気相互作用を利用して 100K 級の高温超伝導となるのです。研究の詳細は末尾の参考文献[1~7]をご参照頂きたいと思います。そんなことがハウスペアレンツ時代にレジデントと飲んだくれながら(笑)行った研究でした。思えば、研究で疲れて研究室からハウスに帰てくると、ロビーや場合によってはレジデントの部屋に皆集まって、よくお酒を飲んで話をした

ものです。そんな一人のアーメット・オナット君は博士号を取得後、トルコ・イスタンブールのサバンチ大学の教授になった今でも、時々日本に戻ってきて、その時は一緒にお酒を飲んだり食事をしましたし、招待したりされたりしながらのお付き合いです。2010年にイスタンブールで磁性と超伝導の国際会議があり、招待講演者として参加したときには、アーメット君のお宅にお世話になりました。彼は、京大の同級生達とリニアモーター・エレベーターという会社を設立しています。そのこともあり、今でも日本によく帰ってきていて、会う機会も多くあります。そんなわけで専門のことでもよくディスカッションをします。また、所君は非常に面白いレジデントだったのですが、よくお酒を一緒に飲んだ一人です。彼はハウスによく彼女を連れてきていましたが、その彼女と結婚し、彼らの息子さんは現在、私の理学部化学教室の学部生で、私の授業も受講しました。3人で私の教授室にも来てくれました。今でもまだまだそんな、そして様々なハウスのお付き合いが続いています。

その後、ハウスの理事の頃

3年間務めたハウスペアレンツを、その後1996年に引退し、ハウスを出て法然院町に移り住みました。長女の麻菜も錦林小学校から第三錦林小学校に転校になりました。二女の里菜は黒谷幼稚園を卒園して第三錦林小学校に入学しました。その後、稲垣先生もお亡くなりになり、理事長が内海博司先生に交代となって、私は元ハウスファーザーとして理事になるように要請を受けまして、理事としてハウスに関わり続けることになりました。ハウスコミティーの委員長も秋津先生にバトンタッチとなり、ハウスペアレンツも戸口田先生ご夫婦へそして代々交代して、ハウスもどんどん新体制となって継続して来ているわけです。

研究面では、銅酸化物高温超伝導体から派生した銅酸化物の磁性体や銅酸化物高温超伝導体が結晶学的にはペロブスカイト型という結晶構造でしたので、異なるペロブスカイト酸化物やポストペロブスカイト物質を求めて、新物質を開拓しようというような研究を行っていました。そんな中で、周期表で鉄(Fe)の真下に位置するルテニウム(Ru)のペロブスカイト酸化物(SrRuO_3)が強磁性になることを知り、またこの酸化物は銅酸化物と同様に遍歴電子系でして、電気が流れる金属伝導を示すことが分かりましたので、この系の研究はまさに私のライフワークとも言える遍歴電子磁性体研究の対象となるわけです。一方でSrをCaで置き換えた CaRuO_3 では低温まで全く磁気転位を示さず、それが何ものなのか問題になっていました。そこでこの系の遍歴磁性について、研究室の博士後期課程の学生の木山隆君と一緒に、この系の遍歴磁性の研究に着手することを決め取り組みました。その結果、 SrRuO_3 がインバー効果(T_C 以下で熱膨張係数がほとんどゼロになる効果)を示すことがすぐに明らかになり、また、ヒルシャー教授の研究室と共同で磁気比熱の研究を行い、その結果がスピン揺らぎで理解できることを明らかにしました。これらの結果で木山君は博士号を取得することができました。ちょうどその頃、今井君と私の銅酸化物高温超伝導の動的な研究成果が認められ、マサチューセッツ工科大学(MIT)の物理学教室から客員助教授として来ないかというお誘いを受けました。ホストは丁度スリクター教授の研究室からMITの物理教室のAssistant Professor(今流に言うとは助教でしょうか)となっていた今井卓君の所に決まり、旅費と滞在費はMITが持ってくれるということで、1996年の7月～8月の2ヶ月間、家族4人でMITに行くことになり

ました。MIT では今井君が準備してくれた MIT 構内のチャールズ・リバー沿いのマンションに住み、今井君の研究室に毎日通う研究生活を行いました。今井君の研究室は MIT のメインでかつ一番有名な建物(ロジャーズ・ビルディング)の中にありました。「グッドウィル・ハンティング」という映画がありますが、ちょうどまさにあの舞台がこのビルでして、映画に出てくる階段教室も研究室のすぐ隣にありました。この2ヶ月間も非常に楽しくも有意義な研究期間(海外出張)でした。チャールズ・リバーの向こう側にはボストンの町並みが見え、地下鉄でボストンとは逆に数駅行くとハーバード大学という申し分のない環境でした。家内や子供達も北米生活を大いに楽しんだと思います。研究が一段落した頃、少し休みをもらい、レンタカーをしまして、家族でボストンからニューヨークを通して、ニュージャージーにドライブをして、ハウスのレジデント時代の友人であるシリキヤット君の所を訪ねました。彼は、通信理論・実験が専門でしたが、京大の電気系で博士号を取得後、ニュージャージーのベル研究所で研究員をしていたのです。アメリカに行ったら彼を訪ねる約束をしていました。シリキヤット君はベル研の近くに大きな一軒家を購入し住んでいて、羨ましい限りの生活をしていました。彼曰く、日本で憧れていて出来なかったことをしているといった感じで、ニュージャージーで彼は何故かトヨタのセリカに乗っていました。京都時代から乗りたかったのだそうです。ベル研では、宇宙 3K 輻射の発見で 1978 年にノーベル物理学賞を受賞した有名なアーノ・ペンジアス博士とロバート・ウィルソン博士と一緒に研究をしているとのことでした。また、ベル研の若手の人たちがウェルカムパーティーをしてくれ本当に楽しい思い出になりました。また、シリキヤットおじさんは私たちの娘達の良いおじさんにもなってくれ、ニューヨークのブロードウェイのミュージカルに私たちを連れて行ってくれました。娘達が大喜びだったことは言うまでもありません。私自身はニューヨークでマジソンスクエアガーデンやセントラルパークに連れて行ってもらい大感激でした。その後もシリキヤットとはアメリカと京都で何度も再会し旧交を温めました。シリキヤットのところを後にして、私たちはニューヨークの瀧川さんのところに寄りました。瀧川さんは東大・物性研究所・安岡研究室の助手から米国・ロスアラモス国立研究所を経て、当時ニューヨークの IBM ワトソン研究所の研究員をしていました。瀧川さんも IBM ワトソン研究所近くのニューヨーク郊外に非常に大きなプール付き一軒屋を購入してお住まいで、見渡す限り瀧川さんの敷地とのことで、大変驚きました。この旅行でシリキヤット君のお宅、瀧川さんのお宅に何泊かせてもらい、日本とアメリカの生活水準の違いを間近に実感し、つくづく羨ましくも嫌にもなった思いがあります。ハウスのレジデントやゲストからきつとその手の凄い話を聞いた方も多いのではと思いますが、今でも日本の日常生活はあのようなレベルにはほど遠いものがありますね。MIT に戻って、強磁性 SrRuO_3 と常磁性 CaRuO_3 の間の混晶系の遍歴電子磁性の動的研究を完結させ、遍歴電子強磁性体系の系統的な研究に成功しまして、 CaRuO_3 においても磁氣的相互作用は強磁性である事を明らかにしました。即ち、 CaRuO_3 は強磁性になりたくてぎりぎりなれない物質、所謂交換増強されたパウリ常磁性体であり、強磁性スピン揺らぎが支配的な遍歴電子系であることが明らかになりました。その結果は、Physical Review Letters という物理の分野では世界最高のジャーナルに載せることが出来ました。これには少しまた余談がありまして、2019 年にノーベル化学賞を吉野さんと共同受賞した高名なジョン・グッドイナフ (John Goodenough) 博士も同じ研究を少し前に研究していて、先生は CaRuO_3 は

反強磁性体であると結論づけていて、私たちの研究はそれを全く否定する結果だったので、グッドイナフ先生はミクロな実験をしていなかったもので、間違えてしまっても仕方なかったと思いますが、その後、ある国際会議でお会いした時に、あっさりと「おまえが正しい」と言って下さいました。やはり大先生は違うなと思っておりましたが、その後の先生のノーベル化学賞受賞のニュースに私は本当に驚き嬉しく思いましたが、磁性の基礎研究からリチウム電池の実用研究まで、非常に広範な研究を先生が手がけておられたことを知り、改めて先生の偉大さに感銘を覚えた次第です。

さて MIT から帰国後はやはりポスト・ペロブスカイト探索などの研究を行っていましたが、2量体であるダイマーが直交して2次元的に並んだ直交ダイマー系化合物の発見(現在、京大・工学研究科で教授になっている陰山洋君が博士課程の院生で、私の学生だった頃に一緒に行った研究です)、フラストレート系パイロクロア型超伝導体の発見、二次元三角格子構造を有するフラストレート系バイレイヤー・ハイドレイトの Co 酸化物超伝導の機構解明などの研究に成功しました。その間、1998 年の春には、今井君が博士研究員をしていたイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校物理学教室のスリクター先生の研究室に客員助教授で2ヶ月間滞在し、憧れのスリクター先生に師事することが出来ました。隣はパインズ先生やバーディーン先生の理論研究室でした。バーディーン先生は勿論既に亡くなっていましたが、教授室はそのまま残されていました。スリクター先生の所では今井君の後にポスドクになった、ドイツ人のユルゲン・ハーゼ (Jürgen Haase) 博士、エストニア人のライボ・スターン (Raivo Stern) 博士が居ました。二人は、同じ異邦人である私に非常に優しくしてくれました。ユルゲン(私と同年です)は、その後ドイツ・ドレスデンのマックスプランク研究所研究員を経てライプチヒ大学の物理学教室の教授になりました。現在は理学部長になっていて、量子力学の創設者であるハイゼンベルグの教授室だった部屋がユルゲンの教授室になっています。その後のヨーロッパ出張の折に何度か歓待してもらいました。ライボ君(私より5才位年下です)はその後エストニアに帰国し、国立生物学物理学研究所の教授になりました。2017年には長女、麻菜の結婚式をフランスのコートダジュールのサント・マキシムで行ったのですが(フランス人の Hugo 君と結婚しました)、その際にもユルゲン、ヘビック、ライボを訪ね、皆に歓待してもらいました。今でもみんな私の大親友です。スリクター先生のところでは、ライボ君に手伝ってもらい、直交ダイマー系化合物の NMR(正確には NQR)によるスピンドYNAMIXの実験研究を行って、Physical Review Letters に論文を掲載することが出来ました。この論文は幸い世界中の研究者に興味を持ってもらい、引用回数(Citation Index)が1000回にも及ぶ注目論文となりました。スリクター先生は私にとって、本当に良くして下さい、まさに恩人と言える方です。私が2002年に教授になった人事の際にも丁寧な推薦書を書いて送って下さいました。残念ながら、スリクター先生は、同僚のパインズ先生と同じく2018年に94歳でお亡くなりになりました。心より感謝するとともに哀悼の意を表したいと思います。

終わりに

2015年にはハウスの40周年記念事業が行われましたが、私も理事の一人として参加致しました。その際に、理事長から、「イラクから大先生が記念事業に来られるのだけれど、知っていますか？ハウスのレジデントだったそうなんだけど吉村さんの頃じゃないかなあ」と聞かれ、誰だろう？と思っていたのですが、実際に会ってみると、それは懐かしいカリムでした。アントンも参加してくれ、3人で旧交を暖めることができました。如何に大先生になろうとも、あのときのレジデント同士に一瞬にして戻ることが出来ることをひしひしと実感しました。若い頃のそして多感な頃の友人とは良いものだと思つづく感じたものです。また、40周年記念の時にレジデントだった升谷朋子さんは、その後、3~4年の間、私の秘書として研究・教育を助けてくれました。実は教室への最後のご奉公と思い、昨年度・今年度と化学専攻の専攻長を務めています。前回専攻長を務めたのは15~6年前ですが、その時にはちょうど升谷さんが専攻長秘書も兼ねて頑張ってくれました。これもハウスに感謝の、そしてハウスとの大切な思い出です。また、私の友人達で共同研究者でもある、TUWのヘビック・ミヒオー教授ご夫妻、エストニアのライボ・スターン教授ご夫妻、香港中文大学のスウィー・ゴー(Swee Kuan Goh)教授ご夫妻、フランスのルイ・ネール研究所およびグルノーブル大学のラフィック・バルー(Rafik Ballou)教授については、私が京大に招聘した際にハウスのゲストルームに1~4ヶ月程滞在しています。また、中国・杭州の浙江大学の方明虎(Minghu Fang)教授ご夫妻は都合2年間以上ハウスのゲストルームにお世話になり、私の研究室で研究していました。杭州師範大学の准教授になっている楊金虎(Jinhu Yang)君ご夫妻も、ハウスに1年以上お世話になったと思います。ハウスのお陰で、彼らは皆、私の研究室において国際共同研究を行うことが出来たのです。このように世界中の多くの研究者の方々、友人達とふれあい、研究生活を送って来れたのもハウスのお陰であり、ハウスでレジデントとして過ごした2年間、ハウスペアレンツとしてスイス側ハウスペアレンツ、レジデント諸君やゲストたち、そしてオフィスの皆さんコミッティーの皆さんと過ごした3年の間の経験が重要であったのだと思います。ハウスに少しでも滞在した方はきっと、あの頃のハウスは本当に良かった、楽しかった、と懐かしく思い出されるでしょう。私もそうです。しかし、誰にとっても自分が居たときのハウスが最高なのだと思います。皆の心の中でそのようにハウスは息づいているのだと思います。この度、私にこのようなこれまでを振り返る機会を与えて下さった内海理事長はじめハウスの関係者の皆様に心より感謝致します。今後も京都「京都国際学生の家」が、多くの優秀なる、そしてユニークでバラエティーに富んだ人材を輩出していくことを期待して止みません。最後になりますが、1996年に日本側のハウスペアレンツである我々吉村家の送別会をして頂いた折に、皆でロビーにて撮影しました写真を掲載致しまして、私の拙文を閉じさせて頂きたいと思います。ありがとうございました。



[参考文献]

- [1] 吉村一良(共著)第5版 実験化学講座 8(丸善, 2006年, 9.15)日本化学会編, 4.4.1 核四重極共鳴(NQR): pp.222-227, 5.4.2 銅酸化物高温超伝導体および関連物質: pp.364-378: ISBN4-621-07307-9.
- [2] 高橋慶紀・吉村一良(共著), 「遍歴磁性とスピンゆらぎ」(内田老鶴圃, 2012年, 4.25) A5判・全272頁: ISBN978-4-7536-2081-4.
- [3] 吉村一良(共著)「磁気便覧」(丸善, 2015年, 1.30)日本磁気学会編, 1.9.5 遷移金属化合物: pp.150-161: ISBN978-4-621-30014-5 C3050.
- [4] Kazuyoshi Yoshimura (共著), “The Kyoto Manifesto for Global Economics, Creative Economy”, (https://doi.org/10.1007/978-981-10-6478-4_9, ISBN 978-981-10-6477-7; ISBN 978-981-10-6478-4 (eBook)), Chapter 9 “Zero and Emptiness (Vacuum/Void) in Physics and Chemistry”, 15 pages (pp.141-155), (Eds. S. Yamashita, T. Yagi and S. Hill, 2018年2月, Springer).
- [5] 吉村一良・加藤将樹(共著), 「無機固体化学—構造論・物性論—」(内田老鶴圃, 2019年, 11.20) A5判・全270頁: ISBN978-4-7536-3003-5 C3042.
- [6] Kazuyoshi Yoshimura, “Study of Novel Magnets and Superconductors and Their Physical Properties”, *Journal of Japan Society of Powder and Powder Metallurgy* **67**, 59-71 (2020). <http://doi.org/10.2497/jjspm.67.59>: 研究功績賞受賞記念「新規磁性体・超伝導体の開拓とその物性評価」(吉村一良)
- [7] Kazuyoshi Yoshimura (共著), “Creative Complex Systems”, (<https://doi.org/10.1007/978-981-16-4457-3>, ISBN 978-981-16-4456-6 ISBN 978-981-16-4457-3 (eBook)), Chapter 13 “Itinerant-Electron Magnetism and Spin Fluctuations—Aspects of Theories and Experiments”, 25 pages (pp.189-213), (Eds. K. Nishimura, M. Murase and K. Yoshimura, 2021年11月, Springer).

HdB での生活とウィズコロナ社会に貢献するものづくり

楊 明

(東京都立大学教授、OM、中国)

HdB と出会い

私は 1980 年 4 月に京都大学工学部機械工学科に入学し、留学生生活をスタートしました。当時、まだ十代であった私にとって、海外が初めてで、右も左もわからず、すべてが新鮮でした。「君のチュータです、何でも困りごとがあれば相談してください」と言われて、学科先輩の千種さんが紹介されました。京都大学では留学生にはチュータが付くようです。とてもやさしい先輩で、勉強のことだけでなく、いろいろなことを教えてくださいました。何よりも HdB のレジデントであったことこそ、私が HdB と出会ったきっかけです。その後、度々 HdB に遊びに来て、皆さんと卓球をしたり、ビリヤードをしたりしたことを今でも覚えています。その半年後には念願の HdB への入居が実現できたのです。下の写真が当時一緒に暮らしていた方々です。ハウスファーザーのゲーリーさんと琴浦先生も映っています。



HdB は留学生の寮というわけではなく、レジデントの 1/3 が日本人の学生であること、ハウスミーティング[®]があつたり、コモンミールやサンクスギビングパーティー

ィなど多くのアクティビティがあることが、とてもよいシステムだと思います。価値観の異なる人たちと共同生活をし、ミーティングでの議論、イベントの企画などを通じて、価値観の多様性に触れ、理解できたことが、十代であった私の価値観形成に大きく影響したことは間違いありません。多くの人と出会い、その後も交流が続いていることは HdB にいたおかげです。今でも親しい友人である坂口君も HdB の OM で、当時、一緒に国際交流イベントに参加して、留学生と一緒にキャンプしたり、野球をやったりしていました。また、学科の先輩である川口さんや四宮さんも HdB の OM で、夜中まで一緒に酒を飲みながらいろいろなことについて議論したことが、その後の私のキャリアに影響をしており、今の大学教員としての研究教育活動にも役立っています。

ものづくり研究の面白さとチャレンジ

私は京都大学工学部機械工学科で、金属材料の塑性加工という研究室に入り、材料加工学分野の研究を始めたのです。金属材料を使って自動車の車体や各種部品の加工や各種筐体などの加工技術に関するもので、所謂ものづくりという技術分野です。身の回りのものがどのように作られたのだろうと子供のときにいつも思っていたので、好きな分野の一つです。1990 年京都大学工学部の機械工学科で工学博士の学位を取得した後、民間企業に就職し、1 年間企業の技術研究所で働いた後、現在務めている東京都立大学に赴任し、大学教員として、ものづくり技術の教育研究活動をスタートしました。当時、日本がものづくり大国で、電気製品や自動車技術で、世界を席巻し、日米貿易摩擦が問題になった時代でもありました。日本のものづくり技術は現場職人の経験や勘に頼りつつ、最新の設備の導入や、トヨタ自動車が開発したカンバン方式といった効率的な生産システムなど巧みに新旧技術を融合して世界をリードしていました。私は材料加工技術の一つである金属板材のプレス加工の研究していました。当時、人工知能の第 1 ブームでもあり、職人の経験や勘の代わりに、コンピュータを使ったプレス加工の自動制御システムの研究を行いました。どのように職人の経験や勘を表現するかなどものづくりの面白さを再認識しました。

しばらく金属板材成形に関する研究を続けた後に、あるきっかけで、精密計測分野の研究を始めることになり、ナノマイクロ材料物性の計測・評価、生化学分析用 MEMS (Micro Electrical Mechanical Systems) などの研究も行うようになり、2006 年以降は教授として、「先端材料加工学研究室」という研究室を運営することになりました。優れた機能を有するナノ材料の開発や先進的なマイクロデバイスの創製など新しいものづくり分野でのチャレンジを行っています。SDGs に貢献するナノ触媒などの機能材料の開発や先進的バイオ医療のためのマイクロデバイスの創製などで、ものづくり

の難しさに改めて気づかされているところです。

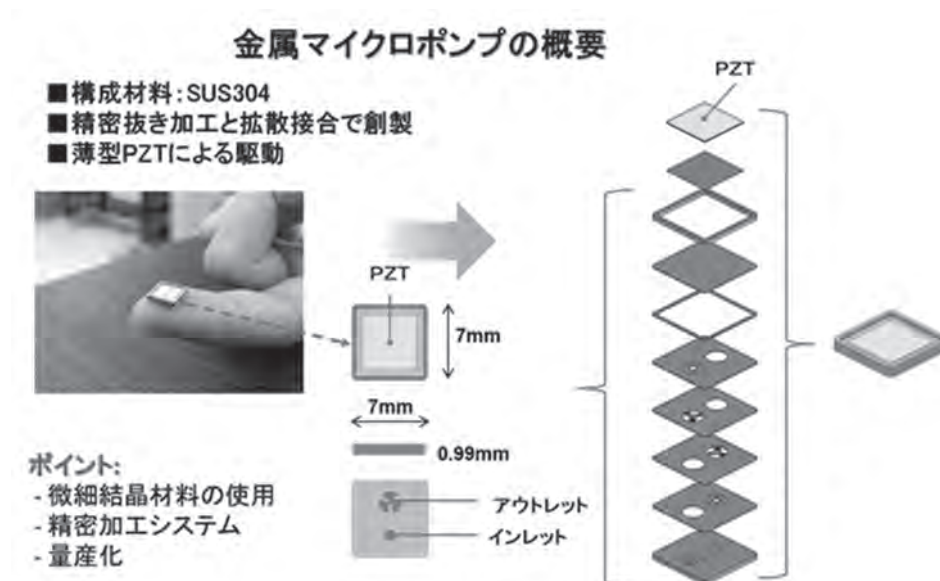
学際領域での研究の魅力

ものづくりにとって、いいものを作るための技術だけが重要ではなく、世の中のニーズに合うものを作る技術がとても重要です。例えば、患者に負担の少ない医療技術やその場でできる感染症検査などのニーズに対して、どう応えるかなど体の中に入れて手術する器具や感染症を早く検査できる検査装置の研究開発が機械工学系の重要な研究トピックになっています。ただ、手術器具の研究開発には、医者がどう使うかなどの知識が必要になるだろうし、感染症の検査デバイスの研究開発には、その検査原理を理解する必要があります。要は世の中の問題は多種多様で、複雑な場合がたくさんあります。多くの分野にまたがったような課題は、単独な分野での知識では解決できないことが多い。このような学問分野と分野に跨るような課題に対して、どのように取り組むかも分野によって異なるため、実に面白い。各学問分野がそれぞれの分野に必要な基礎的な知識や研究の仕方があります。また、学問分野が縦割りのところもあり、分野間の交流が少なく、互いに知らないことも結構あります。自分の常識が隣の非常識であったりします。このような学際領域での研究課題に対して、私の場合は各分野の専門家と組んで、研究プロジェクトを作って取り組むことにしています。そうすることによって、異分野との交流の中、自分では思いつかないような考え方や方法論が提案され、良いアプローチを見出すことがよくあり、とても勉強にもなります。

最近手掛けた研究プロジェクト事例を2つほどご紹介します。

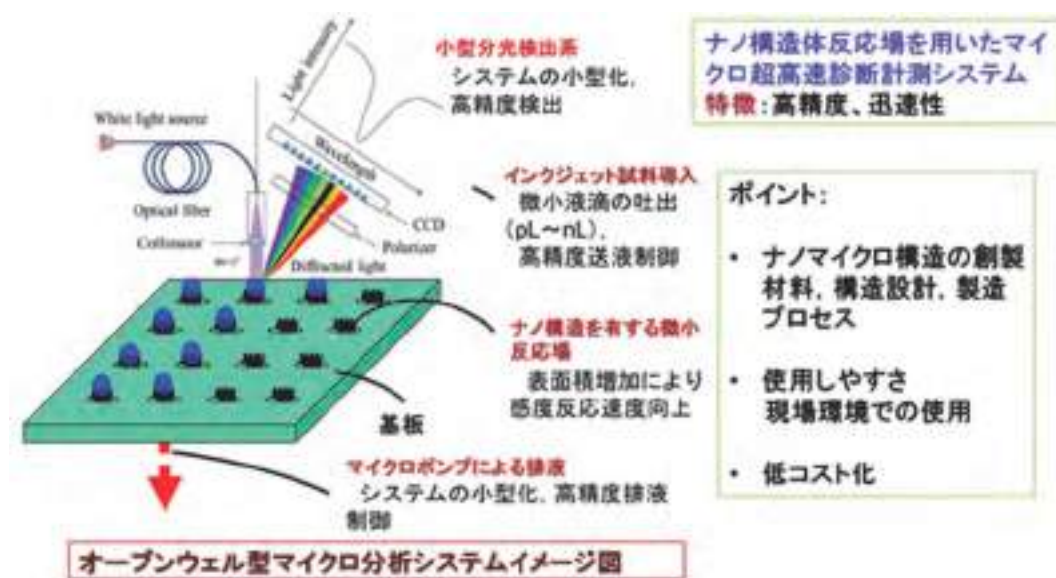
一つ目は、私が専門分野にしている金属材料のプレス加工技術を使って、MEMSの製造にチャレンジした研究です、MEMSは半導体材料を用いたコンピュータなどの集積回路チップの製造技術を用いることが普通です。これらの技術は、物理的なセンサーやアクチュエータの開発には適しており、例えば、自動車のエアバッグなどに用いられる加速度センサーなどが代表的なMEMSです。しかし、近年、生化学分析や先端医療のためのデバイスへの適用が注目されており、半導体材料以外に、樹脂やセラミックス、金属材料を用いたMEMSの研究開発も盛んに行われるようになりました。私の研究室では、薄紙のような厚さ $10\mu\text{m}\sim 100\mu\text{m}$ のステンレス箔材を用いて、従来の金属成形技術のマイクロかつ超精密な加工技術を開発し、人間の指先に乗るような金属マイクロポンプを開発しました。下図に金属マイクロポンプの写真とその構成を示しています。ポンプの寸法は $7\text{mm}\times 7\text{mm}$ 、厚さが僅か 1mm です。数枚のステンレス箔材を精密プレス加工で所望の形を作り、これらの箔材を重ね、拡散接合することで金属マイクロポンプが出来上がります。最上層のダイヤフラムにチタン酸ジルコン酸鉛(PZT)セラミックスのアクチュエータを張り付け、交流電圧を加えれば、PZT

が伸縮することで、ポンプとして機能します。この研究は、プレス加工企業、レーザービームやイオンビーム等の加工企業、さらに材料開発企業との産学連携プロジェクトで、国の戦略的基盤技術高度化支援事業助成を得て、実施されました。精密微細結晶粒径のステンレス箔材の開発、ナノ精密の金型創製技術、さらに高精度なプレス加工機械の開発によって、可能にした世界初の金属マイクロポンプの製造技術です。これらの技術は従来のプレス加工業界では使っていなかったようなナノ加工技術の導入や、材料メーカーの協力による超微細結晶粒径材料の開発などによって実現したものであり、異業種企業との連携で得られた新しいものづくり技術です。また、半導体材料と比較して、ステンレス材料を用いることにより、耐腐食性が強いだけでなく、材料の強度が高く、より強い力で、液体を送り出すことができるので、コンパクトでパワフルなポンプの実現を可能にしました。マイクロ生化学分析用の送液デバイスや医療の点滴用送液システムとしての応用が期待されます。



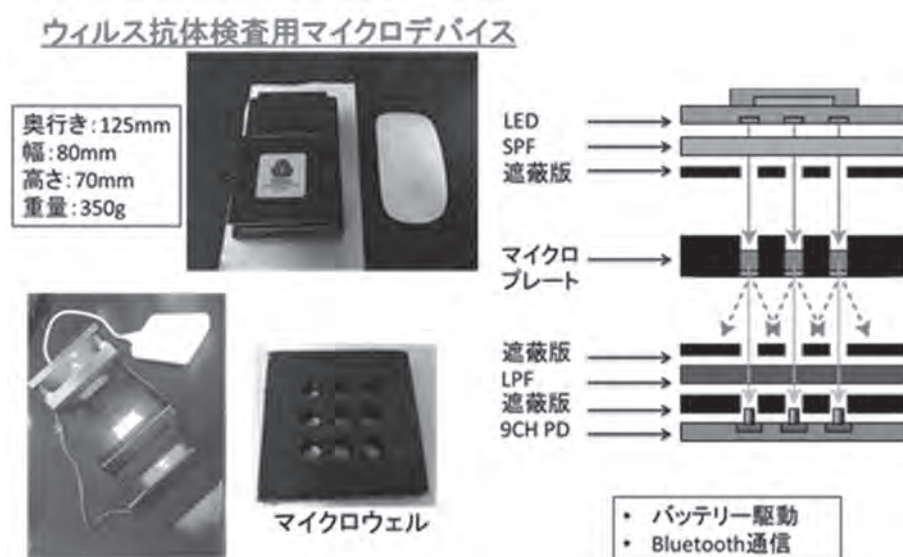
もう一つの事例を紹介します。近年、Point of Care Testing (POCT) に対する需要が高まっています。POCT とは、検査室ではなく患者の傍らでポータブル型分析装置や診断キットを用いて診療に役立つ有益な情報を得る検査方法のことを呼ぶ。POCT では、その場かつ短時間で検査データを得ることができ、緊急検査、感染症迅速検査、診察前検査、在宅検査などでの活用が期待されています。POCT を実現するためには、ナノテクを駆使したマイクロ生化学分析デバイスが注目されています。検出対象となる生体分子の検出する反応場の寸法を小さくすることで、生体分子の拡散距離が短縮され、従来デバイスに比べ、反応時間を短くすることが可能となるからです。また、

反応場に微細構造を多く配列することによって、比表面積が拡大し検出感度の向上も期待できます。私の研究室では、下図に示すマイクロなバイオアッセイシステムを開発しました。プレートリーダー用ウェルに、ナノビーズやカーボンナノチューブなどを用いたナノ構造体を作り込み、微小な反応場を用いたバイオアッセイデバイスを開発し、さらに簡易な蛍光検出装置で、検出感度の向上と反応時間の短縮を可能にしています。実際、感染症の定量的な検査の一種である酵素免疫測定法（Enzyme-linked Immunoassay; ELISA）をこの検査システムで行い、その特性評価を行ったところ、従来 4 時間程度かかった検査時間を 15 分程度に短縮することができました。この研究プロジェクトは東京都の高度研究助成金に実施されたもので、東京都都立大学の機械工学、分析化学、公衆衛生学専門からなる研究チームが、中国の清華大学の分析化学、マレーシアのマラヤ大学医学部亜熱帯感染症研究所、ベトナムのフエ大学医学部とのコラボで、進めていました。実際にマレーシアでデング熱の POCT 実証実験やベトナムで他の感染症ウィルス検査の実証実験を行い、システムの有効性検証を行いました。機械工学専門の私にとっては、他分野との連携、さらに国際連携で、多くのことを学び、ものづくりに活かされています。



患者の傍らで検査ができるように開発したポータブル型分析装置の概要は下図に示します。通常の検査プレートより小さい 9 穴のマイクロプレートを使っています。LED からの短波長パスフィルタ（SPF）を使った蛍光励起光だけを通過させ、各ウェルに光を照射します。ウェル中の色素から励起された蛍光が下部にあるローパスフィ

ルタ（LPF）を通過し、9チャンネルのフォトダイオード（9CH PD）によって検査されることで、市販のプレートリーダーと同様に ELISA 検査を可能にしています。大きさが携帯電話程度で、簡単に持ち運びができ、また、ブルートゥースで検査情報をパソコンに送信できるので、取り扱いもとても簡単です。このようなポータブル型分析装置を使えば、病院や検査センターが近くになくても、感染症発生地での感染症の定量検査が可能となります。



➤ おわりに

HdB との出会い、HdB での学生生活は私の価値観形成、研究スタイルに大きく影響を及ぼしたものです。価値観の多様性の尊重、学際領域の研究課題へのチャレンジ、異なる価値観の研究者との連携ができたことも HdB を通じて多くの出会いがあったからだと思います。現在、複雑な世界情勢の中でこそ、多様な価値観に対する理解・尊重が益々重要となっていると考えています。HdB の理念、出会いの大切さ、価値観の多様性の大切さを広く社会に発信し続けることを祈願しています。

<HdB の過去・未来・現在>

京都「国際学生の家」の経験から得たもの

前川佳世子

(1997 年 OM、元 HM)

私は 1997 年の半年間、レジデントとしてハウスに住んだ。そのことは昨年 of イヤブックに書いた of、その後のことを書こうと思う。

その半年間で様々な刺激を受けた私は、旅に出ることにした。見てみたいものがいっぱいだったので、飛び出してしまった。親は、貯金通帳からお金が引き出されているのを見て、「元気なんだな〜」と安堵していたらしい。

まず、中国各地を見てみたかった of、北京と成都と台北の学校に、3、4 カ月ずつ籍を置いた。授業に出ては、ぷらっと汽車に乗り、ひとりで出かけていた。中国は広い of、何十時間も汽車に乗る。席で隣になった人たちと、実践会話。見るもの聞くもの、もう面白くてしかたなかった。

北京では中央民族大学に行っていた of、その学校の民族学部の人たちと四川省の涼山彝（イ）族の村へ行かせてもらった。小学校を借り、机を並べてその上で毎日寝ていた。シャワーがなかった of、魚の養殖場の水に入ったり、泉の水で体を拭いたりしていた。民族学部の学生さんたちにも彝族の村の人たちにも大変よくしてもらった。みなさんどうしているかな？

その後、チベット方面にも行った。ゴルムドからラサまでは、バスで 37 時間ほどだったと思う。当時は鉄道がまだ開通していなかった。途中川の中をバスがそのまま通るのが新鮮だった。少しふわふわしたが、高山病にもならず、無事到着。

チベットには大きな湖がいくつかある。ナムツォは、チベット語で、「天の湖」を意味する湖で、標高 4,718 メートルにある塩水湖である。この湖はチベットのラサから 100 キロほどの場所にあり、幌のついたトラックの荷台に乗せてもらって移動した。荷台にはドラム缶も載っていて、転がってくるドラム缶と闘いながらの移動だった。夕方、途中休憩で降りたところに山があった。山はなぜか透き通っていて、虹色に輝いていた。しかも何かぶるぶる揺れていた（いまから考えると高地で空気も薄くドラム缶との闘いもあり、少しおかしくなっていたのかもしない）。ただ、今日の前で見えているものは、心の状態でまた違って見えることもあるのだな、ということが記憶に残った。



同じ旅で、チベットのある村を訪ねた。季節は春で、

ナムツォ

菜の花が一面に咲き、桜の花が満開だった。小さな女の子が桜の木を手折って私にくれた。この世にも天国があった。

その後、インドやネパールに行き（驚きと納得の日々）、ヨーロッパをふらふらしてから、台湾へ向かった。

台湾では語学の勉強の傍ら、茶館やお茶の産地を訪ね歩いた。台湾の料理も作れるようになりたいと、料理教室にも通った。料理教室の先生は、台湾でたくさんの料理本を出しテレビにもよく出ている有名人だったようで、テレビの料理番組に出演し、日本料理を紹介してくれないかと頼まれた。紹介したのは「いちご大福」。実は私自身作ったことはなかったが、先生に教えてもらい、なんとか紹介できた。

1999年9月21日、台湾で大地震が起こった。経緯は忘れたが、料理の先生と震源地付近に行くことになり、地震の多い国の代表としていろいろ教えてほしいと言われた。あまり知識もなく、力になれなかったことが悔やまれる。この先生には、その後台湾でフィールドワークをおこなったときにもずいぶんお世話になり、今でも交流は続いている。

2006年4月からHdBのハウスマザーをすることになった。もうたくさん思い出があり過ぎて書き尽くせないが、出会った人たちはそれぞれユニークで面白く、優しいかった。

ある時、冬にもかかわらず、屋上の電気温水器が壊れ、お湯を少ししか貯めることができず皆が心細い思いをしたことがあった。コモンミールの後のミーティングで知恵を出し合うのだが、そのとき自分の国の宗教上の習慣を話してくれたレジデントがいた。困った時にもひとつひとつ勉強になる。今も昔もハウスはそんな場所である。

さて、私たちがハウスペアレントになった秋にハウスアドバイザーとしてブアデンさんご夫婦がハウスを手伝ってくださることになった。クワンチワン・ブアデンさんはタイのチェンマイ大学の先生で、旦那さんのウィトゥーンさんは映像を撮る仕事をされていた。次男のダン君も半年だが日本の中学校に通うことになった。ある時、地下の古くて長いボイラーの筒に子猫が迷い込んだ。どんどん奥に入って行き、出られなくなってしまった。機転を利かせたウィトゥーンさんは、その猫の鳴き声を録音し、その音声を流した。するとその声を聞いた子猫が反応し、鳴き返してくるので、そのままゆっくり出口まで録音の音で誘導し、子猫を救出することができた。このように小さな日常の事件を解決しながら日々は過ぎていった。お二人はとても温厚なご夫婦であり、半年という短い期間ではあるが心の支えになった。そして私が後日大学院の研究会をチェンマイ大学で行うことになった時にも、研究会の準備、ホテルの手配、連日チェンマイとその近郊の見学に連れて行って下さるなど大変お世話になった。

かくしてハウスは「Haus der Begegnung＝出会いの家」であった。ロビーでひとりたたずんでいると、誰かが帰ってくる。「おかえり～」と声をかけ、なんとなく話が始まる。誰かが悩んでいるときは話を聞き、がんばっているのを見ると、自分も

ファイトがわく。異なった意見には、そんな考え方もあるのか、と違いを感じ、すこし柔らかくなった気もする。そういう考えを持つ相手や相手の育った場所のことも知りたくなる。生活を共にし、同じ釜の飯を食う時間があるからこそ得られる境地であろう。

思えばお世話になってばかりの人生である。ずいぶんいろいろな人に会い、いろいろな人に助けられ、たくさん影響を受けた。すぐにそのときにはわからなくても、あとからじわじわ効いて来る。ハウスからもらったものはたくさんある。どこに行っても物怖じしなかったり、すぐ仲良くなれたり、国を問わず人が大好きだったり。海外のニュースを見ても、あの人元気かな、と思いをはせたりする。人と人、国と国はこういう関係でありたいと自分の考えの核ができたようにも思う。きっとみなさんもそうではないだろうか。これからもこういう経験ができるハウスが存続できることを祈り応援していきたいと思う。（以下は当時の写真です。）



ウェルカムパーティ



ミーティング



スポーツデー



トリップ 白浜



国際食べ物祭り



ロビー



ダンスパーティ



感謝祭



雪の日の庭

HdB: An Expanding Rainbow in Kyoto from 1965

Hardik Tankaria (India)

Kyoto University

Hey! Are you wondering? What is the Rainbow?! That's the cultural rainbow!! The place where around 1000 people have stayed from 83 different countries, different culture, colours and background from the year 1965 and its continuously growing. I am glad to share my experience of living in HdB.

I am from India. India has very diverse culture! 26 different languages, and each state has their own different culture! Moreover, I have been raised in the joint family. Therefore, I have seen the diversity and the togetherness from the beginning. My post academic journey begins from my hometown, the westernmost city of India, Jamnagar (Gujarat). After completing the Masters at the IIT Hyderabad, I decided to join the Kyoto University to do PhD in the Mathematical Optimization (Informatics). I never had any experience of staying long term in the foreign country.

I came to Japan on the 25th September, 2017. Everything was totally new but exciting! New place, new people, new culture and you know it is not easy to adapt the local culture and the lifestyle. Thankfully, after a week, got few friends from the university. First 1 year I have spent in a private apartment. Then I came to know about HdB from one of my friends. I got invited many times by my friends in HdB during that time. I have been part of few HdB events and really enjoyed. Then, I wanted to apply in HdB as a resident but HdB is very popular among my friend circle. One of the rules of HdB of "no more than 3 residents from same country", therefore I could not enter the HdB.

Then suddenly, from March 2020, covid-19 broke all plans! I had spent most of days and months in my apartment, working from home and attending online meetings! It was really a tough time!

However, it was worth to wait for long time and finally, I gave an interview in the February 2021 and my application got accepted. I remember I have made dramatical entry in HdB with

many luggage on the 1st April, 2021. It has been just four months since I entered the HdB and I already got unforgettable memories and great friends too. Finally, as a rule of HdB, every resident have to take some responsibility, I became the 'High-Tech TOBAN'. Thanks to the old resident Randolph for upgrading new Wi-Fi and printer settings. Still, I need to fix some issues sometimes and that's what I like, solving issues and helping.

Lobby has been always the special place! When I come from university in the evening, I always stop by in lobby and some of friends always ask "How was your day?"! That warm feeling and familiarity, I have never expected in the Japan! That's why most of past residents will tell you that HdB is "home away from home" and that too a sweet one! Living in another country, new city can be stressful and lonely sometimes but now after coming to HdB, I don't feel either of these!

Well, the principle and purpose of HdB is to live together by accepting all differences and various cultural backgrounds! And I totally agree with the principle and the purpose of HdB. Specially, because living together with various international students with different cultural backgrounds expands your vision, perspective and give an access to one step forward to becoming an international citizen so that one can fit himself/herself to various culture like milk and sugar. Of course, living together as family isn't easy. It isn't easy to get along all the time and hence there is a chance of misunderstanding. But we all know how to treat each other in the respectful and the peaceful ways to make a memorable HdB life. We learnt how to deal with conflicts, problems, and different opinions. Therefore, I really feel that the organization that encourage international diversity and student support like HdB is really a need of the hour in current society.

As a foreigner student in Japan, when it comes to language barriers, Japanese people are very kind and try hard to help you, however, most of us still face few difficulties and can't do some basic things. I remember, Kanane always helped me when it comes to a problem of language barrier. She helped me for preparing my resume and filling up few important forms. One of the events I really love is the common meal!

Common meal - "The taste of togetherness! "

Did you ever see a plate where there is a Chinese main dish, another main dish is Indian, a

side dish from Japan and another side dish from Uganda, and a Korean sweet!? No right? Well, you can find it here in HdB! And yeah, a Vietnamese, a Taiwanese and a Singaporean have helped to cook all these delicious foods! There cannot be a beautiful example of togetherness than this!

I have made countless memories! Sport day and hiding in a billiard room. Going to ZAZEN in early morning around 5 AM and then having a delicious breakfast while coming back! A bicycle trip to Nara and coming back by train! Those movie nights with nachos! Specially, horror movies! And yeah, how can I forget my birthday party! We celebrated my birthday (14th June), Shun's (19th June) birthday and Andy's (27th June) birthday together with grand celebration with BBQ on 28th June! Thanks to the house parent Naresh-san!

I have made few lifelong friends. Andy and Shun, Kanane and Haku! Sharing secrets, caring and making fun! I might be able to tell a bit about all of these people. We all know each other quite well and what are the likes and dislikes. Specially, Andy! My BRO! I may call him workout buddy, and Sento buddy! Everyone I met embraced me more than I expected and helped without any hesitation.

We have got really cool house parents! Naresh san and Aya san both always provide their full support, gave new ideas and motivation. Finally, I would like to say that, world need to learn from HdB that if we all accept and respect each other's personal differences and live together then world will be a better place.



Wonderful Life

Kuroda Shun (Japan)
Open University

I'm Shun Kuroda 4th year in an online university called the Open University of Japan. Let me introduce myself first. Minami-Izu, a small town in Shizuoka surrounded by beautiful nature is my hometown. As we have beautiful beaches there, I have grown up surfing snorkeling fishing, and so on. I went to local primary school and secondary school with faces I had known since kindergarten as my hometown is quite small. I kept having fun in primary school and in secondary school, I joined the ping pong club and got really into it. My grade was good enough to go to a local preparatory high school but after spending all my life in small-town with the same friends, I started wonderer if it`s the right thing to do. It had influence from my sinter who enrolled in Open University of Japan and had totally different life from usual high school students. She has traveled to North America and almost all Europe.

As I enrolled myself in the open university of japan when I was 16 instead of high school, I had the advantage that I can study wherever and whenever I would like to. therefore in 2019 and 2020, both half year, i studied aboard in Denmark, in a school called folkscholen in danish. its boarding school students came from all over the world and study and live together. this one year in total in Denmark was full of new experiences that literally really changed my life in various aspects. one of things I found out during this stay in Denmark is that as a Japanese who lived in almost all my life. I didn't know anything of japan deeply and wasn't able to introduce to others. Therefore, after I came back to Japan. I started to study Japanese culture classes in university. but it didn't satisfy me. I wanted to study online and feel deep of Japanese culture and gave me the idea to visit Kyoto where heart of Japanese culture. this is reason I choose to live in Kyoto but I didn't decide where to live but one thing for sure was I would be so lonely if live alone after one year living in boarding school in Denmark also because my university is online. Hence, I started to look for dormitory and share-house then I found HdB. I really inspired by its principal because living together was exactly I experienced in Denmark that I thought I wouldn't find something like that in japan.

And not like other dormitory in Kyoto, HdB kept interaction within residence despite corona as much as possible therefore I made my mind to be part of this amazing place.

Now I would like to talk about my half semester living in HdB. The first day, I was very nervous and anxious, but thanks to all residents who welcomed me very openly with warm hospitality, it didn't take long for me to get friend with others. they took me to cherry-blossom viewing on first day and introduce me to not only HdB members but also ex-residence and international group that HdB have a connection with. I remember this day so clearly as if it yesterday but time flies and now it has been 4 months after I came here. We organized lots of events with all covid Preventive measures we could came up with and tried to have opportunities to spend time together. not just official ones, we organized movie night that we watch movie on big screen in lobby, ping pong championship, morning activity that we go on temple and do zazen or just dance in the morning in lobby, and so on. this semester wasn't easy for us as we are in the middle on pandemic and some of residents had been so busy with job hunting. However, when I look back, we made amazing memory together in HdB and deepen our connection. HdB is our second home where all feels safe and now my friends who live alone tell me what it's like to come back home with all lights off and nobody welcomes them.

In HdB, there's always somebody in the lobby who says "welcome back!", which is rare in this pandemic era people when suffered from loneliness during online classes and remote working.

As I'm one of the organizers of International Food Festival, I will do everything as much as I can to make it success that all the visitors enjoy and experience culture. As we welcoming new residence in new semester, I would like to welcome them as others did to me this spring and make it easy for them to get to close with residence as soon as possible. In the end, I'd like to say thank you for all people who support HdB. HdB wouldn't be exist without it.

伝えること、言葉にすること

宗岡泰斗（日本）

同志社大学文学部

皆さんこんにちは。私は、今年の4月から HdB に入寮している宗岡泰斗です。現在、高校時代までを過ごした鹿児島を離れ、京都での新生活を送っています。今日は、私自身のこれまでの経験と、これからの抱負をお伝えしたいと思います。というのも、私のこれまでの道のりは決して順風満帆なものではありませんでした。特に高校時代は、時に苦慮し、挫折し、紆余曲折を経ました。今、新しい環境で自分の目標に向かって、充実した日々を送ることができるのもひとえに家族をはじめとした、周りの人たちの支えがあったからに他なりません。これまでの人生の中で学んだこと、感じたことを少しでも今後の人生に活かせるよう、自分の言葉で発表します。

私には数か月もの間、高校に通わず、家に引きこもっていた過去があります。何もかもに嫌気がさし、自分に自信が持てなくなり、でもそんな自分が受け入れられず葛藤し、かといって何か行動できるわけでもなく、無気力にただただ時間を浪費する毎日を送っていました。家に引きこもってしまう明確な理由や決定的な出来事があったわけではありません。今振り返ってみると、周囲の人と自分を比べ、自分の理想と自分を比べ、何もかもが劣っている自分に嫌悪感を抱いていたのだと思います。

最初に電車に乗れなくなりました。当時は電車を使って通学していました。朝、家を出る時は、姿見に写る自分の姿を見るなり、「今日は大丈夫、大丈夫」と心で唱えてから家を出ていました。しかし、駅に着き、ホームから電車に乗り込む同じ学校の制服を着た人達を見ると途端に足が竦むのです。駅のベンチで1時間も2時間も泣いたこともありました。結局家に帰り、再び姿見に映る肩を落とした自分の姿を見て、また自分が情けなくなったものでした。

次に、話すことに恐怖感を覚える様になりました。欠点だらけの自分のことを誰かに知られることが怖かったのだと思います。家族や仲の良い友達にさえも口を閉ざしていました。全て自己完結すればよい、自分のことなど気にして欲しくない、そんな心の現れだったのかもしれませんが。話したくないのか話すことができないのか、側から見たら全く見当がつかなかったことでしょう。しかし、それは自分自身も同じでした。声が出ないのか出せないのか、わからなくなった時もありました。

そんな辛く苦しい時期にも、一度だけ、貴重な体験をしました。アメリカへのホームステイです。特別な目的は何もありませんでした。自分の語学力を伸ばしたいとか、

異文化に触れてみたいとか、まったく頭になく、ただただ現実逃避のために見知らぬ地を訪れたようなものでした。

しかし、そこでの生活は本当に新鮮でした。毎日触れる言葉や文化に圧倒され、一日一日が達成感と疲労感でいっぱいでした。何よりも、ホストファミリーとたくさん話をしました。拙い英語を使い、思いを伝えることに必死になりました。家に一人でいることが多かった私にとって、それは大きな喜びとなりました。

そんな中で気づいた、誰かと話をすることの面白さや、自分の思いを言葉にして伝えること、相手の思いを汲み取ろうとすることの大切さは、口を閉ざしたままだった私には感じられなかったものでした。今振り返ると、この経験が外へ足を踏み出す一つのきっかけだったのかもしれませんが。帰国後、高校を辞め、別の単位制の学校に編入しました。1年半の単位取得を終え、今年の春に無事卒業しました。現在、大学では、自分の好きな歴史について専門的に学び、幅広い知識を身につけています。

ここに辿り着くまでに様々な選択をし、決断をしてきました。時にそれは孤独で、周りから見れば間違った道を歩んでいたのかもしれませんが。しかし、そんな私だからこそ伝えたいのは、正しいから選ぶとか周りから見て間違っているから選ばない、ではなく、自分の選択に自信と責任を持つことが大切だ、ということです。選択は、悩み、考え、逡巡してこそ、大きな意味を持ちます。今後も、予想もしないような困難が起こるかもしれませんが、自分を信じ自分なりの道を歩んでいきたいです。

また、自分の言葉も大切にしていきたいです。一度は自分の思いを言葉にすることを諦めたこともありましたが、しかし、私たちは言葉にすることで思いを共有し、理解しあうのです。互いに伝え合うことや認め合うことの喜びを感じていきたいです。

HdBでの生活は、常に充実感にあふれています。すでにコモンミールをはじめとして様々なイベントに参加しましたが、レジデント同士、互いが互いを尊重し、理解し合う空気感がそこにはあります。何より、コミュニケーションを通じて、伝えることの喜びが感じられるのです。また、高い志と目標をもち努力するレジデントの姿に、常に刺激を受ける毎日です。

ふと、世の中に目を向けてみると、街行く人たちのマスクや、人と人が対話をするスペースに置かれるアクリル板は当たり前の景色になりつつあります。無意識のうちに、物理的な壁が私たちのコミュニケーションの障害となっていることもあるのかもしれませんが。それでも尚、こんな時だからこそ、私たちは伝え合い、分かり合おうとする姿勢を大切にすべきなのではないでしょうか。そして、HdBは常にその願いをかなえてくれる場であると信じているし、また、一人のレジデントとして、そういう場にしていきたいとも思います。最後になりますが、私たちの生活を支えてくださる、すべての方々に感謝いたします。ご清聴ありがとうございました。

After the rain, there is a rainbow

Vien T.T. Dinh (Vietnam)

Kyoto University

2020.04.01

Today is another rainy day and the day I moved into the Kyoto International Student House. After saying goodbye to my close lab mates who drove her car from Shiga Prefecture for helping me with moving stuff, I laid down on the bed with many thoughts wandering in my mind. What should I look forward to having something “new” in my second year of Master course? How to keep myself safe from the infection during the pandemic that no one among us might predict what is supposed to be on the incoming days. And where will I go after completing the study in Japan?

The following days and weeks were quite depressed for me like anyone else. The semester schedule was postponed for one month, all university activities were cancelled and even my laboratory suggested students refrain from coming to the campus. And I was the only newcomer moving to the dormitory at that time. The House mostly looked like an empty building without visible human presence and interaction right at the first hit of the COVID-19 when many Japanese students chose to come back to their hometown and the remains tried to practice social distance within their own room. This was not exactly what I expected when applying to the dormitory or choosing study abroad. And many of us would have the same feeling of isolation and insecurity regardless where do you live or what do you do.

Things were getting better when the school starts again and the House could gradually organize some online events. And we need to learn about a virtual system just over a night to adapt with the new era. Before last year, maybe none of us might know or even heard about Zoom or Google Meet or Slack. I still remember the first time I join my laboratory meeting from the dormitory and forgot turning off the microphone. My professors and other members could hear many different sounds from someone else cooking and singing in the kitchen next to my room. Or the next time, I had to join an international conference and could not figure out how to raise my hand virtually or join different breakout rooms on discussion section. When the overwhelming time is over, we can become more confidence with or even become an expert of using Zoom now. We should appreciate and being proud of how well we have adapted to the tough time.

What I want to say here is not to complain about the unexpected noise but how livable the life

could be when living in a shared space like this. I would be so much happy whenever I come back from the university, meet someone at the entrance and hear them tell me “okaeri” with a great smile, and then I can reply “tadaima” with another smile. This special greeting manner in Japanese culture has taught me a lesson on caring about other people’s feeling from smallest things within daily life. Or whenever I need some helps with completing the procedure in Japanese or simply to open a tight glass bottle, I can just come to lobby or stairway for approaching other members in the dormitory. We are never just some random people live in the same building but a family where we could feel welcomed and be loved whenever we come back.

Another important thing that I would like to mention here is that we do not only stay in the dormitory physically but also grow up and connect with others beyond this special and temporal boundary like what we do in the OM meeting today. Listening to others’ story of how they struggle to do job-hunting in Japan, schedule a plan to study or work abroad or the concerns back in their home country is a great source of motivation encouraging us dream about a better life and keep move forward with all our energy and ambitious to achieve that. Being inspired by HdB sharing life, I would be brave enough to apply for the Doctoral study in a totally different field that I have little background or experience before. But I know that if we believe in ourselves, anything is possible.

Staying within a community would never be an easy task when there will be lots of things you need to share with, discuss about or compromise for satisfying all members’ wishes. Personally, I am interested in the community and how the members interact with others and with outsiders for coming with a better place for all partners within the society. And that is an ideal outcome that we would aim to. So do I as a social researcher. Previously, I would normally position myself as an outsider observer to keep an eye on it, search for some boring statistic data and just visit the community several time during the fieldwork. But this time, I have decided to leave my comfort zone of “soto” side to step in, live and experience this “uchi” community.

When we think about a bigger community like Kyoto or Japan, we could see a similar pattern with what we have experienced in HdB. Even within the same community, everyone is unique with their special characteristics and perspectives that should be appreciated and respected to. Just like the Kyoto city has a long multicultural history with different ethnic groups such as second or third generations of Korean Zainichi, Chinese permanent residents or Brazilian Nikkeijin and recently an increasing number of international students and workers from everywhere in the world. And it was fascinating to see how these ethnic minority groups could gradually integrate into the supposed homogeneous Japanese people while still preserving

their cultural distinctiveness. I probably might not have enough time and effort to travel to different places or talk with different people to experience all things that I mentioned above. But I am lucky enough to experience the diverse world right here in the House.

2021.07.17

By this time next week, I will get the first jab of coronavirus vaccine hopefully, and by next semester, we could come back to the campus in a new normal life and more open events for inviting guests in the dormitory after that. For now, I do not exactly where will I go after the stay in HdB but there is one thing I would say for sure that it is a worth lesson for me that I could understand more about other people and grow up to become a better version of myself. I would like use these value experience and knowledge that I have accumulated during the time for building up any community that I would encounter with in the future and for making the voice of invisible people could be heard by a broader audience. In the end, after the rain there is a rainbow, after the pandemic there is a new opportunity waiting for us. Thank you!



【OM 便り】

Think Globally, Act Locally 世界のカーボンニュートラル議論に思うこと

千種 直樹

(Director General, WANO (World Association of Nuclear Operators) Tokyo Centre)

先日、第三回公開講演会で、楊明さんと吉村一良さんのお二人が「HdB から育った科学者」としてお話をしておられる姿を拝見し、大変懐かしく思い、当時ハウスペアレントをされていた琴浦先生に思わず電話をしました。その後、琴浦先生、内海先生から OM 便りに投稿してはとのお話をいただき、こうしてこのページで皆さんにお便りをする機会を得た次第です。



まずは自己紹介から始めたいと思います。私は、楊明さんや吉村一良さんとほぼ同じ時期の 1979 年 4 月から 1982 年 3 月までの 3 年間 HdB でお世話になりました。その間、ハウスレジデントの Chairman の役も仰せつかり様々な経験をさせて頂きました。私が学生だった 1970 年代末から 1980 年代前半の時代背景を少し紹介いたしますと、当時は激動の時代でした。

ポーランドでは民主化運動が盛んになり、その中心人物である自主管理労組「連帯」のワレサ議長が 1981 年に来日したことが印象的です。一方、イラン・イラク戦争や、フォークランド紛争が起こった時代、またベトナムからのボートピープル問題やカンボジア難民問題等様々な出来事があ



りました。また、当時HdBではそれらに関係する国々からのレジデントやゲストルームに滞在される海外からの先生方がおられ、実際にご家族や国の友人等がその渦中におられたりし、HdBに居りながら耳にする声はさながら激動の世界情勢そのものを映し出したものでした。コモンミールの後でセミナーを企画したり、レジデントの部屋で夜遅くまで語りあったりして、それぞれの窮状を互いに話し、理解しあったりもしました。写真に示しますのは、ポーランド科学アカデミーの教授でゲストルームに滞在されていた先生のハウスでのセミナーの風景です。先にも示しましたが、当時ポーランドではワレサ議長を主導者とする民主化運動が起こっていました。そのような中で、1981年の冬にポーランドで戒厳令が公布されたため、先生は故郷に帰れないと嘆いておられたのをよく覚えています。

私は、HdBでの3年間でこうした様々な経験を通じ、国際関係とはこんなに複雑なものなんだということを実感するとともに、しっかりとコミュニケーションをすることで、まず真実をしっかりと把握し、その上で文化、習慣、考え方の違いを理解し、互いに認め合い、そしてそれぞれ自分たちの実情に合った行動、対応の方向性を模索することの大切さを学びました。

“Think globally, Act locally”という言葉は世界中の様々な場でよく使われています。今、この言葉を私なりに解釈してみますと、先ほどご説明した、HdBでの学び、そして私の後の人生を一貫して支えてくれている大切な考え方であるように思います。

私はHdBを卒業した後、電力会社に就職し、それから40年間、一貫してエネルギー問題と関わってきました。とりわけ私にとっての大切な仕事の一つとして、低炭素社会におけるエネルギー戦略の構築があり、電力会社の立場から長年関わって来ました。COP3以降、世界では低炭素社会に関する議論が活発化し、その後低炭素から脱炭素に向けて議論が加速され、今年イギリスで開催されたCOP26では、2015年に採択されたパリ協定に基づき、各国が地球温暖化対策を協議しました。皆さんご存じのG7サミットは、経済問題、政治問題そして環境問題を総合的に議論し、参加各国や国際機関に今後の政策についての指針を示す役割を持っています。

そのG7の国々の主要電力会社で作るE7というサステイナブルエナジーを議論する世界会議があります。ここでは、地球温暖化問題を中心に、電気事業に関するグローバルな問題について検討・協議し、COPなど国際会議での提言や、持続可能なエネルギー開発の推進を行っていました。私は本店の課長時代にこの世界会議でG7の国々の電力代表と議論し、COP6の時に様々な提言に向けて調整を重ねた経験があります。再生可能エネルギー、火力、水力、原子力の電源構成も各国で大きく違い、エネルギー基本政策も国によって大きく異なります。そんな中、交渉のキーとなることはやはりサステイナブルな社会を実現するというグローバル目標に、各国の実情に合ったアプローチをうまくまとめていく、Think globally, Act locally というものの考え方でした。

そして今、**WANO Organisation**

私は

WANO(Wo

rld

Association

of Nuclear

Operators)

という、英

国ロンドン

に本部を、

東西ヨーロ

ッパ、アメ

リカ、アジアに4つの地域センターを置く、世界の原子力発電所の安全を見守る国際組織で仕事をしています。

このWANOという組織は、世界の全ての原子力発電事業者がメンバーとなり、原子力プラントが世界最高水準の原子力安全を達成することを目指して1989年に設立された組織です。

10年前に発生した福島事故は世界に大きな衝撃を与え、多くの方々の日常と幸せを奪った、許されざるものでした。原子力を活用するならば安全性についてあらゆる対策を講じなければなりません。

WANOは原子力エネルギーそのものの普及、促進を目的とした組織ではありません。

私たちは、世界最高水準の原子力安全を世界の全ての事業者に求めるため、事業者と共に協力し、安全評価、ベンチマーク、安全情報交換、グッドプラクティスの交換、相互支援等の様々な活動を通じて原子力安全を最大レベルに引き上げていくこと、これを我々のミッションとしております。

私はWANOの本部組織の幹部役員（Member of the Executive Leadership Team）とし

◇ Not-for-profit organisation

◇ Every operator of a commercial nuclear power plant is a member (127 members, 449 reactors in operation, Dec 2020)

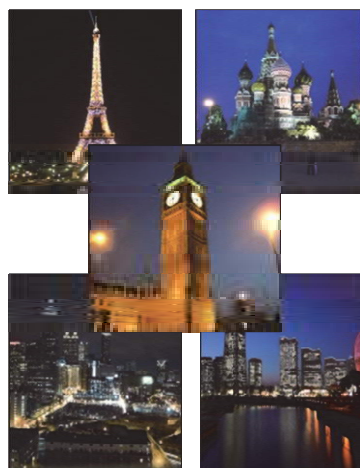
◇ London office and four Regional Centres

◇ Paris

◇ Atlanta

◇ Tokyo

◇ Moscow



て、またアジア地域の活動を統括運営する Tokyo Center の代表 (Director General, WANO Tokyo Center) としてこの国際的な、原子力安全の最大化に向けた活動をリードしています。

先日英国で開催された COP26 では WANO を代表して CEO の Ingemar 氏が、下記プレス文にもあるように世界の原子力産業界をしっかりと支援し、原子力安全を最大化することにより、このパネル討論のテーマである”Nuclear Innovation for a Net Zero World”に貢献して行く、と明言しました。私も幹部役員の一人として、そしてアジア地域の代表として世界に示したこのコミットメントをしっかりと実行していきたいと思っております。

WANO reinforces the industry's commitment to maximising safety and performance at COP26

Ingemar Engkvist, the Chief Executive Officer at WANO, emphasised the unique contribution of WANO and its members in maximising safety and performance at COP26 in Glasgow yesterday.

A panel discussion with industry leaders took place at the UN's flagship climate conference, where panellists discussed nuclear's crucial contribution to a net zero world, at an IAEA side event entitled: 'Nuclear Innovation for a Net Zero World'.

Engkvist commented: "It is important for national, business and civil society leaders to know about the industry's unique collaboration under WANO, and how our members are very committed to maximising nuclear safety and performance. All operators of nuclear power plants share knowledge and support each other. What is truly unique about our industry is that WANO brings competitors together, with a shared goal and willingness to make the worldwide industry safer and more reliable."

Ambassador Rafael Grossi, the IAEA Director General, led the discussion, and the panel consisted of Mr Engkvist and Sama Bilbao y Leon, WNA Director General, John Hopkins, NuScale Chairman and CEO, and Boris Schucht, CEO at Urenco.

Engkvist added: "Furthermore, we offer support to new units wherever they are being built in the world. All operators are ready to support new countries such as Ghana – whose energy minister we heard from earlier in this event – in their nuclear journey. In this way, the industry will continue to grow in many nations, provide reliable, low carbon energy to their communities, and help nations meet their net zero targets. I have no doubt that the nuclear industry will be a vital player for climate change for many the decades to come."

Before the industry panel, a high-level conversation between IAEA Director General Grossi and national ministers discussed the complementary role of nuclear power and renewables in the transition towards a carbon-neutral future. Two further panels discussed nuclear innovations required to achieve net zero targets for climate finance, and the development of new technologies.

For more information on the event, please visit [Nuclear Innovation for a Net Zero World | IAEA](#)



**UN CLIMATE
CHANGE
CONFERENCE
UK 2021**

IN PARTNERSHIP WITH ITALY

これまで述べてきましたように世界では「脱炭素」の流れが加速しています。しかし、昨今のカーボンニュートラルとエネルギー政策の議論を見ますと、理想が独り歩

きし、気候変動のために脱炭素を進めても電力不足という現実直面すれば LNG を買いあさり、世界的な燃料高騰を引き起こし、経済、安全保障に大きな影響を与えています。昨年 2 月には米国カリフォルニア州、テキサス州、9 月には英国、中国での電力需給ひっ迫など、またその他、オーストラリアやフランスでも電力危機や停電が多発しています。こうした中、フランスではマクロン大統領が国内での原子力発電所建設を再開する方針を示す等、世界では夫々の国の実情に併せて様々な対応がとられようとしています。

このように昨年世界各国で発生したエネルギー危機は我々に大きな教訓を与えてくれます。一部の評論家は、これらについては、「脱炭素社会への産みの苦しみ」だと言いで片づけていますが、経済、安全保障の問題を軽視して地球温暖化の問題に正しく対応できるとは私には思えません。

また、再生可能エネルギーのみを神格化させるような議論や、感情的な反原子力論者がバランスのとれた議論を阻害する等、何か宗教がかった論争になってきていることにも懸念しています。

国際環境経済研究所理事の竹内純子氏は文芸春秋 12 月号で次のように指摘しています。「脱炭素の”宗教化”はエネルギー危機を招く； 再エネの一神教化；

結局のところエネルギー政策は「リスク管理」につきます。どんなエネルギーにも必ずリスクがあります。リスクを完全になくすことはできないのでいかに最小化していくかです。そのため政治や国民が密にコミュニケーションをとり、議論していく必要があるのです。（中略）「脱炭素」という崇高な理想は宗教化しており、すぐそこにある危機を見えづらくするのもかもしれません。再エネの一神教化や、急ぎ過ぎた議論は違うリスクを生み出しかねません。そうなれば結局、取り組みの持続性が失われてしまいます。気候変動問題は、喫緊の課題です。だからこそ感情ではなく理論と技術で解決に向けて取り組まなければなりません。」

また、先日「NHK日曜討論」カーボンニュートラルどう進める」を見ていますと、経済産業研究所の有馬純氏が次のような意見を述べていました。

「将来の脱炭素社会（SDGs）には若者の声がかぎ。そのためにはまずしっかりリテラシーを高めることが大事。環境リテラシーもその一つ。「反原発原理主義」、「再エネ原理主義」 福島事故以降この二つの原理主義が冷静な議論を阻害してきたことは残念なこと。原子力発電を含め、皆がタブーなく議論していくことが大事。」

やはりこうした地球温暖化問題は、感情ではなく、真実をしっかりと見つめ、理論と技術で解決に向けた取り組みをしていくことが大切なのではないのでしょうか。

くどくどとお便りを書いてしまいましたが、HdB での学びは、私にとって最大の宝物です。こんな良い経験をさせていただいた HdB に感謝致しますとともに、このようなハウスが今後も長く続き、多くの学生の皆さんに、一生大切にできる豊かな経験を与え続けることができますよう心から祈念いたします。

以 上

山茶花（さざんか）

孫 曉萌（ソン・ショウモン）（中国）

現：東京在住

私は 20 年前ぐらいの 1998 年 4 月に HdB に入寮し、2001 年に退寮しました。この 3 年間で、YearBook や Vending Machine、Sportsday などを担当し、最終的に自らの立候補で Chairperson になりました。HdB（Haus der Begegnung 日本語：出会いの家）で皆様との深い交流を通じて、私が大きく成長でき、HdB は私にとって楽しい思い出がいっぱい詰まる場所でもあります！

当時の思い出をいくつか紹介させてください。

<食事会の驚き>

月一度開催の Common Meal は、私にとって一番の楽しみです。Common Meal でこれまで食べたことのない各国家庭料理を堪能できて、料理に対する価値観も大きく変わりました。例えば、ドイツ料理には鶏肉と桃（缶詰の桃）の煮込み料理があり、桃の甘味と鶏肉の旨味が相性抜群で煮込んだ鶏肉も柔らかくてジューシーです。また、タイ料理食事会でココナツミルクを使ったグリーンカレーをはじめて食べました。その独特な香ばしさに驚き、タイグリーンカレーにすっかりハマりました（笑）！

<住まいの快適さ>

1 階の応接間にはテレビが設置され、週末になるとみんなと「映画上映会」を楽しんでいました。応接間の東側に卓球台も常設されていて、よくみんなと卓球していました。試合に負けても懲りずに卓球し続けました！試合した後の爽快感はよいのでしょうかね～

2 階南向き部屋の窓の下に突き出し屋根があり、天気の良い休日の昼間に部屋の窓に座り、コーヒーを飲みながらお庭を眺めていました。本当に最高です！

また、冬ではボイラー室による各部屋への暖房提供があり、冬でも部屋で暖かく過ごせます。ボイラーの保守維持費はかなりかかるそうで、現在、ボイラー室はあるかどうかわかりませんが、ボイラー室による暖房提供は大変快適です！

<遊の楽しさ>

Sportsday の行事で、「バスケットのスロー」という競技項目があります。ルールは簡単です。参加者は競技線に立って、ゴールネットにスローします。シュートが入らなかったら、アウトです。シュートが入ったら、残った参加者でスローし続けます。最後に残った参加者は優勝となります。この競技の参加者は 20 名近くで、私は何回スローし、シュートしたか覚えていませんが、最後に勝ち残り、優勝した

ことは鮮明に覚えています。シュート達人は沢山いまして、まさか自分が優勝できるとは夢にも思わなかったので、HdB 学寮生活のもっとも楽しい思い出の一つとなりました。

最後となりますが、世界からの学生はHdBに集まり、お互いに意見をぶつくり合いながらも、共に大きく成長していきます！学寮の設立に関わる方々や、サポートし続ける方々に心より感謝しています！私も社会人の一員として、これからも HdB 学寮を応援し続けたいと存じます。

本稿のタイトルである「山茶花（さざんか）」は最後の最後に登場します。

山茶花の花言葉には、「困難に打ち勝つ」、「ひたむきさ」という意味があるそうです。みなさんの力をあわせれば、どんな困難でも打ち勝てることを信じています！



<山茶花> 撮影地:奈良 撮影日:2020/1/1

HdB 退寮後の現在

Hibiki Murakami (村上 響、日本)

(龍谷大学大学院文学研究科卒業、2017 年 HdB 退寮)

2015 年、京都国際学生の家こと HdB へ入寮してからそこで二年間を過ごし、退寮してからは約四年が過ぎました。現在、私はカリフォルニア州のロサンゼルスで本願寺の僧侶として、現地で仏教の伝道活動に勤めています。この度はご縁を頂戴して、HdB の寮生だった頃以来のイヤーブックに投稿する為、原稿を書いております。

コロナウイルス感染症は皆様ご存じの通り、アメリカでは大変多くの罹患者を出し、大統領選挙も重なったことで国内では異様な雰囲気しがばらく続いていました。私がロサンゼルスに来たのは 2020 年の冬でしたので、アメリカ国内でコロナ感染症がパンデミック化してロックダウンが始まった時期とほぼ重なります。一刻も早く、事態が沈静化することを願ってやみません。

仕事の都合もありますので、ロサンゼルスに来てからは一度も日本へは帰国できていません。ですが、私と同じ時期に HdB で過ごした友達とは今もビデオ通話などを使って、定期的に連絡を取り合っています。私にとっては初めての海外での生活ということもあり、新しい人間関係を構築するのが難しい状況が続くなかで、学生時代の思い出を共有できる友達がいることは、心の支えになっています。さらに、このコロナ禍にありながら、日本に限らず HdB から（私を含めて）世界中に散った友達のことを気に掛けることができるのは、聖護院のあの場所で過ごした経験があつてのことでしょう。

さて、どういう訳か今 HdB で過ごした頃を思い出そうとすると、やたらと夜間の描写が多いです。コモンミール、サンクスギビング、一階のロビーに集まってする不定期の食事会、等々。今は一人暮らしで個食が続いているからでしょうか、今とは対照的な生活をしていた当時の面影が脳内にちらつくことがたまにあります。自宅には、日本からロスに持ってきた HdB 創立 50 周年の時に寮生全員にプレゼントされたマグカップが置いてあります。京都時代の思い出の品の中から、HdB のマグカップをここに持ってきたのは、自分が意識している以上に当時の思い出が大事なようです。

末筆ながら、私も微力ではありますがクラウドファンディングに協力させて頂きました。今後も学生たちの国際交流の場として、寮が機能し続けたいと思っています。



“ハウス”が変えた私の生き方

朝倉寛之（1982年入寮・日本）

扇町レディースクリニック院長

1980年に大学に進み、その前後3年間は吉田山中腹の古い下宿に寄宿していました。教養課程で後に家族となるマレーシア出身の留学生から HdB を知り、アジア世界への関心を抑えきれずに1982年4月に入寮しました。それまで他人、特に言葉と文化の異なる人々と共同生活をしたことが無く、毎日が新鮮な経験の連続でした。2年間の在寮期間中、コモンミール担当およびコミティーチェアマンを務め、外国語を駆使して難問に取り組むという希有なレジデント生活を送りました。自己主張をしつつコンセンサスに収束するというヨーロッパ流の問題解決に目覚め、外国といえば米国という考え方は、ある意味で偏狭的と気づきました。当時、中国からの日本国費留学生が徐々に増えており、彼らの卓越した知的および運動能力に、彼らの母国はいずれ強大な国家になるという予感を強く抱きました。軍隊生活を経験した韓国からの友人からは、簡素な暮らしぶりの美しさに気づかされました。

寮を去ってからも世界の友人との絆は続き、学生時代にタイ国農村における保健衛生研究のフィールドワークで3ヶ月に滞在し、留学後に大学で教職を得た友人達を訪問しました。1989年に今度は自分が米国に医学留学する準備に渡航した際、転がり込んだのは共にコミティーを運営したフィリピン人友人のご自宅でした。2001年夏、9.11の直前に12年間過ごした米国を去り、母国の医療界で新たなチャレンジを求めて帰国（または第2の留学？）しましたが、ハウスは存続し、コーラー先生の設立理念の元に運営が継続されていることに安堵しました。ロビーで当時のアルバムが保管されており、感激しました。複数の留学生友人らが現在、日本の大学で指導的立場にあることを、我が事のように嬉しく思います。

時は流れ、人々のコミュニケーションがデジタルで行う時代でも、本当の異文化理解は、HdBの様に共同生活をする場で育成され则认为ます。それは異なる考え方を吸収できる若い時が望ましい。これからも、HdBが「出会いの家」であり続けることを祈念し、微力ながら支援し続けたいと思います。

ダンバー数と京都国際学生の家理念

内海 博司

(HdB 理事長・京都大学名誉教授, 1965OM、元HF)

留学生寮「(公益) 京都国際学生の家」の理事長を預かって10数年になる。思い返すと58年前に日本人学生としてこの「家」に入寮した時には、スイス人家族と日本人の家族の二組のハウス・ペアレント (House Parent) が寮生のお世話をしていた。寮生は2階に16人、4階に16人で、1階に住んでいた日本人HPが2階の学生を、3階に住んでいたスイス人HPが4階の学生のお世話をするという話であった。当時は男子寮であり、1/3は日本人学生、後の2/3は留学生で、留学生の場合は1国から3人までという入寮制限があった。この寮は、創始者のスイス人のヴェルナー・コーラ博士が考えた理念「共同の生」を実現する寮として、スイスと日本の国民有志からの寄附金を集めて創られた国際寮である。

この「共同の生」とは、外国人学生と日本人学生とに、学寮という生活の場を提供することによって、異なる国家あるいは民族の間に厳然として存在する人種、宗教、慣習、文化さらにはイデオロギーといったものの相違を、入居学生相互に対決 (confront) させ、これらの相違を互いに認め合った上で、一個の人格として出会う「共同の生」を体験させる。この様な相互の相違を認識し、相互に承認し合うという、きわめて厳しい努力と体験を通じて得られる寛容 (Tolerance) が、人類普遍の願望である人類共存の道を達成する有力な手段であり、同じ屋根の下で営まれる世界の若者達による「共同の生」を通じて実現するという趣旨に賛同した多くの人々によって設立された。つまりこの学寮は、単なる留学生寮ではなく「世界平和の為の訓練の場」として設立された留学生寮である。それだけに、開寮当初には高い理想の憲法はあるが、そこでどう生活するかという法律に相当する規則の類いはなかった。

そこで初代の学生である我々は、コーラ博士の理念を具現化する色々な試行錯誤に付き合わされることになった。毎日夜9時に館内放送で自分の考えや感じたことを述べさせられたり、2階と4階に分かれて、毎週金曜日の夜に各ハウス・ペアレントが主催するコモン・ミールという食事会に出席し、その後ハウス・ミーティングという会議に出席して、種々の問題について議論をしていた。しかし1つの建物で一緒に住んでいる学生達にとっては、京都で初めての留学生寮であったことや、この寮に日本人も入居するという珍しさも手伝って、寮の趣旨を十分理解せず入寮した学生達が多かった。何故そうしているのかという理由が理解できず、分断統治されていると感じて、私も含めて寮生達は、全員一緒に会議や食事会をすべきだとして両ハウス・ペアレントに抗議を行った。そのような議論を重ねた結果、最終的には全体でコモン・ミールやハウス・ミーティングが行われることになった。

しかし30数人にふくれあがった会議では十分な議論も出来ないことが判明し、私たちは学生達の組織を作ることを提案した。しかし60年安保闘争で、多くの大学の学生寮が学生運動の拠点になったことを知る日本人ハウス・ペアレントの稲垣京大教授は、あの悪夢をここで起こしたくないと大反対であった。しかし長い話し合いの結果、学生の組織である議長・副議長・会計・書記をつくるが、そこにハウス・ペアレントも入った「チーム」という組織がつくられ、生活をスム

ーズにするための諸規約もつくられた。この学生組織とハウス・ペレントで構成されるチームが、前もってチーム・ミーティングを行って、全体会議であるハウス・ミーティングが行われることになり、やっと 30 数名の会議もスムーズに行えるようになった。

学生を半分に分けた理由は、人がとことん議論できる人数は 10 数名であるという話があったからだと聞いている。実際、軍隊や今の自衛隊での最小単位である分隊・班も約 10 名ほどであり、小隊は 30～40 名ほど、中隊は 150 名ほどである。最近、この 150 名という人数は、人間がお互いを認識して 1 つのコミュニティとして成立可能な上限とほぼ一致すると言われ、この 150 名という集団サイズを「ダンバー数」と呼ぶという記事を読んだ。はじめて聞く数値であった。

そこで「ダンバー数」をネットで検索すると、ロビン・ダンバー教授というオックスフォード大学の認知・進化心理学研究所長の名前に由来することが判明した。「友達の数は何人？ ダンバー数とつながりの進化心理学」(2011 年)という本と「人類進化の謎を解き明かす」(2016 年)という彼の著書(翻訳本)が見つかった。私自身が生物学(放射線生物学)を生業にしていたので、ヒトの進化にも当然興味を持っていたにも関わらず、10 年前に出版された彼の本に出会うことがなかったことに驚いた。このコロナ渦でもあり、早速取り寄せ読み始めたが、私が長らく疑問に思っていた多くのことが明快に解説されていたことに 2 度驚いた。

「友達の数は何人？」は、さらっと語られ読みやすいが、引用文献もない一般向けの本であった。しかし実際は膨大なデータを集め、緻密なリサーチを重ねた末の成果を平易な言葉で語っていることが、「人類進化の謎を解き明かす」を読むと明らかになった。このダンバー数は、ネット・コミュニティ論や組織論などにおいても、脚光を浴びているようで、クリス・アンダーソン著「フリー」、ニコラス・A・クリスタキス他著「つながり」、マイケル・S・ガザニガ著「人間らしさとはなにか？」などがあり、ぜひ読みたいと思っている。

進化心理学・進化人類学は、ヒトの心や行動を、進化という背景から解き明かしていく新しい学問だそうである。例えば、1 夫 1 婦 (1 雌 1 雄) という決まったパートナーと連れ添う関係が続けている動物種は、体格のわりに脳の大きいことが、ダンバー教授らの研究でわかってきた。その理由は、一夫多妻・乱婚型に比べて、一対一のつながりは、より複雑な交流をしなければならぬ。つまり、うまくいかなそうな相手を見抜いたり、相手に合わせて自分の行動を変えたりしないといけないので、頭(大脳新皮質)を使う必要があるということらしい。「婚姻スタイル(性システム)」は、脳(心)の発達・進化に深く関わっていることを発見したそうである。

ダンバー教授を有名にした「ダンバー数」もこうした発想から生まれている。「ダンバー数」とは、気のおけないつながりを維持できる、つまり人間の脳が性格や行動を記憶・蓄積できる他者の上限人数は、ほぼ 150 人までということらしい。ダンバー教授は、霊長類の群れが大きくなるほど、脳の新皮質の比率も大きくなるという相関を見いだしている(社会脳仮説)。そこから類推して、ヒトの場合は 150 人という規模になると結論している。

そこでこの仮説が正しいかどうかを確かめるため、人間の自然な集団サイズとして、狩猟・採集で生活するヒト集団を調査している。食べ物を集めるために泊まりがけで移動するときは、30～50 人程度の小さな集団であるが、狩猟場や水源を共有する約 20 の部族集団の人口調査を行うと、100～230 人の幅があるが、その集団の平均人数は 150 人であることを突き止めている。文明

化が進んでいる社会においても、毎年のクリスマス・カードを発送する数が約150や、アメリカのアーミッシュという厳しい宗教戒律に基づいて独自の共同体を形成して生活している人々の平均は110人で、150人を越えると共同体を二つに分ける。またビジネスの世界でも、その組織が150人を越えるとまとまりがつかなくなるそうである。150の次の数値は500である。

ダンバー教授は、その著書のなかで15人位の集団についても言及している。社会心理学でのシンパシー・グループ（ほぼどのような状況下でも心から信頼できる人の数）が、12～15人であり、ほとんどの団体競技の1チームの人数がこれくらいであり、陪審も、キリストの使徒もと書かれている。本学生寮が開寮した半世紀前にも、この数値は良く知られていたのであろう、ハウス・ペレントが15人にこだわっていたのも当然だったかと思われる。

更にヒトが他の類人猿や旧人がなしえなかった大人数の集団を形成できた理由についても解き明かしている。これまでの考古学は石器と化石骨の組み合わせと、その発掘地の地質学に証拠を求めていた。しかし、こうした「石と骨」に力点が置かれてきたことから、人類進化の社会的側面とその認知基盤は疎かにされてきた。そこにダンバー教授等は、既に述べた大人数をまとめる「社会脳仮説」を立てて、実証してきたことと、人類の祖先達が一日の時間をどう使うか、摂食、移動、休息、社会的関係の形成のためにどのような時間を割り当てるかという「時間収支モデル」を入れて検討し、現生人類であるヒトが如何に他の類人猿やネアンデルタール人を含む多くの旧人達より優れていたかを説いている。興味を持たれた方はダンバー教授の著書を読んで欲しい。

興味ある話として、ヒトとヒトとの絆を作るのに役だった血縁、言語、文化、宗教等の話がでていますが、特に「料理」や「音楽」が如何に役立つかについても解説している。

つまり、我が留学生寮が行ってきた種々の伝統行事、特に「食」を中心とした活動、同じ釜の飯を食う会食「コモン・ミール」、近隣住民と食事をする「国際食べ物祭り」、あるいは「音楽会、ダンス・パーティー」等も、10数万年の太古から先人達が利用してきた絆づくりの常套手段であったことが判明した。我が寮が、それらを「共同の生」を実現させる手段として、大いに利用していたのも必然なのかも知れない。誰かと一緒に食事をする「共同飲食」（共食）は人間特有の行為で、同じ時間に同じ場所で同じようなものを食べることで共食者同士の親近感を強める作用があるのは、長いヒトの進化の中で身につけた慣習で、理性では抑えられない本能に近いものかも知れない。

だから、新型コロナの感染拡大の要因の一つとされ、あれほど大人数の会食の注意喚起が行われていても、更に自分たちが言っておきながら厚労省の役人が感染症にかかる危険を冒してまで「会食」をしていたのも、理性では抑えられなかったのであろう。歴史的にも、この「共食」は社会的にも利用され平安時代の法令集「延喜式」には、外国の使者が訪れると役人が共食のために遣わされた旨が記されている。この饗宴で心を通じ合わせて、外交の本題に入ったようである。そのような選ばれた人達の晩餐会ではないが、我々一般庶民も春の送別会、歓迎会、懇親会などの宴会が、コロナの蔓延で出来なくなると人間関係が自然にギスギスしてくるのは当然なのかも知れない。為政者はこの会食の重要性を良く理解して、このコロナ渦でも会食が行えるような安全な防護策を提案して、飲食店にも一般の人にも徹底させることが、飲食店も一般の人達も喜ぶ施策ではないでしょうか。

【ハウスペアレンツとレジデント】

Another Awesome Year As A House Parent

Naresh Bedi
(HF, OM)

It has been another awesome year as a house parent of all the incredible residents here at HdB. As we are still in the middle of the coronavirus pandemic, things were not very different compared to last year. As people got vaccinated and the infection rate seemed under control, we were able to carry out more events, of course with strict measures against coronavirus spread. We had more residents compared to last year and it was an amazing experience to deal with all the differences and specialities we all have.

Spring Semester

Welcome Party 2021/04/09

We were able to hold our official welcome party for the new bees. Thanks to the team, Haku (China), Kanane (Japan), Vien (Vietnam), A (Japan) and residents, it was carried out very nicely. All the new and old residents introduced themselves and talked to each other creating bonds which will last forever.

As the coronavirus infections rate grew again, we were not able to carry out events face to face and were forced to have them online. Although, it was weird to see faces which we are used to seeing in our day to day lives, thanks to the hard work of everyone, we enjoyed it.

IFF (International Food Festival) 2021/08/07

The International Food Festival is held every year to show our gratitude to our supporters and neighbors and share international food culture from different parts of the world. We took strict measures to control the spread of coronavirus and held the IFF in a takeaway style. Residents prepared food stalls from Uganda, China, India, Vietnam, Taiwan and Korea. There were more guests than we expected. The food was awesome like always. We are sure that everyone who came had an amazing time and now knows a little bit more about foods from different countries around the world. Hopefully we will be able to have a traditional IFF next semester.



Fall Semester

Welcome Party 2021/10/08

We started the fall semester with a new team Natalie (Singapore), Hardik (India), Taito (Japan) and Y (Korea). Very few new residents joined HdB as the world is still in the grip of coronavirus, making it difficult for international travel. The coronavirus seemed under control in Japan at least for some time and we were able to carry out events face to face. The new team members and everyone else did an amazing job organizing and introducing the HdB's culture to all the residents. We were joined by the committee members. It was a moment when I really thought that the coronavirus was under control and life would come back to how it was before the pandemic.

Common Meals (2021/10/29, 2021/12/3, 2022/1/14)

We had 3 of our common meals and we were actually able to invite a few guests. It was limited but I am sure that the guests loved the atmosphere and everyone experienced food and culture from around the world. As we did not want to take any chances, strict measures were taken to control the coronavirus spread and only vaccinated guests were allowed to join.

Japanese Garden Seminar (2021/11/13)

We have a beautiful Japanese garden in our backyard. It was there and nobody paid any attention to its beauty and importance until one of our supporters, Ms Takada, came up with an idea of cleaning and introducing the significance of Japanese gardens and culture to all of us. It was completely a new thing for all of us. Mr Nakamura (Japanese professional gardener)



explained the culture and ideologies behind the gardens in Japan. He and his assistant showed us how to turn a messy garden into a beautiful one. It was a day long work but was totally worth it. Now we can actually sit down and enjoy it.

Thanksgiving (2021/11/20)

Thanksgiving day is one of the main events in the house. We wanted everyone to enjoy it to the fullest but at the same time we were also concerned about the safety of everyone in this pandemic. We carried it out in a takeaway style, so that we could avoid crowds eating and talking at the same time. We had performances by a student band from Kyoto University, Mr Koshima (Mixi) and residents along with



house parents who sang and danced. We were not expecting many people but quite a lot turned up and it was a mission accomplished. Thanks to the hard work of everyone, we were able to show our gratitude to our supporters and everyone else who joined.

The Awesome Trip (2021/12/11-2021/12/12)

The Awesome Trip as we call it, is a great opportunity for everyone to break the ice, get out of their comfort zone and make great memories. That's what happened during this Trip too. The place was Soni Kougen with a magnificent view of stars at night. The tobans did a great job and it was truly an amazing experience for all of us. Everyone shared the moments of their lives and created bonds which will definitely last forever.



Christmas Party 2021/12/18

The last official event of HdB for 2021 was the Christmas Party. It seemed like everyone was waiting for this for a long time. The tobans along with the residents did a great job in organizing. Everyone helped in preparing dishes from different countries and decorating the house. It really was a warm Christmas with our lobby glittering with lights and Christmas

songs as the background music. We were joined by the committee members and some of the old members of the house. Residents danced and sang Christmas songs and in the end exchanged gifts among each other, making it another memorable event.



Big Clean Up 2022/01/22

This is again a big event for the house as we get to clean the places (lobby, kitchens, laundry room, etc) which are not cleaned everyday. Even Yoshitake san and Mizuyauchi san joined to help us. There are things which are not used by anyone and are placed there for years. This time we did not hesitate to get rid of most of the unwanted things. HdB is all clean and tidy now after the hard work of everyone.

Last Common Meal/ Farewell for this semester (2022/1/28)

The sixth wave of the coronavirus is here and we were forced to have an online CM/ Farewell party. To avoid the gatherings, we decided to order bentos for everyone and have it individually in our rooms. Followed by the house meeting, where new team members were elected and Yamada sensei said a few words to everyone. Some of the residents will leave the house and start a new life working in different sectors. I hope that the golden moments and memories of HdB will stay in their hearts forever.

We are still in tight grip of coronavirus with no surety about what tomorrow will bring. We have somehow managed to keep the virus at the doors and I really hope that it stays that way. When I was living here as a student, I really felt that HdB is a home away from home, where everyone comes together to have an amazing time of their life regardless of their background. It is not hard to see that vibe in all of us living here. I really hope that this will go on forever and ever. Cheers to life and cheers to HdB.

昆布干しバイト in 利尻島

A. K. (日本)
京都大学総合人間学部

皆さんは利尻島を知っていますか？北海道の北の端・稚内から更にフェリーで 1.5 時間の所に位置する北の離島です。6 月下旬～8 月上旬まで約 1 ヶ月半、利尻島で昆布干しのバイトをしていました。きっかけは大学構内の掲示板。偶然見つけた求人に応募し、就活が終わってすぐ利尻島に飛びました。

利尻島は全国でも有名なブランド昆布の産地ですが、基本的には全て手作業の天日干し。バイトは朝（深夜？）2 時半に起きるところから始まります。利尻昆布は一日中晴れの日にはしか干せないのですが、天気予報だけでは判断できないため毎日漁師さんが起床後、島のいくつかのポイントを周って風や雲を見て判断します。

干せそうだと連絡が来たら自転車で海のそばの干場まで移動します。まだ真っ暗な 3 時から昆布干しがスタート。漁師さんが養殖場から揚げた昆布がトラックで干場まで運ばれ、それを一枚ずつどんどん地面に並べていきます。利尻島の昆布干しは島民総出。漁師さん達の親戚はもちろんのこと、それでも足りず島中の警察官や教師、市役所職員、医者、看護師も総出で早朝から昆布干しの手伝いをして、その後それぞれの職場に出勤します。下は小学生から上は 80 代のおばあちゃんまで、様々な年代の人に混じって作業します。全ての昆布を並べ終わると風で飛ばないようにネットをかけて 7 時頃に朝の仕事は終了、その後は皆で朝ご飯。島のお母さん達を作ってくれたおかずやおにぎりを食べて一息つきます。

京大生のバイト用に漁師さんが一軒家を用意してくれたので、期間中は 5-10 人でそこで共同生活をしていました。朝の仕事が終わって家に帰ると、それぞれシャワーを浴びたりオンライン授業を受けたり寝たりカードゲームで遊んだり…。昼に 1 時間程度、風で裏返った昆布を直す作業をし、夕方 3 時に乾いてパリパリになった昆布を全て拾って紐で縛り倉庫に入れて一日の仕事が終わります。家に帰って夕食を食べ、次の日に備えて夜 8 時には寝ます。

昆布干しの仕事は天気に左右されるため、晴れが続く限り毎日干し、雨や曇りが続けばずっと休みです。最初の 2 週間はほぼ仕事がなく、その後は 8 日間働き詰めというメリハリのある働き方でした。私は 4 回生で授業がなく、日中が暇だったので島のラーメン屋でもバイトをして週 3 でラーメンを食べていました。（血圧が 25 上がりました…）

漁師さんが長年の経験と勘でその日の天気を予想して昆布を干すか決めますが、利

尻島は中央に高い山があり雲の動きが複雑なため、外れることも。その場合、夕方に昆布を取り込むところまでは同じなのですが、乾いていないため金網に並べ直して機械で乾燥させます。しかし機械で乾燥できる枚数は上限があり、超えた分は廃棄せざるを得ません。漁師さん曰く「昆布干しはギャンブル」だそう。実際、私がバイトしていた時に一度、トラック数台分の昆布が廃棄になりました。無事天日干しで乾燥できた昆布は倉庫に保管し、秋～冬にかけて一枚一枚カットして長さや重さを基準に等級に分け、出荷するそうです。

早起きや連勤はきつかったものの、自由時間には釣りをしたり山に登ったり自転車で島を走ったりと利尻島の自然を楽しみました。また、漁師さんが時々ウニやホタテを持ってきてくれ、海の幸を満喫することもできました。学生最後の夏休みを利尻島で過ごすことができ良い経験になりました。皆さんも機会があれば是非利尻島に遊びに行ってみてください！



Thank you, bro! Family!!

安藤健太（日本）
同志社大学文学部

僕の人生は大きく変わった。留学プログラムの中止に伴い、日本でできることは何かと探し見つけたのがこの国際寮でした。ここに来て、馬鹿なことができる仲間、大好きな恋人、頼りになる兄さん、姉さん方に出会えました。そして、みんなとの出会

いが自分の価値観を大きく広げてくれました。中でも同時期に入寮した旬と Hardik は特に濃い時間を過ごしました。そして、何より、この寮に来て一目惚れしたはくちゃんと一つ屋根の下で生活できるのは幸せでしかないです。ここに来なければ、みんなとの出会いもなかった。そう考えると、留学プログラム中止になってくれてよかった。塞翁が馬とはまさにこのことだなあとしみじみ思いました。

ここに来て色々なことをしました。特に、旬と一緒に入寮当時から movie night や sports night, night walk など daily の非公式のイベントをたくさん行いました。自分は人を集めて何かやるのが好きだったので、ノリノリで参加してくれるこの HdB のみんなのおかげで、毎日が楽しくなりました。朝起きて朝活ダンスして、帰ってきたらロビーで勉強して、人が集まったら卓球やビリヤードをして、、今日は何をしようかな？と毎日ワクワクでした。HdB の梅の実から梅酒を作ったり、自分たちで誕生日会を企画したり、みんなで早朝圓光寺に座禅に行ったり、サイクリングで奈良に行ったり、たくさんの思い出ができました。

この大学生という時間を色々な人や物に触れて自分の経験値、価値観を広げていきたいです。やはり、HdB の中で共同生活をし、その中で学生自治や、当番制による仕事と責任、対人コミュニケーションを実践的に楽しく学べる最高の環境です。HdB で過ごせる残りの日々を大切にこれからも過ごしていきたいです。



日本語教育のすすめ

A. Y. (日本)

筆者は2021年3月に学部を卒業し、4月から大学院生となった。専攻は、学部生の頃から日本語教育である。大学院へ進学後、よりいっそう日本語教育への愛情が深まったと感じるため、ここでは日本語教育の魅力を三つ述べたい。

そもそも日本語教育とは、「海外にルーツを持つ人を対象とした、外国語としての日本語の教育」である。このように説明すると、「実際の指導の現場」に焦点を当てた研究分野であると想像されがちだが、実は幅広く非常におもしろい分野なのである。

まず日本語教育の魅力一つ目は、日本語をメタ的に知ることができるという点である。日常生活において、母語話者が自力で母語の全体像を把握することは難しい。中国語を母語とする日本語学習者の多くが「た」と「だ」の発音の区別という課題一つにしても、発音の際に口内がどうなっているか、両者をどのように区別し発しているのかということは日本語の音声についての学習経験がない限り、母語話者であっても日本語学習者へ説明をすることは容易ではないだろう。ぜひ、一度自分の母語を見つめ直してみてもはどうだろうか。

次に二つ目の魅力は、日本語教育に関連したニュース・施策を知ること、社会における深刻な問題を理解することができる点である。理解しやすい例として、1993年に導入された「外国人技能実習制度」をあげる。これは、外国人に日本の技術を学んでもらい、その後、自国でその技術を活かすという「国際貢献」「技術移転」等を目的とした制度である。だが、これは建前であり、日本における「労働力不足」を補うための制度であるとの批判も少なくない。「実習生がいなければこの町はやっていけない」とインタビューに答えた農家も存在する。また、奴隷制度のようなものとなりつつあるとの声もある。事実、現場の監督者による過度な監視・賃金の未払い・労災隠し・虐待等の報告は後を絶たない。2020年に失踪した実習生の数は6000人弱である。無論、全ての現場がそのような環境であるというわけではなく、実習生と現場の人びとが良好な関係を築き、自国に帰り技術を広げる事例もある。というか、そもそもこれが本来の技能実習制度導入の目的である。

これらの問題は、(1)日本の一部地域における、深刻な労働力不足、(2)技能実習生の人権侵害、(3)諸外国における貧困と搾取の、三つの問題点をはらんでいることがわかる。このように、日本語教育に関わるニュースから諸問題を捉えることができる。

最後に三つ目の魅力は、在留外国人のバックグラウンドや日本語学習の困難点を理

解することにより、彼らへの理解を深めることができる点である。近年、日本における「生活者としての外国人」の増加に伴い、文化・言葉・生活習慣の違いから起こる近隣トラブルが多く報告されている。たとえば愛知県豊田市に位置する、住民の約半数をブラジルにルーツを持つ人びとが占める「保見団地」はかつて、「ブラジルをルーツに持つ住民 VS 日本人住民」という形で対立しており注目を集めていた。日本人住民らははじめ、「なぜブラジルにルーツを持つ彼らは話し合いに参加しないのか」「ゴミ出しのルールを守らないのか」「外で大音量の音楽を流し、BBQ をするなど非常識なことをするのか」といった不満を持っていた。しかしながら次第に、彼らが「日本語を理解できないためお知らせ等を読むことができない」「ブラジルでは、仲間内で集まりパーティーをする文化がある」といった事情があるため起こったことが明らかになった。その後、この争いは「ブラジル人」「日本人」として互いを見るのではなく、同じ「保見人」として共生しようという結論に至り和解した。

このケースでは、一部のブラジルにルーツを持つ人びとと日本人が何度も話し合いを重ねたことで互いの事情を知り、解決に至った。もし、皆が日本語教育の学習を通して海外にルーツを持つ人びとの日本語学習の困難さや生活習慣等への理解を持てば、彼らへの対応や見方が柔軟になったり、歩み寄ったりすることができるかもしれない。それにより、社会全体が変化するかもしれない。年に一度受けられる、「日本語教育能力検定試験」に挑もう。



Current life at HdB

Chang-Yu WU (Taiwan)
Kyoto University

In 2021, people on earth still fighting against COVID-19. Residents in HdB are no exception. We have some rules and restrictions to make sure everyone is safe and can still have comfortable lives here. From this semester, we can invite our friends to the common meal and Xmas party. I feel so happy that our lives began to recover although we still have a lot of work to do to get everything back on track.



In this semester, we also had a trip to Mie and Nara prefecture. We learned about the Ninja culture by watching the Ninja show in Iga city. Also, we experience nature in Soni Highland. The view from the top of the mountain is really amazing, Last but not least, we understand the harmony between nature and art in Uda city.

Besides, Japanese garden day is the new event in this semester. It is the first for me to study the principle of designing a Japanese garden. In addition, it is also the first time to clean the garden since I moved to HdB. After several hours of working, we have a clean and beautiful garden now thanks to the participants' efforts.



It is my last semester in HdB. I feel bad because I have to leave in March, but I believe we can still work together to enrich our community lives in these difficult circumstances.

No goodbyes forever

Dennis Obster (The Netherlands / Germany)

Yukawa Institute for Theoretical Physics, Kyoto University

For me, 2021 was the year I would leave HdB. As for many people, to me HdB was more than just a place to live, but a place to make new friends and really call home. The fact that I have lived in HdB only for a month during this year, but still am asked to write for the yearbook, tells a lot about the community that has been built. In this article I will reflect a bit on my past.

My first interaction with HdB is already more than four years ago. I used to live in Japan as an

external researcher for my master thesis, and I met some friends who were living in HdB. When I came back to Japan two years later, I was looking for a place to stay and the house had a nice community that was really interesting to me. I started living here and enjoyed it for one and a half years. The common meals were always awesome, and the events organised by residents were always great. For me, organising a trip by car to Hyogo was one of my favourite moments, besides having lengthy discussions with Randolph about how to improve the house's wifi system (I hope it is working well now!)

I was leaving at an irregular time, during the semester in January. Because of this I did not really expect any form of goodbye, and hoped I might be invited for the actual goodbye party in April. However, after the last common meal I attended, suddenly it turned into a surprise goodbye party, with pretty fans with personal messages that I still enjoy looking at. I have been lucky to make great friends at HdB and I will treasure all my memories and friendships I made over there.

Luckily, during the autumn of 2021 Japan has been doing quite well in terms of the pandemic, and I have been lucky enough to be invited as a guest to the most recent Christmas party. It was really great to see many friends at HdB again, but also see so many new faces who are continuing to make it a place worth living. From the experience of me and many before me it is clear that coming from a foreign country or a different prefecture, having nice people to live with and have fun with is of utmost importance. And even though I don't live here anymore, it is amazing that it is still possible to come back and feel part of this community anyway. Life goes on, but friendships remain so that you can be sure that goodbye is never forever.

Cocktail of Life

Hardik Tankaria (India)

Kyoto University, Graduate School of Informatics

Good night! Its 11:25 PM and I have been told by year book toban that today is the due of this report. I won't exaggerate the things related to HdB life and come to the **point**.

If you ask, what are the things I will remember of HdB after 5 or 10 years, then I would say that I will remember the **HdB – WiFi** password! Lol!!

Don't think too much, it's just because I am **High – Tech** Toban. Since my major is



Informatics, I have been assigned to a high-tech toban from April, 2021. My duty is to manage the HdB-wifi and printer that is placed in the lobby. Main task is to solve the internet/wifi problems of other residents and to function printer properly. Sometimes, it stopped working and I had to fix the router and/or modem in the early morning or even at the late nights.

Apart from High-Tech toban, I am part of the team, and I am an **accountant** in the team. I think readers might be aware of the concept of the **“TEAM”**. Team’s job is to observe, discuss, and solve the various issues/problems of HdB such as 1) do we need to buy some gadget like google chrome cast, 2) guests are allowed to enter the resident’s room only if they are vaccinated etc. Another thing I would miss from HdB is to play Table-Tennis and Billiards. It is really refreshing to spend some time playing Table-Tennis and Billiards with someone. Especially when you have a busy day in your lab or part time job.

One other thing I can share is that being a **lacto-vegetarian**, there is only one vegetarian dish in the common meal and it is very less. That’s why I could not participate in most of the common meals. Also, because of the same reason, there were very few chances to be a part of hotpot parties or dinner parties. However, if more vegetarians become part of HdB then I hope things will improve and there would be more vegetarian dishes in the common meal and other events like trips, etc. It is important to understand that vegetarian meals are helpful to preventing global warming and it is going to help the **“net zero carbon emission”** challenge of Kyoto 2050.

Finally, I would like to share **friendship** and caring people. I have got some true friends who were always there for me. Especially Andy, Haku, and Shun. Also, there were good discussions and memories with Natalie, Stellah, Vien and Soumya. Of course, everyone has their point of view and sometimes it is difficult to reach the conclusion or take further decisions. However, most of the people are mature and have come up with satisfactory solutions. The best moment of the HdB was the Trip night on the Soni highland. We were playing poker and drinking together. I was very lucky to hear other residents’ love stories, their secrets, and the most embarrassing moments of their life.

I am happy to meet some of the new residents who came in October’21. Kazuki, Miu, Junya and Noah. Noah is the youngest in the whole HdB and I think he is the most mature guy in the HdB!! Alright, now I am feeling sleepy now and have to go to the lab at



10:00 AM tomorrow. Enjoy the **red wine** while playing **chess** and play some beautiful music on piano. Hope my stickers on the **piano** will be helpful.

楽しかったこと

服部みちる（日本）

同志社女子大学



10月27日キャラバンのおでん
四食目でお腹いっぱい
しあわせ



5月4日ハンバーガー食べに行った
楽しかった



11月30日誕生日会！
料理がいっぱい！
美味しかった！

12月6日初めてもつ鍋を食べた日
牛串もチヂミも美味しかった！



素敵な出会いに恵まれた 2021 年！！

祝迫美羽（日本）

京都大学経済学部

私にとって 2021 年は多くの出会いの年でした。今回このレポートでは、大学に入学した 4 月から現在に至るまでを振り返りたいと思います。まず 4 月に私は京都大学経済学部に入學しました。コロナ下ではありましたが、入学式や入学してから二週間の授業は対面で実施することが出来、新たに多くの友達を作ることが出来ました。また残念ながら飲食を伴わないものではありましたが、様々な部活やサークルの新歓にも参加することができました。琵琶湖にヨットに乗りに行ったり、アーチェリーに挑戦したりと普段ならできない経験ができたのが良かったです。私は最終的にテニスとバドミントンのサークルに入会しました。4 月末から 6 月初頭にかけてオンライン授業に移行しましたが、4 月の時に出来た友人と個別に連絡をとったり、家でまったりと Netflix を見たりと楽しく過ごすことが出来ました。6 月中旬ほどからは対面授業も再開しはじめ、あっという間にテスト週間を迎え、夏休みに入りました。



夏休み前半はサークルで BBQ に行ったり、高校の友人と集まったりまったりと毎日楽しく過ごしました。後半はサークルの友人 20 名ほどと北海道へ免許合宿に行きました。講習を受け、運転をして、テニスをして充実した毎日を送りました。北海道はご飯がとても美味しかったです。夜は友人とほぼ毎日ランニングをしておしゃべりしたのはとても良い思い出です。



後期の授業が始まり最初はオンラインだったのですが、10 月の中旬からほとんどの授業が対面で始まりました。私はこのタイミングで HdB に入居しました。最初は色々な人と話すのがとても緊張したのですが、Welcome party やコモンミールで優しく話しかけてもらえ、段々と楽しく話すことができるようになりました。またコモンミールの料理はどれもとても美味しく、毎回皆さんの料理の腕に驚かされています。11 月はサークルの回生旅行で静岡に行ったり、友達と富士急ハイランドに行ったり、サークルの団体戦があったりとイベントが盛りだくさんであっという間に過ぎていきました。12 月に入ると HdB の旅行がありました。私は旅行当番だったので上手くいくか少し

心配だったのですが、とても楽しい時間を過ごすことができて本当に良かったです。目的地や宿泊地、やることなどすべてを大人数の旅行で計画する経験は初めてだったのですが、他の当番の人にすごく助けられながらもやり遂げることが出来、良い経験になりました。また今年は、HdB、友達、家族と合計5回のクリスマスパーティーをしました。それぞれ過ごし方は少しずつ異なり、どの会もとても楽しく過ごすことが出来ました。HdB のクリスマスパーティーでは、たくさんの人とお話しでき、美味しい料理と楽しいパフォーマンスでとても素敵な時間でした。

この一年は想像以上にあっという間でしたが、素敵な出会いに恵まれ充実した一年でした！！



From Rookie to Old Bird (Four years life in this house)

Jason Lin (China)

Kyoto University, Medicine Doctoral Course

Since moving in HdB, it has been almost 4 years, while I am writing this essay. Originally, HdB was not my priority to be my staying house, but I didn't notice the application deadline of school dormitory, instead my junior classmate in National Taiwan University, Judy Tsai, suggested me this funny, warm, and historic dormitory, so this is the opportunity why I joined HdB this big family.



Actually, studying in Japan was my first overseas long-term staying experience, before moving in HdB, I was very worried about how to communicate with Japanese as well as foreigners, also concerned about could I make any friends here? In the beginning, like other eastern Asia students, I was quite shy and silent, only participated official events, but not unofficial events, such as travel, eating out and joining party. At that period, I preferred travel alone or only invited Taiwanese friends I knew in Kyoto University. This situation lasted almost 2 years; however, it was changed as one global event happened.

In the early 2020, covid-19 outbreaked in China and spread to whole world. Just during that period, many of HdB residents left, and almost no new students joined our family, so the old residents like us, were forced to take more responsibility to sustain the traditional HdB events. The most meaningful work in HdB to me is the half year of doing chairman this job at that moment. From that job, I learned more skill to communicate with residents with different background and personality. After the end of my chairman term, the biggest thought that I learned from this half year is recognizing each variety between different people, attempting to respect them even you are in different view with them. And above thing, I think it is also the fundamental idea of people who build this first international student dorm in Kyoto.



During the past three and half years, HdB is the major place in which I can learned Japanese culture, custom and knew a lot of friends, no matter foreigners or Japanese. Even though organizing and assisting the events held in every semester were really a challenging duty for me while my working progress was at busiest time, I could not imagine if I living alone, how boring it would be, how much chance of understanding Japan I would miss, and most importantly, how many friends I would lose. Thank you HdB, wish we can see each other again even if I leave Japan.

第三の道

黒田旬（日本）

放送大学教養学部

私は今年3月の終わりごろからHDBに入寮しました。引っ越しをしたその日から退寮するレジデントのお別れ会に呼ばれて、とても暖かく迎えてもらい、すぐに溶け込むことができました。暮らしにだんだん慣れてくると自分でいろいろ企画するようになり、映画をみんなで見たり、卓球大会を開いたりしました。とても充実した生活を送っています。

さてここではhdbでの生活についてではなく少し別のことについて書きたいと思います。それは今まで自分が歩んできた少し特殊な進路についてです。私は静岡県伊豆半島にある小さな町の出身で、人より猪の方が多いような大自然の中で育ちました。小中と地元の公立校に通いましたが、中学卒業後は高校に進まずに放送大学に入学し

ました。放送大学は300以上の一般教養科目をテレビやラジオ、インターネットで配信している通信制の大学で、BSなどで放送しているのを見たことがあるという人もいます。

実は15歳(高校一年生)から選科履修生という形で入学することができます。その後18歳になるまでに16単位以上を履修すれば18歳から全科履修生というコースにステップアップできます。これを修了すれば学士を取得することができ、高校を飛ばして大卒になるというわけです。

自分はこの制度を利用して15歳から放送大学で選科履修生として学び、今年からは全科履修生になりました。最初は1年間で25単位くらいのゆっくりとしたペースで履修していましたが、コロナ禍では集中的にとったりしたので今学期末で110単位くらいを見込んでいます。単位は来学期で取り終えるのですが4年在籍する必要がありますので卒業は2025年の見込みです。

さて、自分がこのような特殊な進路を選んだのにはいくつか理由がありましたが、最大に理由は6歳上の姉の存在です。姉は中学を卒業した後放送大学に入学し、大学での勉強と並行して語学の習得に打ち込みヨーロッパやアメリカを旅していました。田舎町の非常に狭い世界観を生きていた自分にその影響は大きかったです。

自分は放送大学に入学してから先ほど書いたようなゆっくりしたペースで勉強し、空いた時間は無回転卓球というニュースポーツの普及活動に充てました。これは自分が中学校の時に卓球部だった経験を生かし考案したスポーツで、フェルトをラケットに貼ることで回転やスピードが抑えられ、年齢や運動技能にかかわらずプレーできます。大会やイベントを開催してたくさんの人に楽しんでもらいました。

2019年と2020年には、それぞれ半年間の留学も体験しました。デンマークにあるフォルケホイスコーレという全寮制の学校で世界中から集まった10代20代の生徒と共同生活を送り、貴重な学びを得ました。17・18歳という柔軟で多感な時期に留学できたのも、普通の高校という進路に進んでいなかったからこそ得れたチャンスだと思います。

京都に来てからだけでも普通の高校という進路以外の道を探している、探していた人にたくさん会います。理由はそれぞれですが、普通に高校に行くという進路以外の道があると話すとても興味を持ってくれます。そこで今年は「高校脱出マニュアル」という本にこの放送大学という進路を掲載してもらいました。放送大学に頼まれたわけではなく、むしろ放送大学は生涯教育として社会人や年配の方向けに広報を打っています。しかし自分はこの進路選んだことでももちろん普通の高校生活は送れませんが、それ以外の貴重な体験をすることができました。だれにでも合う選択肢というわけではないですが、進路で悩んでいる人、普通の道以外のオルタナティブを探している人にこの選択肢を知ってもらえればうれしいです。

留学を通して学んだこと

Lim Natalie (シンガポール)

京都大学文学部

チキンライスとマーライオンで有名な国、シンガポールから参りましたリム・ナタリーです。よく自己紹介などで母国のシンガポールについて聞かれますが、その際よく「シンガポールの国土面積は東京の23区ぐらいですよ」と言って、日本人にシンガポールのイメージを伝えようとします。それが東京で語学学校に通っていた頃ですが、関西に引っ越した今、その例えではいまいちイメージが伝わらないと気づき、最近は「琵琶湖ぐらい」と伝えています。

こうして日本の方々と交流し、いろんなことについて話したりすると、日本のことだけでなく、母国のことについても自然と詳しくなります（実はシンガポールの国土面積は毎年増えていますので、また改めて調べないと行けないのかもしれませんが）。あまり大したことではないと思われるかもしれませんが、これこそ国際交流の魅力的かつ有益なところだと私は思います。

違う環境は自分の成長につながる

「水を探す一番下手な生き物は魚に間違いない」というのは、比較言語学の授業で習いました。中国語の特徴を突き止めるのは母語話者の中国人ではなく、中国語学習者だという話です。生まれてからずっと中国語という水のなかで生活してきた人々が、今となって中国語の特徴に気づくわけがありません。

同じように、我々は自分の社会や文化のなかで生きているものとして、法律や教育制度からお風呂は朝か夜かみたいな些細な生活習慣まで、自分の文化と他の文化の相違点が分からないのです。ちなみにシンガポールはそもそも常夏で暑いから、お風呂文化がありません。他文化に触れて初めて自分の国のことに自覚を持つとまで言えるでしょう。

シンガポールにいた頃は周りの人がほぼ皆シンガポール出身なので、まず「シンガポール人」という認識が薄かったです。シンガポールの食べ物、ことば、街並みの全てが来日する前の私にとって当たり前でしかなかったです。日本という外国で暮らしを試みたら、シンガポール人としてのアイデンティティが強化され、知り合いにシンガポールの良さを伝えたいという愛国心まで身についてしまいました。

来日して3年目ですけれども、日本の制度、文化、インフラなど様々ないいところを発見できました。特に日本では製品やサービス、あらゆるところで安全・安心を重視しているところが気に入っています。日本のどこに行っても不安を感じるのが珍しいことだと私は思います。

無論、ここでの暮らしはすべて薔薇色だと言ったら嘘になりますが、自分の価値観や考え方はここでの発見によって少しずつ変わっていつているのに気づきました。シ

ンガポールで、「これがないと生きていられない」と感じたものは今なら別にあってもなくてよかったとか、こういう行為は絶対許せないと思っていた昔の自分は視野が狭かったんだな〜とか。それは、自分が今までとまったく違う環境に置かれてこそ新たな出会いを手に入れられ、思ってもなかった経験を経て成長を成し遂げたからだと感じました。

日本の意外な多様性

シンガポールにいた頃、学校やニュースで日本のことについて学び、日本は「同質的社会」だと勝手なイメージがありました。勝手だと言いましたが、おそらく日本人も自分たちをそうイメージしていますね。日本語を使用し、日本人しかいない国だと思いました。もちろんグローバル化によって、外国人がいるのはわかってましたが、少なくともシンガポールのような多様な社会ではないと勘違いしていました。

しかし、日本の歴史や社会に触れると、昔からいろんな民族が日本にあったのを知りました。それだけでなく、「日本人」というのは一つの概念として片付けてはならないと実感できました。日本の47都道府県はそれぞれ独特な文化を持ち、言語から食まで多様であることを知ることができました。

おそらく京都で生活しているからその多様性を日々味わえています。関西弁と言っても地域によってアクセントや語彙が違ったりしますもの。このような違いはまさに現地に住んでみてある程度の時間を経て、肌で感じるものです。大学でサークルに入ってみたり、日本の伝統行事に参加してみたりして、細かいニュアンスまで体感できた日本の多様性は、自分にとって非常に貴重で大切な人生経験です。

以上、日本での留学を通して感じたこと、学んだことについて少し考えてみました。多文化との交流は単に視野が広がるだけでなく、自分の国そして自分自身のより深い理解にもつながると考えています。今までと違う環境、違う生活を体験することの価値と楽しさが伝えれば幸いです。

変わりゆくモノと変わらない理念

宗岡泰斗（日本）

同志社大学文学部

4月、大学進学を機にここ京都国際学生の家に入寮した。半年以上の時間が経って、HdBでの新生活に抱いた期待と少しの緊張はいつしか安心感に変わり、また、ここに住む誰にとってもそうである様に、気兼ねなく毎日を楽しむことができる大切な場所になっている。

様々なルーツを持つ人が集うHdBでの生活は、常に新しい学びと発見で溢れている。普段の生活や多くのイベントを通じて、これまで知ることのなかった文化や料理、言葉と出会う。レジデント同士で、自分が学んでいることや研究していること、また将来の姿や理想の姿を話す。気付かされるのは、レジデントが、彼ら自身が持つ文化に

対しての誇りと尊敬の姿勢を持ち、また、多くの人が高い目標や夢を持って、その実現に向け努力する姿である。その姿にはつくづく圧倒され、刺激を受ける日々だ。そして何よりも、互いが互いを認め合い、多様性を尊重しようとする空気感がそこにはあるのだ。おそらくこの HdB が建てられた当初から変わることなく続いてきた理念。長い歴史を経ても尚、その精神性は伝統として受け継がれ、今現在まで受け継がれている。

この建物にも長い歴史と伝統を感じることができる。部屋のクローゼットに貼られた、色褪せた NY 市内地下鉄の路線図ステッカーや、開けるたびに軋み音が鳴る立て付けの悪いドア、壁の薄さが故に聞こえる誰かの鼻歌や口笛さえも愛おしい。僕のお気に入りの本が詰まったこの大きな本棚に、これまでどんな本が立てられてきたのだろうか。時に知らない国の言葉で書かれた本が置かれ、もしかすると、僕が一生出会うことも、知ることもない本がここに置かれていたのかもしれない。逆に、これから先はどんな本が置かれるのだろうか。未来のレジデントはどんな本が好きなのだろうか。建物の所々に淡く残る先人たちの足跡を見つけ、この寮のこれまでとこれからを想像することが僕は好きだ。

おそらく想像するよりもはるかに多いレジデントがこの建物の中で日々を過ごし、想像するよりもはるかに長い年月の間、この建物はレジデントの姿を見守り続けてきた。老朽化が進み、週末に行われる建物の補強工事は当たり前の光景になりつつある。「かつての姿」を「そのまま」で残し続けることは難しいことは分かっているが、それでも、この建物の伝統と個人的な愛着を考えると、今ある姿のままで未来に残って欲しいとも思う。

歴史を学ぶ僕にとって京都は絶好の場所である。各時代の文化の中心であり、今でも数多くの文化財や伝統が生活に息づく街。秋、大学からの帰り道、京都御所から大きな橙色の夕日を見る。いつか京都御所庭に支えた清少納言が「秋は夕暮れ」と著し、魅了された夕日である。岡崎の観世会館で能「小鍛冶」を見る。三条伏見稲荷大明神を舞台に繰り広げられるファンタジー要素万歳のこの演目は、現代まで受け継がれる人気曲である。実際に彼らが生きた痕跡を肌で感じ、彼らと同じ感動を得られる。歴史が過去にとどまることなく、今現在でも尚、この街には深く根付き、共存しているのだ。HdB も例外ではない。時間や住む人が移りゆく中で、誰にでも開かれた理念が変わるわけではない。レジデント同士が互いを尊重し合い、助け合う精神性が失われるわけではない。変わりゆくモノの中に変わらない理念があるのだ。それこそ HdB の持つ魅力であるし、これまでの伝統が絶えることなく続いてきた理由だと思う。次は私たちの番である。最後に、僕の生活に関わる、そして彩りを付け加えてくれる、家族をはじめとした全ての人に感謝します。



New Home

Noah Yoshida (Japan / America)

同志社大学

Having a diverse thanksgiving event and helping arrange this event gave me a deeper appreciation for thanksgiving. It was interesting looking for performers, preparing decorations, and meal planning. I have lived in The United States for most of my life. Every year, my mother, brother, and I would go to my grandmother's house for Thanksgiving. Thanksgiving Day my grandmother, mother, and aunts would be cooking, and I would spend time together with my cousins. Preparing for the Thanksgiving event was a learning experience. From finding performers, meal planning and shopping, and preparing the decorations and meals. Finding performers was a challenge at first because we did not have too many people within the dorm that wanted to perform. But a lot of residents helped find these great performances outside of the dorm.

The one thing I was worried about before planning Thanksgiving was what to cook. Previously I had never cooked for a large group, and I knew I wanted to make something authentic to America but did not know what to make. I decided to make hot dogs with a side dish, fruit salad with my helper Kazuki Ohtani. Although my shopping list is short, sausages, buns, mustard, ketchup, fruit, and yogurt, it was challenging to find hot dog buns at first. In Japan hotdogs are not common and I was surprised not to easily find the buns because if you go to any supermarket in The United States, you can always find them in the bread section. During the summer in the States, hotdogs and burgers are common meals for families and you will even find the buns in front of the store. My meals were easy to make, but I was so nervous to have to prepare meals for fifty plus people. I even practiced



cooking hotdogs the day before for myself.

Moving to Japan was a challenge at first. Adjusting to Japanese customs, living on my own for the first time, having to



cook a lot more, but this dorm has made the begging of my journey living in Japan exciting and joyful. Watching Soumya and Naresh doing a tradition Indian dance with the vibrant music, eating obento's together, and playing pool at the after party really made HdB International student house feel like my new home.

俺の挑戦

大谷和輝（日本）

京都大学大学院農学研究科

実は意外にも、私には家族がいます。家族構成は、母と母のニューダーリンと5歳上の兄となっています。母はとても人気者で、交友関係が広く頻繁に家に友達が来ています。母は人の良い面を見るように心がけており、たったその工夫だけでたくさんの人と良好な関係を築いてきたらしいです。私は小さい頃から、その工夫を学んできました。

この学びは、私が生きる上でハッピーであり続けるための1つの重要な軸となっています。私は今まで、人間関係で苦しんだ経験がありませんでした。傲慢ですね、すみません。なぜそうなのかはよく分かりませんが、1つの大きな要因としてはこの学びがあるかもしれません。ただ他にも要因はあると思っていて、例えば、何事にもあまり敏感ではない性格です。人間関係が上手くいっていないことに気付いていなかっただけかもしれません。それだったら恥ずかしいですね。

具体的にどれくらい物事に敏感じゃないかと言いますと、自転車のタイヤがパンクさせられていても、「前に進むなら問題ない」と考え、3か月以上修理せず乗って移動をしていた程です。友達には絶対に変えた方が良くと言われ続けました。しかし、パンクしていることで受ける不都合は微塵も感じられませんでした。強いて言えば、道路の溝でスリップしそうになっていた事かなと思いますが、途中からそのスリップしそうな溝を回避したり、スリップするかしないか微妙な溝に挑戦してみたりしながら、運転することに楽しみを覚えていました。「お、これ、スリップしないかな？あーしたわー♪」みたいな。結局、パンクのせいでタイヤに体重が過度にかかり、タイヤの骨組みが4本くらい折れたところで、自転車を修理に出しました。今は安心・安全です。

話がだいぶ脱線しました。すみません。平和な日本にも安心・安全じゃない世界があるというお話でしたね。いや、違います。私が人間関係で悩んでこなかったのは、何事においてもあまり敏感ではない性格が1つの要因でもあるというお話でしたね。しかし、最も重要な要因は、人の良い面を見てみようとする姿勢なのかなと思います。

人はそれぞれ異なっており、関わる相手が自分にとって都合の良い面・都合の悪い面のそれぞれを持ち合わせているのは当然のことなのかなと思います。相手の良い面を見ることで、相手の悪い面を許容することが可能になるのではないのでしょうか。なぜなら、その人に好意を抱きやすくなるからです。人を好きになれば、相手の悪いところについても柔軟に思考できるようになると思います。さらに、人の良い面を見ることで、自分自身の至らない点、つまり自分が相手に迷惑をかけている部分についても気付くことができるからです。それによって、お互い様の精神が生まれてくるので、相手の悪い面を許容しやすくなります。

One year of youth left

Qiu Hongxuan (China)

Kyoto University, Graduate School

Student days always make people feel that I am still in youth, but I think about thirty years of age is getting closer and closer. I was the first person to enter HdB after Japan opened its doors to the world since COVID-19. I come from China, the country where the outbreak has been controversial. Preparations for the study abroad programme began without any knowledge of the Novel Coronavirus. After coming to Japan to take exams in February, who would have thought that I would be barred from entering the country for nearly eight months? No one knows how I felt about giving up studying abroad and finally turning around and starting my journey. There are many coincidences in choosing HdB as a place of residence for future study.

There are two foreigners in our research office who both lived here for about half a year, but finally left here for various reasons. So HdB might be a topic of conversation between us outside of the lab. No matter how boring the experiment, the colorful activities of living in HdB will add color to the mood. From the beginning of going out early and coming back late, I gradually mastered the rhythm of life. Maybe it was my friends living in HdB who gave me the luck of life. The long but short life of studying abroad and the amazing and touching interpersonal communication made me suddenly feel that the earth is a village and we are all villagers with different numbers. I also hope that there will always be no prejudice and great unity among the people in this world.

What tomorrow will be like, no one knows.



Christmas will be celebrated tomorrow, although it is a festival for foreigners, but Chinese people really love festivals ah, what festival will join in the excitement.

To be exact, it's been a year. However, the New Year is coming soon, and even if the year is coming to an end, too many moves and surprises, curiosity and longing are intertwined in my heart. I hope that the people who live here next year can be happy and successful.

My life as a Graduate Student in Kyoto

Soumya Sethi (India)

Graduate School of Science, Kyoto University

I am a third year PhD student at Kyoto University, studying DNA nanotechnology and using it to find applications in healthcare and understand basic biology phenomenon. I have been living at HdB since October 2021.

I feel really grateful to have had the opportunity to live and study in one of the most beautiful and serene places in the world, Kyoto. Studying and living here has been an enriching experience and, in the process, I have learnt a lot about myself, about the world, about appreciating the beauty of nature more than ever.

In retrospect, my PhD life was full of turmoil, drama, excitement, hope, adventure, happiness, failure and success. I usually calmed myself down by running or taking long walks along the Kamogawa, whilst admiring the beautiful sunrises and sunsets along the way. I was often inspired to read poetry in moments of despair.

I am sharing one of my most favourite poem by Emily Dickinson titled “Hope is the thing with features”

Hope is the thing with feathers
That perches in the soul,
And sings the tune without the words,
And never stops at all,

And sweetest - in the Gale - is heard -
And sore must be the storm -
That could abash the little Bird
That kept so many warm -

I've heard it in the chilliest land,
And on the strangest sea;
Yet, never, in extremity,

It asked a crumb of me. Hope is indeed a beautiful thing and has powered me to get through the most difficult circumstances during my postgraduate degree and life in Japan. Adjusting here was difficult as my study demanded a lot of time and effort. The past two years have been significantly challenging due to the spread of COVID 19. Yet living on a foreign land, miles away from my family, I could manage it all because of the very warm and caring people I met along the way. It has been a really beautiful and fruitful journey so far. These are my last few months as a student in Kyoto, I will cherish the memories and the bonds made here forever.

This is Stellah.

Stellah Namulindwa (Uganda)

Graduate School of Engineering, Kyoto University

Hello, my name is Stellah Namulindwa, a Ugandan Graduate student at the Intelligent Transport Systems Laboratory, currently in my first year of the International Master's Course program in Urban Management at the Graduate School of Engineering, Department of Urban Management at Kyoto University. I have been in Kyoto for a year now; I joined last year during the fall semester as a research student and have thoroughly enjoyed myself here. The University is great, the people are very polite, and the atmosphere is very conducive for both self-paced and guided study. Before I joined Kyoto University, I was working as a Graduate Engineer at Uganda National Roads Authority, a government entity responsible for the planning and construction of Roads, Bridges and Highways in my country.

As a child growing up, my aspirations were simple. My family was my world, the center of everything. My mother taught me the value of hard work, big dreams and utmost self-respect as a lady, while my father laboring diligently in his workshop all day, to reveal magnificent beauty from lifeless planks of wood taught me that imagination was the apotheosis of almost everything. One of the highest powers we possess, He said, is the power of imagination. Once well trained and sustained is the single most tool that will virtually liberate us from the fetters of poverty, ignorance and disease which back then as now, have had a rather firm grip upon the progressive prospects of my country. More from my father's patient admonitions and also a fervent desire to be part of the good I hoped to see in the World around me, it came naturally

to me, to fall in love with Engineering and mathematics and finally choose Transportation Engineering as a career path, upon which I still enthusiastically trod today.

There has been a multitude of highs and lows on this path, but all the more joy I find in keeping on and my most profound memories so far, are all built upon those moments, where, looking beyond the challenge, I am visualize the desirable outcome and then wholeheartedly surrender myself towards the derivation of excellent results, for the greater good of all. Besides work, I have a personal life too. I am of an introverted and reflective temperament, but beneath my quiet gaze and cryptic smile lies a very interesting little universe. I love to read good books, and my collection is mainly in the subject areas of; Science fiction, Philosophy, Mathematics, Mystery and Inspiration, All the more reason I love our little open Library at Kyoto International Students' House-HdB, because the collection here almost perfectly mirrors my world of fantasies! I also love to take walks in nature and the timeless beauty of uncountable breathless sights in Kyoto has made such an enthusiastic photographer out of me, lately. I am very slow at making friendships but once I do, I gratefully carry them on through, for as long as they can endure. I am also a very kind and compassionate person. And though I have a tough shell, I am quite soft on the inside, which sometimes puts me at a disadvantage but am working on that.

I am also a very principled person and stand firmly by what I judge to be right or wrong after careful consideration of all things. So far, my life has been devoted to the consideration of those things which have advanced the human state, education being key among them. I therefore, really love to learn and daily devote, an hour to read or learn about something new, most especially about Japan and its beautiful people. Because everything here fascinates me! the climate, the technology, the food, the art and culture, all like I have never seen before and really awe inspiring, much like a living dream. I therefore try to learn more from books what I can't understand from brief social interactions and quiet observation alone. By far in my life, I have come to believe that evil is another name for ignorance. Through it, ideally good people become critical, inconsiderate, so selfish and very destructive. And from these abuses and misuses of divine and natural resources, arises misery and discord due to an ill fashioned way of life and the failure to see and understand life as it is, from someone else's viewpoint except your own. As for my academic work and trivial duties, I willingly devote myself to always give my best and I am always very eager to learn and exercise those ways and habits of proficiency that will make my performance better today, than it was yesterday.

I therefore, respect and admire my teachers, friends and all the great leaders who continue to inspire the best in me to be unfolded and perfected as I grow. I also find a great consolation in the realization that all these good and great people, are mortals and most assuredly profess so.

For by this fact, I realize that it is possible for anyone to attain a like measure of skill, expertise and excellence provided they sustain proper guidance, discipline and hard work. It is, therefore, in partial fulfillment of this goal that I look forward to learning and improving myself much more every day at school and in my everyday life as a diligent and hardworking person, during this wonderful period of my stay in Japan. Doomo, Arigataou Gozaimasu. Tsuneni Shukufuku. Afurika no shinjudearu Uganda o otozureta toki ni, tengoku ga anata no ai to yasashi-sa o torimodosu subarashi kikai o watashini ataete kureru koto o negate imasu.

Look inside yourself

Vien T.T. Dinh (Vietnam)

Kyoto University, Division of Natural Resource Economics

Another year is approaching the end with tons of remarkable memories and experiences and I would be more than happy to share some of them with you all.

In 2021, I have started my doctoral program from April in a totally new research field and topic, I have had to learn everything from scratch and tried new things that I did before. After several alterations, I could figure out my interests in dietary acculturation or simply speaking how foreigners (Vietnamese specifically) have adapted their cooking and eating behaviors to Japanese context. It brings me a chance to encounter various Vietnamese and other non-Japanese residents and listen to their journey to Japan through continuous waves of changes and modification. It should include not only diverse international students, skilled workers but also invisible technical trainees, refugees or *Zainichi*. Regardless of whether Japan was the first “dream” destination, these people, in most of the cases, have become a person “in-between”, not perfectly fitting in either their home country or Japan – the “new” home or are struggling to search for their own identity. Of course, I have had more time to look inside myself and think over my own times staying in Japan, that gives me more sense of who I am and what I want to become in the future.

And yes, the house has never made me feel drained. I was a Team member in the first semester and Japanese Garden toban in the second one. Being the secretary allows me to get more insightful outlooks on how the house runs and how the Team works as a connector to make sure the house functions normally. We have cleaned the garden perfectly together so that everyone can enjoy the foliage season (Momiji) just through the window. We also planted one

new tree for next May's blooming time. Staying here for almost two years, I am pleased with studying in the lobby and observing nature changes in the garden each and every season within the year. We can always have some nice flowers blooming that attract our neighboring cat, bees, birds, and other wildlife to visit the house. It is such a pleasant life with nature around.

HdB で半年過ごしてみて

渡邊淳也（日本）

京都大学法学部

私は HdB での日々の過ごし方、またその中で感じたことについて書きたいと思います。まず始めに自己紹介をさせていただきます。私は現在大学で法律の勉強をしています。以前半年ほどカナダに留学していた経験があり、そこで得た学びをさらに発展させたいと思い HdB への入寮を決めました。

この寮では炊事や洗濯に関する共同生活を送るうえでの必要最低限の決まり事意外に遵守しなければならないことがあります。それは毎月少なくとも一回は開催される寮のイベントへ積極的に参加することです。京都に国際寮は HdB 以外にもいくつかありますがここほどイベント数が多くなかったり、参加率があまり高くなかったりというような話を聞きます。もちろんこれは良いことばかりではありません。当然予定が合わない時は不参加でも全く問題ないのですが、そうであったとしても皆さん学生として忙しい日々を送られている中で寮のイベントへに参加することが煩わしくなってしまう時もあります。しかしそのような場合でもできる限りイベントに参加することは非常に意味のあることだと思います。イベントに参加し様々な国の人と会話することで様々な国の文化や考え方に触れることができ、またそれだけでなくその時自分が直面している問題や課題に相談に乗ってもらって、自分とは全く異なる観点からアドバイスをもらえることもあります。

私はまだ HdB に来て日が浅いですが、これからも色々な行事に参加していきたいと思います。

あと1分及ばず

山本峰丸（日本）

京都大学法学部

あと1分及ばずか…。奈良マラソンのゴールラインを越えて、へたへたと地面に座り込んだ。悔しさが込み上げると同時に、8ヶ月間心血注いだ部活の思い出がじわりと脳裏に浮かんできた。

陸上部に入部届を提出したのは、今年3月中旬だった。約2年前からランニングを始め、去年までにマラソンを4回完走。最初はタイムがぐんぐん伸びたが、途中から壁にぶち当たり、3時間10分台で足踏みしてしまっていた。やはり市民ランナーとして自己流の練習をやっているだけでは限界がある。集団に混じって本格的な練習に取り組まなければ、3時間の大会を突破することは出来ない。そう考えて、体育会陸上部の門戸を叩いた。

大学入学以来ずっと部活・サークル無所属だった私にとって、部活は想像以上にハイレベルだった。皆とにかく練習熱心で、馬車馬の如く走りまくる。週6日朝・夕走るのは当然。月間走行距離が400km、500kmを超えることもざら。東京五輪のメダリストを輩出したような部にあって、私の走力はほぼ最下位だった。

正直こいつらに勝つのは無理だ。半ばショックを受けたものの、他部員が一生懸命頑張る姿には刺激を大いに受けた。俺も速く走りたい。かっこよく走りたい。そう思ったので、雨の日も猛暑の日も黄砂の日も部活に励んだ。農学部グラウンドでスピード練習を重ねる度に、少しずつ力がついてきたのを実感していった。

夏が過ぎ、秋も過ぎ、12月12日奈良マラソン当日となった。朝9時号砲。まず、奈良駅周辺の大通りを東西に往復する。調子は悪くない。奈良公園を通過して、天理方面へ南下する。アドレナリンのおかげで脚が良く動く。天理市に入ると、徐々に起伏が激しくなる。前の走者に喰らいついて、ペースを維持。天理教会本部前の折り返し地点で、ついに脚が痛くなる。何とか耐えよう。ここが踏ん張りどころだ。気持ちだけは維持していたが、もはや脚は上がらないし、腕すら振れない。そのままズルズル落ちていって、結局3時間1分16秒でのゴール。目標にはあと一歩届かなかった。

今回が陸上部員として最初で最後のレースと決めていた。編入生ゆえ、取得すべき単位数が山のように残っており、就活もしなければならない。マラソンに全力で挑戦



できるのは今年が最後だ。そう思って臨んでいただけに、悔しさが募る。無念至極。ただ、目標を掲げて、部活に注力した8ヶ月間はとても充実していた。残り少ない大学生活。陸上部で得た経験を糧に、また何か楽しいことをやってやろう。

Every semester with something new

ZHANG Boyiwen (チョウハクヤクブン) (中国)

京都大学大学院地球環境学舎

It has been a year since the last time we wrote something for HdB. I still remember half of the last year's article was about how to improve the lighting situation in my room, and now I have been perfectly adapted to the low light condition and can survive with the thin door.

After CM toban and being a part of the team, from this fall semester I work as the PR toban following the great Narumi-senpai and Natalie-sensei. From deciding the concept and content to editing each photo and text, this job takes much more effort than I imaging. In the left three months as PR toban, I would like to try my best to take the HdB social media accounts to another level.

To receive the master's degree, besides research the program needs us to finish 20 credits from lectures and a 3-months length internship in the first year. However, the busy schedule did not stop me from enjoying HdB life. Starting from practicing skateboarding once a week at Okazaki Park, where is not allowed anymore, we went to Nanzen temple for “Zazen” meditation. Keep the tradition of harvesting plums from the garden and making plum wine, having movie nights in the lobby by the evening, Ping Pong tournament almost every week, and so on...

I'm very grateful that I can live under the same roof with such amazing people during the break out of COVID-19 when most of the people lost their chances for new encounters. What new experience will I get from here tomorrow? Can't wait to know.

Enjoying the sunshine after Zazen.

From left,

Andy, Haku, Stella, Hardik, Landi,

Vien, Kanane, and Shun.



【資料】

公益財団法人京都国際学生の家 役員等

監 事 (2021 年度)

浅 田 拓 史	(大阪経済大学准教授、公認会計士)
折 田 泰 宏	(弁護士)
秋 津 元 輝	(京都大学教授、OM 会員)

評議員会 (2021 年度)

深 海 八 郎	(眺八海倶楽部総支配人)
村 田 翼 夫	(筑波大学名誉教授、OM 会員)
吉 田 和 男	(京都大学名誉教授)
平 野 克 己	(日本塗装機械工業会専務理事)
山 田 祐 仁	(辻調理師専門学校、学寮運営委員長、OM 会員)

理事会 (2021 年度)

理事長

内 海 博 司	(京都大学名誉教授、元 HF、OM 会員)
---------	-----------------------

常務理事

吉 川 晃 史	(関西学院大学教授、公認会計士)
---------	------------------

理 事

Naresh Bedi	(HF)
上 村 多恵子	(京南倉庫㈱代表取締役社長)
嘉 田 良 平	(四條畷学園大学教授、OM 会員)
吉 村 一 良	(京都大学教授、元 HF、OM 会員)

RUSTERHOLZ Andreas	(関西学院大学文学部教授)
--------------------	---------------

永 井 千 秋	(公財) 新産業創造研究機構 技術アドバイザー、 OM 会員)
---------	------------------------------------

HF	:House Father
HM	:House Mother
HC	:House Committee
OM	:Old Member

顧 問 (2021 年度)

所 久 雄	(社会福祉法人京都国際社会福祉協力会理事長)
平 松 幸 三	(京都大学名誉教授、OM 会員)
森 棟 公 夫	(椋山学園理事長、京都大学名誉教授)
柴 田 光 蔵	(京都大学名誉教授)

岩 崎 隆 二	(和晃技研(株)代表取締役社長、OM 会員)
中 島 理一郎	(元同志社大学教授、OM 会員)
西 尾 英之助	(京都日独協会会長)
薦 田 正 人	(薦田内外国特許事務所代表、弁理士、OM 会員)
諏 訪 共 香	(元立命館大学講師)

学寮運営委員会 (HC) (2021 年度)

運営委員長

山 田 祐 仁	(辻調理師専門学校、OM 会員)
---------	------------------

運営委員

坂 口 貴 司	(三菱電機(株)、OM 会員)
鈴 木 あるの	(京都橘大学教授)
TANANGONAN Jean	(近畿大学講師、OM 会員)
DAVIS Peter	(Telecognix Corporation CEO)
戸口田 淳 也	(京都大学名誉教授、元 HF 、OM 会員)
松 橋 眞 生	(京都大学准教授、元 HF)
長谷川 真 人	(京都大学教授)
北 島 薫	(京都大学教授、元 HM)
金 広 文	(京都大学経営管理大学院・特命教授)

CHAIRPERSON of TEAM

VICE CHAIRPERSON of TEAM

職 員 (2021 年度)

水谷内 典 子
吉 竹 慶 一

2021年度 補助金・寄付金・その他ご支援

2021年1月1日～2021年12月31日受領分

敬称略

補助金・助成金

『(公財)中島記念国際交流財団助成』 (独)日本学生支援機構2021年度留学生地域交流事業 ・「食文化を中心に据えた国際交流と地域との共生」		417,000円(予定)
--	--	--------------

寄付金 計 3,185,000円

寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者
かまの外科医院 鎌野幸子	京都東ライオンズ クラブ	社会福祉法人サン・アス 会理事長 吉川昭一	

Andres Fukazawa	CHANG CHEW CHIN	Kiswandhi Andhika	Palungkun, VanessaAlma
Randolph Ruiz Rodriguez	赤尾 茂樹	朝倉 寛之	阿部 大
飯田 未希	井形 彰利	石原 ゆき子	井田 典子
井上 富子	井上 裕司	伊村 暢夫	岩沼 省吾
上田 学	上野 龍二	内海 仁美	内海 博司
宇野 賀津子	浦崎 竜馬	卜部 一三	王 惲誠
王 柳蘭	大西 正哉	大西 優	岡本 修身
岡本 徳子	小川 侃	置田 和永	小野 公二
折田 泰宏	海見 麻琴	片山 晴絵	嘉田 良平
金子 恒一	韓 思平	岸野 宏	木葉 丈司
木原 文太左右衛門	行實 誠	金 ナヨン	金 盛彦
草間 亮一	窪田 弘	倉田 麻里	黒澤 真知子
小島 和典	小谷 夏美	後藤 隆騎	琴浦 良彦
小西 淳二	小林 忠邦	近藤 勇美	近藤 敬司
近藤 哲理	坂口 貴司	坂野 泰治	佐々木 正夫
佐藤 宏美	佐藤 文彦	佐藤 雅彦	澤木 幹栄
澤田 正樹	鹿田 崇史	篠崎 匡宏	四宮 澄江
島田 裕子	正司 敬子	鈴木 武夫	鈴木 文男
鈴木 松郎	高田 徳子	高屋 亜希子	田口 昇

竹田 洋子	田所 健作	田中 卓	田中 徳壽
谷口 光浩	谷 幸治	谷 紀子	種村 美紀
田森 行男	辻川 仁智	辻 正樹	寺井 佐加恵
寺本 美智子	十河 智江子	土居 貞往	戸田 沙織
内藤 義弘	永井 千秋	永岡 奏海	中河原 一秀
中久木 裕子	奈倉 道隆	成田 康昭	西尾 美千子
西原 恭子	西本 太観	丹羽 太貫	野田 和伸
橋本 求	畠山 重利	柊木 知	平石 亨
平田 康夫	平野 克己	平松 幸三	深海 八郎
福本 和久	藤井 久子	藤沢 正道	藤田 昌史
富士谷 重樹	古川 彰	古川 千佳	前上 英二
前川 佳世子	前田 章	前田 雅道	榊岡 芳樹
松田 敬一	松田 淑美	松成 亮太	松山 美智代
三浦 一郎	宗岡 克英	村上 雅子	村田 翼夫
文字 健二	森棟 公夫	藪田 定男	山岸 秀夫
山口 真由美	山下 進一	山本 雅英	楊 方
楊 明	吉川 晃史	吉川 昭一	吉松 千明
吉松 亮輔	吉村 一良	吉村 俊之	李 憲福
渡邊 恵子	匿名 1名		

寄贈品・その他

京都東ライオンズクラブ	寮室（全34室）の机・椅子・マットレス
置田 和永	たけのこ・柿・生け花
中久木 裕子	お菓子
陸川 良子	切手
高田 徳子・中村 長太郎	ハウス庭園の伐採・剪定。日本庭園、茶道講習会
中西電建株式会社 滋賀銀行SDGs 私募債	研究者室（全7室）の机・椅子等

皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

* 2022年1月以降のご寄付分は、次年度の報告書に記載させていただきます。

公益財団法人京都国際学生の家略史

西暦 和暦	ハウスペアレンツ		事項
	日本	スイス	
1961 S36			・1月21日―スイス東アジアミッション(SOAM)コーラー牧師構想の「出会いの家」を京都に実現するための募金活動開始(於チューリッヒ)
1962 S37			・11月19日―第1回京都「国際学生の家」建設発起人会 ・3月24日―第1回京都「国際学生の家」建設実行委員会
1963 S38			・6月―SOAMとHEKSより67万スイスフラン(邦貨約5,560万円)の寄付 ・12月16日―財団法人京都「国際学生の家」設立 ・12月16日―理事長湯浅八郎博士就任 ・12月16日―財団法人京都「国際学生の家」寄付行為制定
1964 S39			・8月10日―学寮建設工事契約;株式会社竹中工務店、総額約8,700万円 ・8月中旬―地鎮祭 ・10月14日―寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認(4教文第388号・京都府教育委員会委員長) ・12月25日―財団法人京都「国際学生の家」規約制定
1965 S40	4月: 稲垣 Inagaki	4月: ド'マムート Dumermuth 9月: コーラー Ckohler	・3月31日―竣工 ・4月1日―開寮 ・4月10日―献堂式 ・10月頃―ハウス・チーム誕生
1966 S41	3月: 中山 Nakayama		・4月10日―学寮開寮一周年記念式典 ・12月20日―寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認(雑文第1の28号・文部大臣)
1967 S42			
1968 S43			
1969 S44	4月: 内田 Uchida	5月: ペニンガー Pfenninger	・12月16日―西館完成
1970 S45	7月: 不在	4月: ベア Bär 3月: ケッター Kötter	
1971 S46	4月: 大沢 Ohsawa		・2月18日―年報第1号発行
1972 S47			
1973 S48	6月: 内海		・財団法人万博協会より資金を受け、屋上改修工事

	Utsumi		
1974 S49	50	4月：内田 Uchida 12月：ベトナム Putnum	・4月1日--財団法人京都「国際学生の家」諸規則の改正 ・5月18日--十周年記念式典 ・5月1日--年報『出会い』第2号「十周年記念号」発行
1975 S50	7月：山本 M. Yamamoto		
1976 S51			
1977 S52			・6月24日--「ライオンズ基金要綱」を制定 寄付金総額1,340万円を基本財産に組み入れ 昭和50年度・51年度のライオンズクラブ(京都27クラブ)よりの寄付
1978 S53			
1979 S54			
1980 S55	3月：琴浦 Kotoura		
1981 S56			・8月15日--初代理事長・湯浅八郎博士逝去
1982 S57		2月：ブルコルター Burkolter	
1983 S58	9月：古川 Furukawa		・1月31日--第2代理事長に上野直蔵博士就任
1984 S59			・8月21日--創始者・ウェールナー・コーラー博士逝去 ・10月2日--第2代理事長・上野直蔵博士逝去 ・10月26日--第3代理事長に遠藤彰氏就任
1985 S60			・3月8日--年報第8-9号「二十周年記念号」発行 この年にHdBのエンブレムの制定 ・10月1日--国際交流基金の第1回国際交流奨励賞地域交流振興賞受賞 ・10月19日--創立二十周年記念式典
1986 S61			
1987 S62	4月：内海	3月：不在	

	Utsumi		
1988 S63		4月: フォレンバイダー Vollenweider	・1月18日―財団法人京都「国際学生の家」諸規則の整備 ・5月28日―財団法人京都「国際学生の家」パンフレット作成 ・10月15日―京都市より表彰
1989 S64 H1			・7月2日―第1回国際食べ物祭り開催 この年にHdBの旗を制定
1990 H2	8月: 山本 Yamamoto	4月: オッテ Otte	・3月31日―第3代理事長・遠藤彰氏辞任(広島女学院大学学長就任) ・4月1日―第4代理事長に稲垣博博士就任
1991 H3			
1992 H4			
1993 H5	4月: 吉村 Yoshimura		
1994 H6		3月: ヴァイダー Wider	
1995 H7			・7月8日―創立三十周年記念式典(SOAM会長他5名来日、出席)
1996 H8	4月: 戸口田 Toguchida		
1997 H9			
1998 H10			
1999 H11	4月: 高橋 Takahashi		12月31日―SOAMとの法的関係解消、ハウスファーザー二人制廃止
2000 H12		1月: 以降、廃止	・9月6日―財団寄付行為の改正
2000 H12			・3月下旬―全職員の退職・全寮生の退寮 ・4月初旬―大改修工事開始

			・8月末日--工事完工 ・9月1日--再開館、新職員採用 ・10月21日--再興祝賀行事開催
2001 H14			
2002 H14	8月: 木戸 Kido		
2003 H15			
2004 H16			
2005 H17			
2006 H18	4月: 前川 Maekawa	ハウスアドバイザー 10月: ブアデン Buadaeng	
2007 H19		3月: 帰任	・1月20日--第4代理事長・稲垣博博士逝去 ・5月20日--第5代理事長に内海博司就任 ・11月17日--稲垣先生を偲ぶ会
2008 H20			・7月10日--第2代ハウスマザー・ネリー・コーラーさん逝去 (創始者・ウェルナー・コーラー夫人)
2009 H21	8月: 松橋 Matsuhashi		・7月17日--第3代ハウスマザー・ペニンガー好美さん逝去
2010 H22			・2月12日--石井米雄理事逝去 ・6月30日--田村武理事逝去 ・9月3日--西島安則評議員逝去 ・11月6日--創立四十五周年記念式典
2011 H23			
2012 H24	4月: 山本 Yamamoto		・3月31日--公益財団法人移行申請
2013 H25			・4月1日--公益財団法人認可 ・10月31日--第1次耐震審査実施(本館)
2014			

H26	6月: 北島 Kitajima Phillips		
2015 H27			・3月30日--寄付金税額控除認可
2016 H28	3月: 飯田 Iida Hidding		・11月7日--創立五十周年記念式典
2017 H29			・5月31日--第2次耐震審査実施(本館)
2018 H30			・3月--本館耐震・リフォーム案、西館立替案作成 ・9月27日--募金委員会発足 ・10月1日--募金趣意書作成、募金活動を開始
2019 H31 R1	3月: 崔 Choi		・8月～12月A-portにてクラウドファウンディング
2020 R2	4月: 村上 Naresh Murakami		・2月26日--新募金趣意書作成(第一期工事に絞った)し、募金活動を続け、これらの募金活動は2020年6月で終了した。 ・6月8日--第1回同窓会(OM会)公開講演会、総会の開催
2021 R3	4月: Naresh		・4月からコロナウイルスのパンデミックが始まる ・4月～6月--耐震工事及び排水管交換工事、運動場を第2駐車場に変更 ・7月29日--初代ハウスマザー稲垣和子さん逝去 ・12月12日--第2回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催 ・10～12月--ReadyForにてクラウドファウンディング
2022 R4			・7月17日--第3回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催 ・11月～2022年1月--ReadyForにてクラウドファウンディング
			・3月になるもコロナウイルスのパンデミックが続き留学生は入国できず。

公益財団法人京都国際学生の家利用者の集計

● 学生の部（レジデント）

国籍別利用者実数

1965年4月から2021年12月までの合計 83ヶ国 1062名

アフガニスタン	6名	コロンビア	1名
アメリカ	47名	コンゴ	1名
アルゼンチン	3名	コートジボアール	1名
イギリス	12名	ザイール	1名
イスラエル	1名	シンガポール	19名
イタリア	5名	ジンバブエ	1名
イラク	3名	スイス	12名
イラン	13名	スウェーデン	3名
インド	22名	スーダン	1名
インドネシア	26名	スペイン	1名
ウガンダ	1名	スリランカ	11名
ウズベキスタン	2名	セネガル	1名
エジプト	7名	タイ	42名
エストニア	2名	台湾	27名
エチオピア	2名	タンザニア	4名
オーストラリア	2名	チェコスロバキア	4名
オーストリア	1名	中国	65名
オランダ	12名	朝鮮	4名
カザフスタン	1名	チリ	3名
ガーナ	1名	ドイツ	45名
カナダ	4名	ドミニカ	1名
韓国	52名	トルコ	12名
カンボジア	13名	ナイジェリア	3名
キプロス	1名	日本	349名
キルギス	1名	ニュージーランド	7名
グルジア	1名	ネパール	6名
ケニア	6名	ノルウェー	4名

パキスタン	6 名	ホンジュラス	1 名
ハンガリー	6 名	マリ	1 名
バングラディシュ	5 名	マレーシア	23 名
フィリピン	16 名	マダガスカル	2 名
フィンランド	1 名	南アフリカ	1 名
ブラジル	9 名	ミャンマー	16 名
フランス	9 名	メキシコ	2 名
ブータン	1 名	モロッコ	4 名
ベトナム	36 名	モンゴル	10 名
ベネズエラ	2 名	ユーゴスラビア	4 名
ペルー	4 名	ラオス	1 名
ポーランド	5 名	リトアニア	1 名
ボリビア	1 名	ルーマニア	1 名
ポルトガル	3 名	レバノン	1 名
香港	14 名		

● 学者・研究者の部（スカラー）

国籍別利用者実数（同一人物の利用・同行家族を含まない）

1965 年 4 月から 2021 年 12 月までの合計 96 ケ国 3095 名（内国籍記載なし 17 名）

アイルランド	1 名	ウズベキスタン	1 名
アフガニスタン	1 名	ウルグアイ	1 名
アメリカ	336 名	エストニア	1 名
アルジェリア	4 名	エジプト	26 名
アルゼンチン	1 名	エチオピア	1 名
アルメニア	1 名	オーストラリア	39 名
イギリス	111 名	オーストリア	19 名
イスラエル	11 名	オランダ	35 名
イタリア	45 名	ガーナ	3 名
イラク	3 名	カザフスタン	1 名
イラン	20 名	カナダ	47 名
インド	107 名	カメルーン	1 名
インドネシア	115 名	韓国	206 名
ウガンダ	1 名	カンボジア	4 名

ウクライナ	9 名	旧ソビエト連邦	14 名
キルギス	1 名	ネパール	11 名
ギリシャ	4 名	ノルウェー	7 名
ケニア	3 名	パキスタン	14 名
コスタリカ	2 名	バーレーン	1 名
コロンビア	1 名	ハンガリー	10 名
コンゴ	1 名	バングラディシュ	16 名
ザイール	1 名	フィリピン	38 名
サウジアラビア	1 名	フィンランド	10 名
ザンビア	1 名	ブラジル	27 名
シリア	1 名	フランス	111 名
シンガポール	25 名	ブルガリア	4 名
スイス	186 名	ベトナム	35 名
スウェーデン	16 名	ペルー	6 名
スーダン	3 名	ベルギー	7 名
スペイン	11 名	ポーランド	32 名
スリランカ	11 名	ボリビア	1 名
スロヴェニア	1 名	ポルトガル	8 名
セルビア	1 名	香港	45 名
タイ	187 名	ホンジュラス	1 名
台湾	95 名	マダガスカル	1 名
タンザニア	8 名	マレーシア	40 名
チェコスロバキア	12 名	南アフリカ	2 名
中国	172 名	ミャンマー	10 名
チュニジア	2 名	メキシコ	7 名
朝鮮（在日）	3 名	モロッコ	6 名
チリ	7 名	モンゴル	1 名
デンマーク	5 名	ユーゴスラビア	13 名
ドイツ	301 名	ラオス	2 名
ドミニカ	2 名	ラトビア	3 名
トルコ	22 名	リトアニア	1 名
ナイジェリア	4 名	ルーマニア	3 名
日本	330 名	ルクセンブルグ	3 名
ニュージーランド	10 名	ロシア	23 名

公益財団法人京都国際学生の家後援会会則

(目的)

第1条 この規程は、公益財団法人京都国際学生の家（以下財団という。）の後援会員の入会及び退会並びに会費の納入に関し、必要な事項を定めるものとする。

(会員)

第2条 財団の事業に賛同し、財団を支援する意を有するものは、後援会員となることができる。

- 2 会員になろうとする者は、所定の申込書を、代表理事あてに提出するものとする。

(会費)

第3条 会員は理事会で定められた会費を、入会時に納入するものとする。

- 2 年会費は会員種別に応じて下記各号のとおりとする。

- | | | | | |
|-----|-------------|----|----|----------|
| (1) | 個人会員（OM 会員） | 年額 | 一口 | 5,000 円 |
| (2) | 法人・団体会員 | 年額 | 一口 | 30,000 円 |

*OM= Old Member、元寮生

(退会)

第4条 会員は、いつでも退会届を財団に提出することにより、退会することができる。

- 2 前項の場合、当該年度の会費が未納のときは、これを納入しなければならない。
- 3 既納の会費は、いかなる理由があってもこれを返還しない。

(改正)

第5条 この規程の改正は、理事会の議決を経て行うものとする。

附則

- 1 この会則の施行に関し、必要な事項は別に定める。
- 2 この会則は、公益財団法人の設立登記の日（平成 25 年 4 月 1 日）から施行する。
- 3 この改正会則は、平成 26 年 3 月 10 日より施行する。（平成 26 年 3 月 8 日第 3 回理事会にて改訂）

公益財団法人京都国際学生の家同窓会会則

(名称) 第1条 本会は京都国際学生の家同窓会（略称 OM 会:Old Member 会）と称する。

(所在地) 第2条 本会の所在地は、京都市左京区聖護院東町10番地とする。

(目的) 第3条 本会は、京都国際学生を創設趣旨を尊重し、その発展と維持を期し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事業) 第4条 本会は、次の事業を行う。

- 1) 学寮の運営と発展とを支援する事業
- 2) その他、本会の目的に沿う事業

(会員) 第5条 本会の会員は、次の者とする。

- 1) 学寮の学生として在籍経験者、
- 2) 学寮のハウスペアレント経験者、
- 3) 学寮のスカラーとして滞在したことのある者で、学寮を支援する意志を有する者、
- 4) 学寮の役員、職員を務めた経験者で、学寮を支援する意志を有する者、
- 5) ハウスペアレントの家族であった者で、学寮を支援する意思を有する者。

(総会) 第6条 総会は会員で構成し、開催の30日前までに通知して会長がこれを招集する。

- 2 総会の成立は、日本国内在住構成員の20分の1の出席による。
- 3 前項の出席は、代理すべき構成員を明記した委任状の提出によって替えることもできる。
- 4 定期総会は、毎会計年度の終了後3カ月以内に開催するものとする。
- 5 臨時総会は、会長が開催を必要と認める時、これを招集する。
- 6 総会は次の事項を審議し、議決する。
 - 1) 会長、副会長、監事の選任にかかる事項。
 - 2) 会則の制定および改正にかかる事項。
 - 3) 予算および決算の承認にかかる事項。
 - 4) 活動計画および活動報告にかかる事項。
 - 5) 会員の退会ならびに除名の承認にかかる事項。
 - 6) 本会の解散にかかる事項。
 - 7) その他、会長が必要と認めた事項。

(総会の議決) 第7条 総会の議決は出席者の過半数の賛成による。

(役員) 第8条 本会に以下の役員を置く。役員に関するその他の事項は細則に定める。

- 1) 会長 1名
 - 2) 副会長 3名以内
 - 3) 幹事 若干名
 - 4) 庶務幹事 若干名
 - 5) 会計担当幹事 1名
 - 6) コーディネーター 20名以内
 - 7) 監事 2名
- 2 本条第1項3) ないし6) の幹事およびコーディネーターは会長がこれを任命する。

(役員の職務) 第9条 役員の職務は以下のとおりとする。

- 1) 会長は、この会を代表し会務を総理する。
- 2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代理する。
- 3) 幹事は、事業を円滑に推進するための必要な業務を分担し実施する。
- 4) 庶務幹事は、会員に関する名簿の管理その他本会の庶務に係る業務を担当する。
- 5) 会計担当幹事は、会計を執行管理する。
- 6) コーディネーターは、会員相互の連絡を密にする業務を担当する。
- 7) 監事は運営ならびに会計の監査を行う。

(役員会) 第10条 役員会は、会長が必要と認める時、これを招集する。

- 2 役員会の議決は出席者の過半数の賛成による。
- 3 前項の出席は代理すべき役員を明記した委任状の提出によって替えることもできる。
- 4 役員会は、電磁的通信手段によって開催することも可とする。

(会費) 第11条 本会の会員は細則に定める年会費を支払うものとする。会費は本会の維持運営にあて、臨時、特別の活動にかかる費用は別途参加費をもってこれにあてるものとする。

(会計年度) 第12条 本会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日とする。

(退会・除名) 第13条 第5条に定める会員のうち3ないし5に該当する会員は、

その意思を表明することにより、役員会の承認を得て、退会することができる。

2 本会の名誉を傷つける等、本会の会員としてふさわしくないと認められる者は、役員会が発議し、総会の議決を経て、除名することができる。

(解散) 第 14 条 本会は、総会の議を経て解散する。解散時に本会が所有する財産は、学寮に寄付するものとする。

(会則改正) 第 15 条 本会則の改正は、役員会の発議により、総会でそれを承認する。

(細則)

第 1 条 本会の役員を以下に定める。

会長：村田翼夫

副会長：岩田忠久、ジン・タナンゴナン

庶務幹事：古川千佳、木葉丈司

会計担当幹事：

幹事：柳そらや

コーディネーター：内海博司、平松幸三、梶茂樹、坂口貴司、秋津元輝、
鵜塚健、前川佳世子、塩沢祥子、村松拓、ケヴヘイッシュウィリ・ルース
ダン、河瀬光

監事：平松幸三、嘉田良平

第 2 条 会長・副会長・監事の任期は 4 年間を上限として定める。

幹事の任期は会長が定める。

第 3 条 年会費は¥0 とする。

(付則)

本会則は、2019 年 10 月 18 日より施行する。

施設概要

所在地 京都府京都市左京区聖護院東町 10

敷地面積 1,900.28 m²

建築面積 531.21 m²

延面積 1,778.78 m²

構造 本館 鉄筋コンクリート造 地下1階 地上4階

西館 鉄筋コンクリート造 地上2階

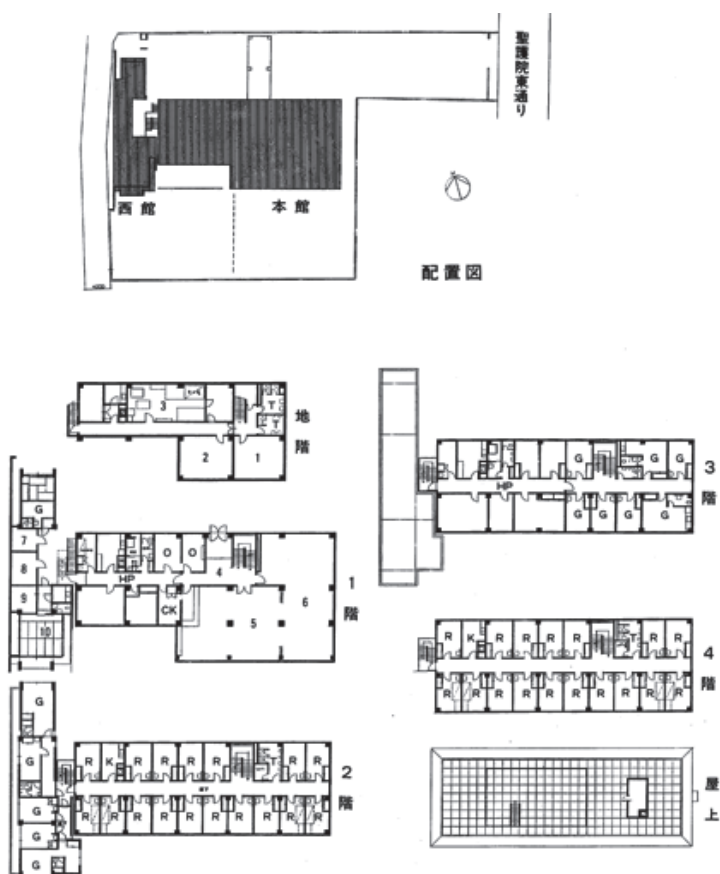
各階用途	本館 1階	事務室、会議室、ラウンジ、遊戯室、行事用キッチン
	本館 2・4階	レジデント室 34室、キッチン2室、シャワールーム4室
	本館 3階	ハウスペアレンツ室、スカラー室 7室
	本館地下	洗濯室、トイレ、倉庫、機械室
	西館	スカラー室 5室、ボーイスカウト会議室

学生居室 面積 13 m²
洗面設備、ベッド、
クローゼット、本棚、
机、椅子、エアコン

その他設備

日本庭園、卓球台、
ビリヤード、ピアノ

R:レジデント室
G:スカラー室



【編集後記】

平野 克己

(イヤーブック編集委員、評議員)

昨年から編集委員に参加しましたが、その2年間はコロナ禍と重なり、HdBとしても運営の窮地に追い込まれた中での YEARR BOOK の作成となった。昨年度の反省を踏まえ、12月の初めから原稿集めに着手した結果、皆様の協力もあり、1月にはほぼ出揃って落ち着いた編集に掛かれた。この間、寮父ナレスさんから学寮担当者として山本君を選任していただくなど皆様のご協力で進めることができた。

今回の構成は、特集を第3回OM講演会として、そのあとにOM、レジデントの原稿を並べることとしたが、原稿がほぼある中での編集は楽だった。一方、HdBの運営は寮生が定員34名に対し2月は19名になるなどコロナでの入国規制の影響を受け、苦境打開策として2度のクラウドファンディングを行ったがその経緯を吉川先生にまとめて頂いた。

特集の公開講演会の吉村先生、楊明先生の講演内容は、最先端技術でもあり、工学部出身として非常に興味が持たれた。HdBの多様な価値観での経験が新たな発想に結び付くのではと感じた。第2部の在寮生、OMのお話は、OMでない当方には楽しい青春で羨ましく、HdBの必要性和意義を改めて痛感した。

学寮生の原稿は山本君の努力で年内に集められたが、名前、顔の公表に対する願いが出された。内容的には問題などない文章であったが、個人の意見は尊重すべきであり、イニシアルにする、写真修正などで対応した。

表紙の朱色が鮮やかであるが、寮生の吉田君の清水寺、平安神宮の写真である。この朱色は奈良の春日大社にも見られる通り、邪気を払う色として古代より珍重され、その原料となる辰砂(水銀化合物)の鉱脈の近くに神社仏閣が作られたほどだ。ただ、辰砂は高価であるため、現在は鉛丹(鉛化合物)が塗料の原料となっている。水銀、鉛は生物には有毒であり、木材は保護されている。朱色は丹(に)とも呼ばれ、一般的な赤色(原料は鉄)と区別されている。今回の本の色と現物の色とは、写真、印刷を経由しているので、どれだけ再現できているかで技術力が分かる。ただ、観光地の建物といえども出版物に利用する場合は掲載の了解を得ることが必要と学んだ。

今回の目玉は、HdBの運営の苦境を背景に「広告を入れたら？」とのナレス委員からの提案であった。委員全員の賛同で、広告依頼をすることになったが1月から時間も無いため深海評議員にも協力をお願いし、近隣のお店、OMの皆様、ライオンズクラブなど思いつく所をお願いした。結果は4件と少なかったが次年度からは早めに準備すれば期待できるので次年度も続行したい。最後に、編集委員会真っ只中の2月24日にロシアのウクライナ侵攻のニュースが飛び込んできた。21世紀には有り得ない軍事力での主権国家転覆行為を現実目の当たりにし、益々、HdBの共生の精神

の必要性、重要性を再認識した。ともあれ、人間の最低限の良心に期待し一刻も早い平和の到来を祈らざるを得ない。

一安心

山本 峰丸（日本）

（京都大学法学部・現住人・年報編集委員）

編集委員に任命されたのは昨秋の11月初旬頃だったと思う。“Hello there, would you mind becoming a year book toban?” 寮父のナレッシュさんから突然オファーが届いた。当時は、入寮から1ヶ月すら経っておらず、寮生の名前や顔も全員は覚えていない。ちょっと私には荷が重すぎるのではないかと感じたものの、断るは無作法だと思って引き受けることにした。編集委員として、まずは先例を参照する必要があると考え、会議室の棚に置いてある昔の年報を何冊か読んでみた。文字を追うだけでは、昔の寮の様子がどんな感じだったのか具体的に想像するのは難しい。しかし、先人は皆楽しく充実した暮らしを送っていたようだ。特にコロナ禍以前は、30人以上が居住し、ロビーには毎晩人が集って賑わっていたらしい。

編集作業の手順については、理事の先生方や寮父ナレッシュさんからアドバイスをいただいて、大体把握することが出来た。12月頃には、寮生全員に作文を提出してもらった。年末は忘年会やクリスマスなど行事が多く、皆忙しかったと思うが、期限を守ってくれた。有難う。1月初旬までに住人の全原稿が集まったのは、近年で最も早いという。私自身がやったことといえば、提出を催促して作文を回収したくらいだが、任務を無事完了できて良かった。一安心している。また、内容面では、寮内の暮らしだけでなく、大学での学びや課外活動、進路の選択、旅行など、様々なテーマが取り上げられている。これも例年にない珍しいことで、内海理事長や村田理事から「新鮮味がある」とお褒めの言葉をいただいた。読者の皆様にも楽しく読んでいただければ幸いだ。

あとは印刷所に発注して、印刷と製本をしてもらうだけ。この2021年度の年報が完成するのは3月末頃になるだろう。その頃には、現寮生の2-3割が卒業に伴って退居し、新入寮生を迎える準備も始まっているのかもしれない。2022年度。寮生全員が親交を一層深めて、実りある有意義な時間を過ごせますように。忌まわしきコロナ禍も早く収束しますように。神のご加護があらんことを祈りつつ、ここに筆を置く。

ロシアのウクライナ侵攻で思うこと

内海 博司

(HdB 理事長・京都大学名誉教授, 19650M、元 HF)

昨年、イヤブックを印刷所に渡そうと思っている時期（2021.2.1）に、ミャンマーの軍事クーデターがあった。本年も同様な時期に、ロシアによるウクライナの軍事侵攻があり、今回は第3次世界大戦の引き金になるのかという恐怖を感じている。

2月24日にロシアのウラジミール・プーチン大統領が、国連憲章51条の集団的自衛権を主張し、ウクライナ各地への砲撃や空爆を始め、ウクライナ大統領のウォロディミール・ゼレンスキー大統領は厳戒令をしいて「総動員令」に署名し、戦争状態に入った。しかし、国連のアントニオ・グテレス事務総長は24日、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻について「こうした一方的な措置は国連憲章と相反する」と述べ、プーチン大統領に軍事作戦の停止と撤退を求めている。更に、ロシア軍によるチェルノブイル原発への攻撃と占拠、原子力稼働中のザポリージャ原子力発電所の襲撃と占拠などを受け、「かつては考えられなかった核戦争が、今や起こり得る」との懸念を示し、即時停戦を改めて訴えている。

この侵攻の裏には、デマ情報（ドンバスでのロシア人の大量虐殺）の流布やサイバー攻撃など、現実の戦争と情報戦が入り乱れ、フェイクニュース・デマ動画がTwitterやSNSで拡散されている。一方、ロシアは勿論のことロシアを支持する国々の言論統制を見るにつけ、如何に正確な情報が人々を正確な言論や行動を行わせるかを知った。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の発表によれば、2月24日から3月11日までの期間で、ウクライナの250万人以上が難民として国外に避難している。避難先は3月3日時点で、ポーランドで55万人、ハンガリーで13万人、モルドバで10万人、スロバキアで8万人、ロシアで5万人となっている。

このイヤブックが発行される頃には、このウクライナ侵攻という一方的な戦争がどう決着しているのだろうか。今回のウクライナ侵攻は、第2次世界大戦後の世界を牛耳った常任理事国という制度をもつ国連の欠陥を見せつけ、更には核を持つ大国のわがままが通る世界であることを、世界の人々に痛感させた。しかし、この戦争により、ウクライナという豊穡の土地が荒らされ食糧危機を招き、経済制裁による物資の流通が止まれば、制裁される側も制裁する側の人々も大困窮するばかりか、2年に渡るコロナ渦による疲弊した経済は、世界恐慌を起こすのでは無いかと不安である。

ヒトは権力を持つ独裁者になりたがり、持つとどうして変貌してしまうのか、いつまで経っても、ヒトは地球を滅ぼしかねない生き物であり続けるのだろうか？

HdBの「理念」である「共生」以外にヒトを救う道はないのでしょうか？

年刊誌「YEAR BOOK」への賛助広告について

(公財) 京都国際学生の家 (別称 HdB、Haus der Begegnung: 出会いの家) の年刊誌「YEAR BOOK」は、各国大使館領事館は勿論のこと、関係省庁にも配布し、世界の各地で活躍する卒業生にも送付しています。発行部数は900部です。

しかし、コロナ禍のため留学生や外国人研究者などが入国できず、本当に苦しい経営 (学生は20人前後、研究者は1人だけ) が続いています。しかし法人の年刊誌「YEAR BOOK」は絶やすことは出来ず、OMの自営業 (会社、医院など) の方々や京都の会社等に、初めて広告の掲載していただくという形でのご支援をお願いしました。本年は4件でしたが、来年度もお願いしなければならない状況が続くかも知れません。その時にはよろしくお願い致します。

賛助広告の ご支援ご協力に、感謝致します。

京都国際学生を家の横で今も
頑張ってます

食堂 **キ ャ ラ バ ン**

ボリュームある自家製

和食・洋食・定食・他

(季節のもの、鍋料理、豚汁定食等)

17:00~22:30 定休日 (火・土)

聖護院東町7 TEL075-751-9871



不動産売買・管理

お客様のご期待にそえるよう全力で応援致します。

中西電建株式会社 (社) 京都府宅地建物取引業協会会員
京都府知事(4)第10024号

本 社

〒601-8453
京都市南区唐橋霞城門前6

中京事務所

〒604-8172 京都市中京区烏丸三条上ル
場之町592番地 メディナ烏丸御池4階

お問合せは

(075) 950-7080



SDGsでHdBを世界融和の拠点に！



COP24 ポーランドにて DO YOU KYOTO を PR！



地球温暖化で海面上昇、国土減少の
ソロモン諸島にて脱プラを討議

太陽光と蓄電装置でSDGsに貢献！



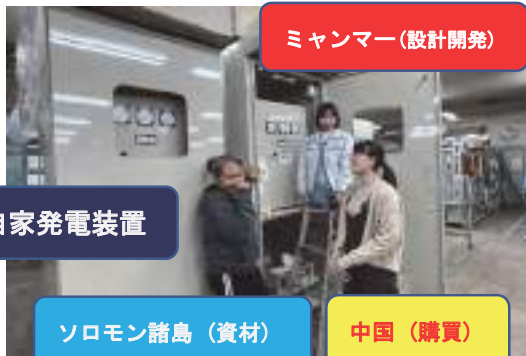
山下京都府副知事

スマートシティ EXPO バルセロナに出展



エネルギーEXPO ルーマニア・ブカレストに出展

当社で活躍中の留学生たち（正社員の他、アルバイトもOK）



ミャンマー（設計開発）

自家発電装置

ソロモン諸島（資材）

中国（購買）



京大桂研究所（分散電源と電力融通S）

WAKO 和晃技研株式会社

代表取締役社長 **岩崎 隆二**（京大機械工学科卒） 専務取締役 **岩崎 マリ**（同支社大心理学科卒）

【本社】〒601-8448 京都府京都市南区西九条豊田町26
TEL:075-681-6291 FAX:075-681-6297

—当財団へご寄付をお願いいたします—

個人 1口 5,000 円 法人・団体 1口 30,000 円 何口でも

【当財団へのご寄付に関する税制上の優遇措置（確定申告）】

個人の場合：2,000 円を超える寄付金額は所得控除または税額控除制度により所得税の減免措置を受けることができます。

法人・団体の場合：特定寄附金として一般寄附金の損金算入限度額と別枠で損金算入限度額に相当する金額まで損金に算入できます。

これらのご申告の際には当財団発行の領収書をご提出下さい。

点線より切り離してご使用ください



02 大阪		払込取扱票										通常払込料金加入者負担			
口座記号番号		010708		3807		金額		千 百 十 万 千 百 十 円		金 額					
加入者名		(公財) 京都「国際学生の家」										特殊取扱			
※ 2021 年度の賛助寄附をいたします。															
□個人・OM（入寮 年）口（ 円）															
□法人・団体 口（ 円）															
通信欄															
※ おところ（郵便番号）		様													
※ おなまえ		様													
（電話番号）		日 附 印													
裏面の注意事項をお読みください。（ゆうちょ銀行）（承認番号大第 42986 号）															

各票の※印欄は、ご依頼人において記載してください。

これより下部には何も記入しないでください。

振替払込請求書兼受領証

口座記号番号	010708		3807		(公財) 京都「国際学生の家」		金額		千 百 十 万 千 百 十 円		金額		おなまえ		依頼人		料金		備考						
加入者名		(公財) 京都「国際学生の家」										金額		おなまえ		依頼人		料金		備考					
通常払込料金加入者負担		010708										3807		(公財) 京都「国際学生の家」		金額		おなまえ		依頼人		料金		備考	

記載事項を訂正した場合は、その箇所に訂正印を押してください。
切り取らないでお出しいください。

この受領書は、大切に保管してください。

公益財団法人京都国際学生の家 後援会細則

(会員の依託)

第1条 本会は、次のいずれかに該当する者をもって組織する。

- (1) 賛助寄付金 1 口以上の拠出を約諾した法人（法人会員）。
- (2) 賛助寄付金 1 口以上の拠出を約諾した個人（個人会員）。

2 会員が拠出すべき賛助寄付金（税務上の寄附金控除あり）の額は、付則により定める。

(ご注意)

- ・この用紙は、機械で処理しますので、金額を記入する際は、枠内にはつきりとご記入ください。また、本票を汚したり、折り曲げたりしないでください。
- ・この用紙は、ゆうちょ銀行又は郵便局の払込機能付ATMでもご利用いただけます。
- ・この払込書を、ゆうちょ銀行又は郵便局の涉外員にお預けになるときは、引換えに預り証を必ずお受け取りください。
- ・ご依頼人様からご提出いただきました払込書に記載されたおところ、おなまえ等は、加入者様に通知されます。
- ・この受領証は、払込みの証拠となるものですから大切に保管してください。

収入印紙

3万円以上
貼 付

印

この場所には、何も記載しないでください。

Year Book, Vol.46. 2021
イヤーブック 第 46 号

編集者 内海博司 村田翼夫 平野克己
古川千佳 前川佳世子 木葉丈司
Naresh Bedi 山本峰丸

発行日 2022 年 3 月 31 日

発行者 公益財団法人京都国際学生の家
Kyoto International Student House
(Haus der Begegnung, Kyoto)

〒606-8325 京都市左京区聖護院東町 10
10, Shogoin-higashimachi, Sakyo-ku, Kyoto-Shi,
Kyoto 606-8325, JAPAN Tel : 075-771-3648

印刷所 (株) 北斗プリント社 (075-791-6125)

本イヤーブックの印刷・製本の一部は、
広告掲載料でまかかった。



<http://hdbkyoto.jp/>



There is only one thing that makes a dream impossible
to achieve: the fear of failure - Paulo Coelho